

一座は二十人の俳優と道具衣装等とより成る。名稱を「マルク」巡回演劇と謂ふ。マルク即ち「ブランドンブルグ」大公領の中を巡回するに止まる。蓋し遠隔の地方を巡業するときは旅費嵩みて不経済となるが爲なり。其興行する戯曲は健全にして教育的なるものを選ぶ。興行目録あり。主として隣接の各村の次第に巡回す。但し餘りに小なる村にては興行不可能なるも二三千の人口を有する町村までは興行し得。大抵小村にては興行一二夜に限る。其以上となれば見物の不足するが爲なり。興行の場所は多く旅館の廣間に於てす。

六七六

第四 圖書館事業

- (イ) 通俗圖書館設立。是は成る可く小村落にて資本の薄き所に設置するものにして一九〇八年度には館數二百廿一ヶ所、書籍部數一萬四千二百二十九冊の多きに及べり。
- (ロ) 通俗圖書館補助。右と同斷にて館數二千〇十九ヶ所、書籍部數一萬九千九百九十四冊に及べり。
- (ハ) 派遣文庫。同斷一千二百五十三ヶ所六萬四千六百六冊に及べり。斯くて書籍遞送

荷物個數は郵送六千五百、鐵道便二千五百に及ぶ。此外「リッケルト」基金部の事業として同様の事業を營めるもの尙百七十個所、二千八百十六冊に及べり。凡そ派遣文庫の書籍選定は先方の求むる儘なり。但し本部の有せざる所は新に買ひ入れて以て此需に應ず。派遣期限は一ヶ年として其間定價の約百分の八を借主より納附せしめ、一ヶ年の後には必ず本部に返納せしむ。

(ニ) 書籍賣出供給。是は書籍選擇の相談にも與かる。地方の小圖書館より目的と金高とを明記して書籍の蒐集發送を依頼し來るときは之に應じて供給す。

第五 機關雜誌

名稱を「通俗教育」と謂ひ隔週一回之を發刊す。本協會の事業には未だ派遣博物館あらず。

參考資料

通俗教育普及協會定款

同 報告

幻燈及活動寫真代付及賣捌規則

第二節 獨逸國通俗教育普及協會

六七七



幻燈目錄

右の四種は抄譯の爲普通學務局長手元に供貸す。

活動寫真目錄

幻燈使用法

幻燈附屬說明講演書

派遣講師目錄

派遣講演目錄

機關雜誌「通俗教育」

通俗文庫の勸め規則

通俗文庫書目

巡回演劇提要

總務書類

用紙雛形

シャルロッテンブルグ庶民圖書館類一包

近代庶民演劇運動アスムス選  
近代通俗教育フリッツ選

### 第三節 奧地利國獨逸奧太利通俗教育協會中央組合

奧地利國には維也納通俗教育協會を始とし若干の同種の協會あり就中獨逸語を以てする此種の協會左の七個の中央聯合組合は即ち本組合なり。

(一) 維也納通俗教育協會

(二) 全ニイデルオエステルライヒ通俗教育協會

(三) プラアガ普通智識普及獨逸協會

(四) 青年運動體育協會

(五) 奧國飲酒矯正協會

(六) 科學的活動寫真協會

(七) 維也納第九區庶民須知協會

七協會の  
中央組合

第三節 獨逸通俗教育協會中央組合



協會及組合の事業は獨逸の協會と大同小異なれども其事業は未だ彼が如く整はざるが如し其詳細は中央組合規則及中央組合報告に見るべし。

參考資料

獨逸埃地利通俗教育協會中央組合定款

同 報告

右二種は抄譯の爲普通學務局長手許に供貸す。

維也納通俗教育協會報告

中央組合代議會紀要

埃國道德會紀要

維也納通俗教育協會通俗講演廣告揭示見本

結語十則

- (一) 上來列記せる所各國の例は皆私設團體の事業として通俗教育を營むものなるが今我本省に於いて事に此に當らむとする其效果の特に多大なるもの見るべきを疑ふべからず唯之に従事する所の吏員及其組織如何を顧るのみ特別の經驗若くは智識を有せざる人衆の群議は恐らくは多く效果を擧ぐる所以にあらざるべし但整然たる組織に於ける吏僚の主として事に當るあらば此事業に同情ある人衆の事に參する未だ必ずしも寸益なしとせざるべきか。
- (二) 本事業に對する本省の事業は主として仲介的助成的獎勵的なるを尤も有功とすべく直接實施の事に當るは恐らくは大に效果を擧ぐる所以に非ざるべし從來存立する教育會青年會圖書館等を以て各國の協會に於ける地方團體會員の地位に立たしむるを以て尤も適切なる組織とすべきか。
- (三) 幻燈活動寫眞を補助物件として通俗講演を營むの通俗教育に大效あるは言を待たずと雖も之を(甲)浪花節軍談等に比して言ふべきに非ずして之を(乙)從來の



教育會青年會に於ける教訓若くは學者の講演に對して言ふべきのみ故に之を以て甲に換置せむとせば恐らくは失敗を免れざるべく之を以て乙に代用するに於いて確實なる成效を庶幾すべし。

- (四) 講演の形式は上の如し其實質は主として民風の改善國民道德の鼓吹に在るべきは因より論を須たすと雖も演劇に所作若くは中幕の必要なるが如く右等の主たる題目以外の事項例へば天文地質探検美術より外國の社會風俗歴史等雜多の事項を雜へて之を示すこと尤も必要且適切なるべし且是等も亦國民の眼界を大にするに與りて多大の効果あるものたり凡そ本事業を以て肩の凝る底の性質に陥らざらしむるの工夫は成績の良好の爲に必要な注意たるべし。
- (五) 巡回演劇の一座を組織するの便否は今暫く措いて論せず通俗教育の見地より從來の演劇を補修し若くは戯曲を新作するも亦本事業の要項たるべし。
- (六) 巡回文庫派遣文庫の事業を奨励するは亦本事業の一要項たるを失はず殊に通俗文庫の書籍選擇は明白に本事業の一要項たるべし。
- (七) 講演の仲介若くは講師派遣は尤も本省に於ける本事業が特殊の利便を以て營

み得べく亦營むを要する一要項たるべし。

- (八) 機關雜誌の發行は通例力を要すること大にして而も效果の甚だ小なるもの若し之を企つることありとするも之が決行には尤も縝密なる考慮を要すべし。
- (九) 凡そ一定の資本物質を以て我全國各地をして治く其利を享けしむるは尤も整然たる且巧妙なる機關の活動に須つ。這般執行の機關は尤も細密なる考慮の產物たるを要し紛々たる群議は之に對して殆ど效力の微弱なるを免るべからざるに似たり。
- (十) 公平を期すること文藝の統制の如きものと周到細密なる事務的活動を要すること本事業の如きものとは其性質に於いて頗る懸隔あることを遺るべからざるが如し。

以上鄙見十則以て結語に代ふ。



## 附録

- 一 官僚政治論
- 二 政友内閣と教政
- 三 經國の第一義
- 四 行政整理管見
- 五 外政の新局面



## 一 官僚政治論

一、本篇の寓意——二、官僚政治の本質——三、英國官僚政治の向上——四、奧國官僚政治の向下——五、官僚の選擇任用——六、我國官僚政治の未熟——七、速に眞正なる官僚政治を建てよ

### 一 本篇の寓意

世には、其名に依て其實を代表するに足らざるものが少からぬ。是は俗の見解から致方なき結果でもあらうが、之が爲に價值有るものを價值無きものと思ひ違ふるの弊は、頗る注意せねばならぬ。官僚政治の如きも亦其一例に洩れぬので近頃我政論界に於て、頻りに官僚政治を打破する云々の議論が聞ゆるが、斯の如き論客は、強ち破壊的の意味を以て爾か言ふに非ず、併ながら識者の耳に響く此聲は、管に角を矯めて牛を殺すの愚に陥りつゝあるのみならず、實に牛を飼はんと欲して牛を殺すの至愚に陥りつゝあるのである。

論者の官僚政治を攻撃する其精神は、我輩亦十二分に之を理解して居る、如何と



なれば、今の所謂官僚政治打破なるものは、昔藩閥打破の聲に於て現れ、中頃吏黨征伐の叫びとなり、而して今や三たび其名目を變へて、官僚政治打破となれるに過ぎずして、要するに官府に據りて之を己れが私宅と爲し、其間私黨を樹て私利を罔するものを、咎責し破壊せんと欲する、一種の改革的批評的叫び聲に外ならぬのである。併ながら藩閥打破、其名號や愚に非ず、吏黨撲滅、其名號や稍、矯激に過ぎるが、是等は必ずしも非難すべきでない、如何となれば、吏は本來黨すべきものに非ずして、各々憲法上其與へられたる職責に就て、其職務を完うすべきものであるから、若し一朝眞に吏黨と名づくべきものありとせば、吏は撲滅すべからずとするも、然も其黨の撲滅すべきや明かである。併ながら今の所謂官僚政治打破に至りては、其の意味とする所が必ずしも不合理ならず、必ずしも、國家に危害を及ぼす底のものに非ずとするも、其名號の奇にして怪なる、冷笑者流は之に對して噴飯を禁する能はず、眞實に國事を憂ふる者は、其名號の奇怪が、延て國家の政務を阻礙し、國運の發展を妨遇するに至らんことを慮るゝの情に堪へぬのである。

抑官僚政治と云ふもの其者に、何の弊害があるのか。今日我國の政治は、

官僚の必要は會議の必要

言ふまでもなく、最も進める世界文明國家、強國社會の例に洩れず、政務執行の體系的大機關として、政府なるものあり、之を批評し、之に獻替し、之を翼賛するの機關として、議會のあるあり、國民も自由に其政治的意見を發表して、輿論を作り得べく、而して總て之を統ぶるに、金甌無缺萬世一系の皇室より成る所の君主が、儼として上に在します次第である。然らば則ち此數多の國家の政務機關の要素中、若し夫れ官僚を打破すると云ふならば、亦議會を打破するに妨げざることになり、又輿論を打破するを容すことになるまいとも限らぬ。凡そ一國として斯る秩然たる、斯る複雑なる組織を以て、其政務の運行を繼續しつゝある以上、今日の官僚を打破するも、他日の官僚必ず之に代らざる能はず、甲の官僚政治無きも、乙の官僚政治は必ずや常に存せざるべからざることは、明々白々である。然らば則ち世に云ふ某政治家の私黨、某元老の家の子郎黨に由て組成せられたる、某々特定の時期に於ける某々特定の當局者を咎責し彈劾して、之を政務の圏外に刎ね飛ばさんとするの計畫は、是れ唯だ一種の私黨撲滅たるに過ぎずして、決して官僚政治の打破を以て名づくべきものではないのである。論者の意思の善悪は別問題として、其名稱の奇怪至極であ



ると云ふのは是を以てである。  
併ながら我輩は官僚政治なるものに就て、更に進んで世人の注意を請ひ、世人と共に、官僚政治が如何にあらねばならぬかに就て攻究を費すことが、刻下の急務、我國將來の發展の爲めに、極めて重要な事柄であると思ふ。嘗に官僚政治打破の聲に反對するのみならず、我輩は更に官僚政治とは如何なるものであるか、官僚政治は如何にあらねばならぬか、而して眞個に所謂官僚政治は、果して我現今の日本に成立しつゝありや、是等の諸點に就て慎重なる攻究を費し、其攻究の結果を聊か諸君の前に述べやうと思ふ。

## 二 官僚政治の本質

官僚政治所謂ビユウクラシイは、或意味に於ては、議院政治に對する名稱である。又或意味に於ては、民主政治に對するの名稱である。言ふまでもなく、天下の廣き、較く民主政治議院政治に僻する國あり、較く官僚政治に僻する國あり、其僻することの過大なるや、往々之より來る所の弊に堪へざるものも、歴史上若くは現在の事

實に於て、之を認むること能はざるに非ず、併ながら斯の如き事實上現行の制度は、國に依りて千差萬別なりと雖も、輒近社會の發展列國競争の大勢上より、避くべからざる争ふべからざる一個の變遷進動の潮流、進化の大勢あることを認めなければならぬ。即ち世は果して議院政治の方に向つて進みつゝありや、將亦官僚政治の方に向つて進みつゝありや、是が大に疑問とすべきである。此疑問に對しては、我輩は治く列國の實際を目撃し來つて、茲に斷然世運發達の大勢は、官僚政治の重要を加へつゝありと斷定するのである。

斯く言へばとて、固より世運發達の究竟は、純然たる官僚政治を以てする行政組織が實現せらるべくして、議院政治の主義方針は、結局其痕跡を絶つに至るであらうと云ふのでは斷じてない、唯々從來よりは、幾分官僚政治の重要は増しつゝあると云ふに外ならぬのである。加之官僚政治の重要な増すと云ふことは、必ずしも議院政治、殊に民主政治主義輿論政治主義の輕減を意味するものではないのである。此點に向つて先づ誤解を避けんが爲めに、茲に一言を加へて置く。

官僚政治は、要するに組織的政治である。官僚政治は、要するに特殊能力の政治で



ある官僚政治は要するに分業の政治である。官僚政治は要するに大綱細目悉く舉り各々其職責を完うし然も大體の統轄秩序として一絲亂れざる所の政治である。之に對して議院政治の官僚政治と異なる點を擧ぐるならば議院政治は常識の政治である。議院政治は大綱の爲めに細目を犠牲にするの政治である。議院政治は、新陳代謝極まりなく常に新鮮なる生氣を行政部に保留すると同時に職司に在る者をして安んぜざらしめ之をして其職司に習熟するの機會を失はしむる所の政治である。斯の如きは議院政治の長所を表示すると同時に、又幾分其短所を表示する所以であるので、茲に於て乎如何なる國家と雖も其政治組織に於て單純なる議院政治を以て満足するものは無いのである。乃ち必ず官僚政治の趣味組織を加味して以て其政治機關をして大なる弊害に陥らざらしむべく力めつゝあるのである。

併ながら軌近の大勢が何を以て官僚政治の重要を加へつゝあるか。是は官僚政治の性質に顧みれば容易に明瞭するであらう。古へ希臘列國の如き小社會に於ては實に民主的政治、近世の語を以て言へば、議院的政治が容易に行はれた、而して其

結果も亦甚だ善美なるものがあつたのである。蓋し希臘當年の列國小社會は、今日を以て見れば殆んど之れを名づくるに、國家社會の名稱を以てするに躊躇せざるを得ざる程規模の偏小なるものであつたので、例へば今日我國に於ける、新潟長野と云ふが如き地方の首府を以つて首府と爲し、之れを繞りて東京府の郡部と云ふが如き小さな村落社會を加へ以つて一國を成すの状態であつたのである。乃ち何か國家の重要な政務に關する毎に、直ちに其小社會の丁年以上の男子を悉く召集して、其衆議に依て、或は國是を定め、或は政務の方針を決することは事實上行はれ得べく、而して又最も國民全體の満足を買ふに好都合なる方法であつたのである。況や希臘列國の文化は二千餘年の古代に在りて意外なる發展を爲し、隨つて政務に參與する一般人民の思想も亦頗る侮るべからざる發展を遂けつゝあつたのである。加之此頭腦を以て當る所の問題は何かと云ふと、國家の重要政務とは云へ、其所謂國家が右の如く極めて偏小なる、殆ど今日を以て云へば、町村會市會の問題より、少しく大なる、少しく重きを加へたる程度のものであつた故に、彼等の頭腦は、優に國事に對する判斷に於て、綽々たる餘裕を示して居たのである。斯の如き事



情が即ち希臘の古代に於て民主的政治議院的政治の行はれ且つ其結果の頗る善美なる點のありし所以であるので後世民主政治議院政治を謳歌せんと欲するものは特に希臘に就て言はんと欲するならば格別苟も他の國家殊に近世的大國家社會に就てせんと欲するならば詳に希臘社會と近世の國家社會との事情の異同を考查して然る後のことにせねばならぬ。

英國の如きも近頃に至るまで其國の誇りとしつゝありし所の自治議院民主と云ふが如き政治上の主義を眞額に振翳して中央政府は成るべく地方政治に干渉せず地方は成るべく地方自ら其事を經營するの方針を執り而して中央の行政機關は國家社會の大小の割合よりも比較的頗る縮小せる單純なるものであり且其政務經營の方針主義は綱領として議院の民主的組織を以てしつゝあつたことは人の熟知する事實である併ながら輒近に於て極めて注意すべき一事は英國其者が千九百一年陸軍改革案の出た以來著々として常に陸軍の方面に於てのみならず一切の政務例へば教育行政の方面の如きに至るまで大に官僚主義の制度及び運営を進め來るに至つた次第に在る實に英國が其自治に誇り其政治的自由に誇

英國の覺醒に視よ

舊式の自由主義を英國亦之

り其議院の運用に誇りし時代は即ち英國がその人口に於て今日の三分の一若くは二分の一に過ぎざりし時代に在つたので今や既に過去となり第十九世紀の後半に於て殊に著しき列國人口發展の趨勢列國生産發達の狀態即ち列國國運發展の急激なる實際の趨勢は最早英國の如き自治の能力あり政治的自由を享有するの資格ある國民と雖も單に舊式の自由自治を叫んで之に沈視して以て得たりと爲すの時代の過去つたことを證明する次第である。

千八百八十年獨逸の教育視察特派員ワイスといふ者が英國に到りて久しく英國教育の實際を視察して而して本國へ歸り來りて一書を著して英國教育の己が國のそれよりも遙に學ぶべき美點のあることを紹介した次第であつた固よりは是れは視察員に固有なる心事で態々視察に出掛けて他の缺點を見來るよりは成るべく土産の多からんが爲めに長所を稍々誇大して之を報告すると云ふことは我國の歐米視察者にも常に見る所の事實である故にワイスの著述を見る人はその心して英獨兩國當時の教育成績を比較せねばならぬことであるが併ながら當時普魯西の教育が今日に比しては尙ほ頗る幼稚なるものであり英國を以てこれに



比するも、或點に於ては著しき遜色のありしことは明白である。然るに爾來三十年後の今日に於て、兩國教育の得失は如何であるか、實に普魯西は適良なる官僚政治を以て、熱心銳意其教育制度の整理、其教員の養成、其教員の待遇、其學風の振作、其圖書の校改を實行せる所から、今日宇内の各國若し教育制度及び行政に就て學ぶ所あらんか、先づ第一に獨逸に就て之を視察すると云ふの機運に至つたのは、實に偶然でないのである。英國は不干涉主義、自由主義、自治主義を押し立て、英國國民は獨逸國民より如何に其國を愛すべきかを知り、如何に其國を經營すべきかを知らんと云ふ、先天的獨斷を眞額に振翳して、地方の事は地方に、中央の事も亦常識的施設經營に一任し去つた結果、一年は一年より著々獨逸の進運に後れ來つたのである。流石に英國は、輒近に於て、此方式の社會經營、行政方針が著しく今日の時勢に適せざるものたるを覺り、此儘にして進み行くならば、遠からずして英國は第二流の地位を列強の間に贏ち得るに過ぎざるべきことを看破せるが故に、先づ第一に徵兵制度、軍政問題に向つて大改革の歩を進めた、而して其の改革の方針は言ふまでもなく自由自治を旨とする所の英國式を改めて、組織的體制を旨とする所の大陸主義

に改まりつゝあるのである。方ち現今に於ける文部事業、教育行政事業の改革、發展も亦正に此方針の大變遷の一例たるに外ならずして、實に其熱心銳意、陳きを捨て、新しきに就くの状態は、流石に大英國國民の襟度を欽すべく、人或は大英國は今や漸く其末路に近づけりと言ふ者あるも、是れ全く浮薄なる誣言たるに過ぎずして、大英國の維新レノヴァシオンは、正に今より始まりつゝあることを認めぬを得ざるのである。

### 三 英國官僚政治の向上

聊か右の説述の説明として、英國の文部省が、何を爲しつゝあるかを語つて見やう。

英國の文部省は、所謂英國行政三期の變遷の第三期の産物である。第一期はチャンセロール即ち宰相とも云ふべき、最高の首領が萬機を總理せる時代である。之に尋でミニストル即ち大臣とも云ふべき、高等首領が重大なる責任を負うて、陸軍、海軍、大藏、司法の如き、各種の最高最重なる政務を總攬する第二期に至り、而して更に國



家の發展と共に、從來餘り重要視せられざりし所の政務が、從來の統轄の下に在る各省の政務と同一程度に重要視せられなければならぬと云ふ時勢の大變遷の産物として出で來りたる高等官廳の時代、即ちブレンシデント、卿とも云ふべき人を長官とせる各種の省、即ち此ボオルドの並び起れる時代である。而して英國文部省は、即ち此ボオルドの一つで、之を名づけてボオルド、オブ、エヂュケーションと言ひ、商務省農務省等と相並ぶべきものである。其長官は文部卿即ちブレンシデント、オブ、ゼ、ボオルド、オブ、エヂュケーションといひ、ミニストル即ち大臣と同じく内閣に列し、唯だ其異なる所は、一は年俸五千磅なるに對して、他は二千磅を受くるの點に過ぎぬ。

文部卿は、言ふまでもなく議院に於ける有力なる黨派より出で、即ち内閣員として、政黨勢力の消長と共に進退すべきものである。其下に、斯る政黨關係に非ず、文部省と云ふ官府の首領、政務實際の總轄者と云ふべき、セクレタリイ即ち省内次官がある。其又下に更に議院次官と云ふべき、パリアメンタリイセクレタリイなるものがあつて、是は大臣と同じく、政黨勢力の消長と共に進退すべきものである。而し

て、其他の一切の文部高等官は、右の省、内、次、官、と、同、じ、く、毫、も、政、黨、勢、力、の、消、長、に、依、て、動、搖、し、更、迭、し、進、退、す、べ、き、も、の、に、非、ず、し、て、各、々、其、職、司、に、安、ん、じ、て、其、職、責、を、竭、す、べ、き、も、の、で、あ、る、の、で、あ、る。

而して茲に最も注意すべきは、英國の文部省は、全く教育家の文部省にして、毫も法律家の文部省に非ざるの點である。即ち文部省に於ける大學教育局、中等教育局、初等教育局、實業教育局、博物館局、地質調査局、教務調査局の局長以上書記官等は、皆な實地教育の事に當れる教育家出身の苦勞人、黒うとを以て之に充て、文部省内に於ける法律家は、唯だ大臣官房法律課と云ふべき所に、極めて少數の高等官あるのみにして、是等は少しも國家教育の方針、國家教育の政務に對して、斯くありたし、斯くすべしと云ふ意見を立つるの重責を荷はぬ、彼等の爲す所は、唯だ是等の問題に就て各局長より來る所の方案に實行上の形式を附すべく、或は法律と爲し、或は命令と爲すべく、法律的形式を附與するだけで、即ち假令ば之を法律技師と名づくべきものである。此點に就て我國に其類例を索めるならば、陸軍省及び海軍省に酷似するのである。我國にても、陸海軍兩省には、法學士參事官各二名づゝ之あるけれど



も、彼等は毫も軍事行政の上に對して參畫することは無いのである。彼等の任務は、唯だ行政執行に必要な法律的形式に對して、自己の智能を寄與するに止まり、之に加ふるに就中海軍省に於ては、往々國際法上の問題を惹起することあるが故に、之に對する適當の判斷を述ぶるに止まる次第である。即ち軍事行政の本質は悉く苦勞人たる軍人が之に當り、法律家は之に隙を容れぬと云ふ點に於て、正に英國文部省と好一對であるのである。

斯の如く、議院政治、輿論政治、民主的政治、組織の本國とも言はるべかりし英國が、斯る眞正なる苦勞人政治、眞正なる官僚政治を獨り軍政に於てのみならず、教政に於ても亦熱心銳意採用し、實施しつゝ、あらんとは、恐くは人の甚だ多く待設けぬ所であつたであらう。併ながら斯の如きは、實に英國輓近の進運殊に英國の活眼なる大經綸家が、列國發展の大勢、國際競争の實勢より打算して、其本國に向つて一大投藥を試みたる結果である。と云ふことに想ひ到らば、徒らに紙上の文字より各國の典型を模倣せんとする所の淺薄者流は、猛然として自ら省みる所なければならぬ。凡そ紙上の文字は實に過去の文字である。過去の某々國家社會に適切なりし制度

は、既に今日の其國に適切ならざるもの比々皆然り、其本國に適切ならざる舊套を取り來りて、之を生氣潑刺たる我國の如き新社會に施さんと欲するは、抑々實に陳腐固陋の譏を辭すべからざるものである。然るに奇體にも世には往々斯の如き日蔭町の古著屋を漁り來る所の好事家ありて、而も傲然として最も進歩せる進歩主義者を以て自ら居るが如きは、東方日出の國に於ける、一個の滑稽事と言はねばならぬ。

英國の文部省に就て、尙ほ一つ見通すべからざるは、其教務調査局を所有するの點に在る。凡そ此局の成す所は、大は露國の教育事情、獨逸の教育事情と云ふが如き、數百頁の報告を成すべき大なる研究より、小は學校用具の大小、製法、學校衛生の細目等に至るまで、大となく小となく、凡そ有り得べき教育上の問題は悉く之を網羅して、著々之を調査し研究し、而して之を報告して、天下全體の教育實務家に知らしめ、參考せしむることである。其實地に取りつゝある手段に於て或は外國の専門學校長に囑托して、己が擔當する所の學校の實狀を報告せしめ、之に酬ゆるに唯一個の勳章を以てするが如きは、勞少く費用少くして、而して其結果甚だ大なる巧妙な



此調査局の調査方法である。斯の如くにして英國は業に既に自國の教育乃至百  
 般の政務が動もすれば從來の舊套に沈溺せる所から、世界列國の伍列に後るゝの  
 危険あることを十分に自覺して、熱心銳意其缺陷を補ふに努めつゝあるの狀態や  
 實に明白である。

此状態の趨向は、實に官僚政治の發達と云ふ意義に歸するのである。

#### 四 埃國官僚政治の向下

英國に反對して、頗る面白き對照を爲すものは埃國である。埃國の文部省は、四局  
 二十一課より成立つて居る。此二十一課長の中、教育家出身の者は現今唯だ一人あ  
 るに過ぎずして他は悉く法律家である。吾輩は今回調査の爲めに、此埃國文部省か  
 ら種々好意を以て迎へられ、多大の便宜を受けた次第であるが、併ながら好意は好  
 意、力量は力量である故に、些か茲に極めて厚く埃國官僚の好意を感謝すると同時  
 に、之が爲めに其力量を批評するの權利を剝奪せられざらんことを冀ふ旨を一言  
 して、而して遠慮なく述べんと欲する所を述べるならば、實に此法律家文部省とも

埃國の  
 文部省

謂ふべき埃國文部省に在りて、教育の大體本質、教育上の政務の細目、制度の各事項  
 等に關する智能が甚しく暗昧に附せられつゝあることを感ぜざるを得なかつた  
 のである。實に吾輩は、未だ曾て文部官の位置に立つたことが無いにも拘らず、我帝  
 國のそれに関しては、我輩と雖も、諳で容易に答へ得るが如き各種の事項をば埃國  
 現今の文部當局者は、殆ど即座に之を答へ得ることが少かつたのである。此事は、餘  
 りに奇妙なる事と感じたから、更に他の調査事項の爲めに内務省を訪問せるとき、  
 少將相當なる内務省官房長某氏に會つて文官任用令に就て且つ質し且つ語る所  
 があつた。氏は語つて曰く、此國の文官任用法は、高等文官試験を通過せる後に、内務  
 省所管の高等官試験は、必ず五箇年間内務系統の地方官廳に於て下級高等官を奉  
 職し、少くも五箇年の後其成績の顯著なるものにあらざれば、決して中央本省の官  
 吏に任用せらるゝを得ず、故に内務省官吏は、實に獨り中央に於て、大本的政務に參  
 畫するの能力を備ふるのみならず、實に地方の實情に通曉し、毫も階前千里門外萬  
 里の弊なきを得る次第である。此事は司法省亦然り、大藏省亦然り、孰れも其省系統  
 の地方官衙に於ける實務の練習より立身し、且つ無數の斯る地方在勤官の中、其能



力の最も優秀なる者を本省に採用するが故に、事務も進行し、威信も亦立つと云ふ次第である。然るに文部省の如きは、全く此系統を有せぬのである。即ち文部省配下たる、教育行政の地方機關と云ふものは、別に成立する所なくして、文部本省の高等官は地方に在りて右の内務系統、司法系統、大藏系統の實務を練習せるもの、中、優秀なる者は、各々其本省に榮轉するが故に、其比較的劣等にして志を得ざる者の中より、是等の文部省高等官を任用することであるから、中央文部官の能力の甚だ劣るの是非に及ばぬ次第であると、稍々冷笑的態度を以て我輩に語つたのである。是に於て、埃國文部官吏の甚だ素人じみたる所以も明瞭した。即ち文部高等官が、貴重なる時間、貴重なる勞力、貴重なる精神を以て、五箇年以上地方に練習する所は、唯だ内務官、財務官、若くは司法官としてするに止まりて、毫も教育行政、教育事業の實際に當ることは無いのである。而して一たび文部に入りて、忽ち全國幾萬千の大小の學校に於ける教育者の上に立ちて、之を管轄し、支配し、又教育上の劃策を遂げんとすることであるから、其骨の折れることの一通りならざると同時に、其成績の極めて舉り難きは、甚だ明瞭なる事と云はねばならぬ。而して斯の如き素人に依

素人じみたる文部

常識時代の過去に

て支配せられ、監督せられ、斯の如き素人の劃策せる事に黙々として服従し、實行すべく餘儀なくされつゝある所の、大中小幾萬千の學校に於ける教育者が、衷心不平に堪へざるは固より當然の勢であるので、是に於て既に一昨年、埃國の中等教育者若干は聯合して、文部省改革建議を埃國議會に向つて提出した次第である。其聲は未だ實際に響くに至らずと雖も、埃國教育の缺點弊所は、此一事件に察するも、暴露して遺憾なきものと云はねばならぬ。斯の如きは、要するに教育の事業が今日に在りては最早常識の判斷を以て計畫せられ、擔當せらるべきに非ずして、必ずや精細なる實質的智識を要するものとなつたが爲めに外ならぬ。世運の未だ進まざりしや、教育の事は、殆だ常識を以て之を論じて差支なかつた。我國の如きも、兎角要領を得ざる常識論を以て、我は顔に教育論を振廻す人士に乏しくないことであるが、是は實に危険にして有害なる現象と云はねばならぬ。宗教の效力及び其將來、女子教育に於ける賢母良妻主義を可とすべしや否やの問題、修身教育に於て、實質主義を執るべしや形式主義を執るべしやの問題、公民教育に於て世界主義を執るべしや國家主義を執るべしやの問題、凡そ



斯の如き教化上の大小百般の問題に對し、從來の人智は、其發達せざる人智に向つては、餘りに廣大複雑なる問題として、若くは盲人蛇に怯ぢざるの比喩の如く、無智文盲なる世間の論客、若くは教育者政治家と稱するものすらも、其問題の重要な所以を覺知せざる所から、屢々常識とやらを以て判斷し、輕々に論定し去られた次第である。併ながら今日學問の進歩、殊に輓近社會學の進歩は、斯る種々の問題に向つても、學術的鐵案を下すべく、最早十分の進歩を爲し、十分の準備を遂げつゝある次第である。一方斯る問題の解決に於て一步を誤るに於ては、學校衛生が如何にあらうとも、小學校舎の窓の取方が如何に完全であらうとも、腰掛の高さが如何に釣合よく出來て居やうとも、學級の編成が如何に七十人を超過せずと云ふ法令に副うて居やうとも、女學生の服裝が如何に黒木棉三つ紋の愛國婦人會式であらうとも、其等の些末なる世に謂ふ教育學、世に謂ふ學校管理法、世に謂ふ教授法等の問題が如何に完全であるに拘らず、斯くして營まるゝ所の教育に、戊申詔書にも屢々宣はせられてある所の、國運の發展に向つて、實に三文の價値の無いものとなること、ふことは明かである。

斯る時勢に於て、斯る局面に當りて、教育の事を素人任せとなし、教育行政の事を素人行政として、恬然たるが如き國家社會ありとせば、斯の如き國家社會は、實に天下泰平なる社會と云はねばならぬ。而して、埃國の社會即ち其例であると言はぬが、之を維新以後の英國に比すれば、埃國の教育行政制度は、稍々幾分かそれに近きものと云はなければならぬ。是れ我が親善なる訂盟國として、殊に個人的に我輩に向つて、非常の親切と懇情とを盡して呉れたる、埃國の在朝幾多の官人に向つて、我々が甚だ遺憾とするの情に堪へざる所であるのである。

### 五 官僚の選擇任用

右は些か教育行政機關を一例として述べたに過ぎぬが、凡そ官僚政治と云ふものは、必ずや苦勞人政治でなければならぬ。必ずや的にもならぬ所の常識とやらを、唯一の便りとする政治であつてはならぬ。必ずや十分の實質的知識、然も體系的の學術研究より來た所の實質的知識を以て、政務の大綱小索を把握する所の政治でなければならぬ。所以は、略々茲に明かであらうと思ふ。固より一國の政府を組成す



る所の各種の省局其政務の何たるに拘らず一貫して大切なるは法律の知識である。就中公法の知識である併ながら法律の效用は實に政務の形式的方面に於て存するのみなることを忘れてはならぬ形式實質共に法律に在るのは一司法省である。陸軍省に於ける行政上の實質的知識は軍事上の知識である海軍省のそれは海軍の實質的知識である文部省のそれは教育教化の實質的知識である大藏省の實質的知識は財政經濟のそれである農商務省の實質的知識は農學林學商業學工學のそれである逓信省の實質的知識は郵便電信運輸交通のそれである而して外務省の實質的知識は外交のそれである内務省の實質的知識は民政土木衛生等のそれである。即ち斯の如き各種の實質的知識よりして國家の時務は何であるか社會の要務は何であるかを明かにし愈々此法此策を以て國運の發展を助けんとし。て。借。て。愈。々。之。を。實。地。に。法。令。の。形。に。於。て。實。行。せ。ん。と。す。る。時。に。於。て。始。め。て。法。律。の。知。識。が。必。要。と。な。り。來。る。の。で。あ。る。

凡そ法律を知りて其他を知らざる者に固有なる偏癖は兎角先例に泥んで進歩發達の道を知らざることには在る既に成立せる所の法令をば金科玉條と爲し金城

鐵壁と爲し而して自らは十重二十重の固圍に陥り縲繼に囚はれつゝあることを自覺せぬ點に存する言ふまでもなく社會の發展は秩序と進歩との二面に在る。恰も物體の運動に遠心力及求心力の二種の力が働くと同じく社會の堅實なる發展には必ずや一面秩序を重じなければならぬ而して法律家の最も長ずる所は此秩序の方面の權化たる點に存する。故に國老い事定まり創業の時代遠く去つて今や正に守成の時代たるを覺悟しなければならぬやうな國運時勢に在りては法律家の跛扈は寧ろ國家社會の爲めに賀せざるを得ぬ併ながら國運の將來洋々として春の海の如く活潑々地の生氣に富んで將に宇内の片隅より起りて列國と鹿を中原に争はんとする如き向上進歩發展奮闘の國是を有する國家社會に在りては幾分秩序を遺却するところもあるも進歩理想を輕視することあつてはならぬ而して我國は今や如何なる境遇に在るか嘗て一たび下り坂に向ひ七つ下りとまで解釋されたる所の英國は其更始維新の國是を定めたる後に於て將た如何の狀に在るか是は政務の局に當る者よりも天下國家の全體を雙肩に擔うて立つ所の眞に識者を以て任ずる者が更に大に注目して適當なる判斷を下さねばならぬ所の絶對重大な



る問題である。

古來支那には、一種の惡制度が存立した。即ち科擧の制度であるが、科擧の制度に於ても亦採るべき點が無いでもない、それは即ち試験制度である。試験は實に一種の人爲淘汰、一種の理想的淘汰を、人間社會の成分に向つて施す所以に外ならずして、言ふまでもなく淘汰をする前に、社會進化の増進的理法に基いて、教育し、訓育し、一般品質の改良上進を圖らねばならぬが、斯の如く、十二分に積極的方面、増進的方面に向つて力を用ゐたる後に於て、更に其中の最優者を拔擢する、所謂人爲淘汰の方法、之を名けて試験と云ふのである。故に科擧を罪するも、試験を罪することは甚だ不當とせねばならぬ。併ながら科擧の大なる弊害、殆ど嗤ふべきにも値する所の惡制度たりし所以は、實に目的と標準との甚しく契合せざる點に在るのである。即ち科擧は、今日を以てすれば高等文官とも云ふべき、甚しきは武官たるべき人をも拔擢せんとするの試験でありながら、其試むる所は、天下國家の經營の大策に非ずして、徒らに經子の註釋、八股駢驢の文章に於てしたのである。支那の二十二史を通じて、其各朝の晩期に於ける政治家は、徒らに舟中大學を講ずるの徒多くして、遂に

科擧の點弊は何の點

崖下零丁を賦するの氣概に乏しき者を輩出するに至つたのは、斯る目的と標準との齟齬せる人爲淘汰の結果として、少しも異しむを須むざることである。然らば則ち今日列國が用ゐつゝある所の官僚選擇の方法は如何であるか、之に就て、一國を經營せんとする者は、支那の科擧の弊害に鑑みても、猛然として深く省みなければならぬことと信ずる。

獨逸の官僚

獨逸は試験制度の發達に於て、天下に卓越する國である。其行政官拔擢の方法は頗る善美を盡して居るが、併し其試験制度に於ては、尙ほ未だ研究の餘地を残さぬとも限らぬ。獨逸にては、少くも三箇年大學に於て法律經濟等の學を専攻せる後、第一回の試験を受け、而して少くも一箇年は、裁判所に於て法律事務見習を爲し、引續き少くも三箇年は、各種の地方官廳に於て行政見習を爲し、然る後に第二回の行政官試験を受け、法律、就中、公法、經濟學、財政學、國際法等の試験を通過するに於て、始めて茲に一人前の高等官の新參者が出来るのである。然る上に於て各々其職司を明かにして苦勞人的徑路を取つて進むことは、誠に善美なる制度であるが、其行政一般に通じて右の如き試験あるは、多少批評の餘地があらうと思ふ。我國の制度は稍



之に髣髴たるものである。併ながら試補見習の時期の極めて短きこと、従つて専門的事務、一般學術の以外に各職司の専門的修養の甚だ乏しきこと、之が獨逸に比して、尙ほ多く攻究の餘地を存する所以の一つである。一たび本官に任せられたる後に於て、必ずしも行政事務の専門に依りて其擔任を分ち、其修練を異にすることの確然たらざるは、殊に著しく攻究の餘地を存する第二點である。就中最も我國に於ける面白き制度は、同じく内務省の官吏となるにしても、それが地方官吏となるか、若くは本省附となるかは、仕官の初より定まり、而も主として大學卒業の得點に依て定まる。これこそは、最も珍らしき制度と云はなければならぬ。我陸軍省が、軍事研究として、少壯有爲の中尉、大尉、若くは少佐を、駐在員の名に於て外國に派遣し、彼等が研究調査視察を遂げたる後歸朝するや、當初より之を參謀本部、教育總監部、若くは陸軍省の如き要路に充てんとする目算であつたにも拘らず、直ちに先づ地方の邊鄙なる聯隊へ逐拂つて、而して其パターの香を抜き、其ハイカラを低くし、而して其座上の空論を剝取つて、活潑なる我國軍隊の實務、實際的の空氣を呼吸せしめ、斯の如きこと六箇月若くは十箇月にして、始めて之を當初の目的たる參謀本部等

我陸軍

の要路に喚還すが如きは、實に人を教育し、人を訓育し、又人を使用するの道を知るもの。と云はねばならぬ。我國諸般の政務國務の中で、獨り陸海軍が嶄然として拔群なる成績を呈すると云ふのは、獨り之を國民忠勇の思想が先天的であると云ふの點にのみ歸すべきでは斷じてない。多くの點に於て我國の朝となく野となく官となく民となく、諸方面の事に當る人士は、何が故に我陸海軍が、國運發展の有ゆる方面の事業に、遠く抽んで、絶大拔群なる功績を奏し、世界の驚歎する所となつたか、の原因を審に思うて、而して學ぶ所がなければならぬ。

### 六 我國官僚政治の未熟

併ながら右は單に大體の評論たるに過ぎぬが、今日我國に於ても、行政に於ける實質的知識を重んずるものは、第一に陸軍、第二に海軍、第三に大藏、第四に司法がある。凡そ是等は、果せる哉其成績の顯著なるものを見る次第である。外務も亦追々苦勞人外務となりつゝあるので、飛入外交家杯は追々に減少する次第であるが、併ながら飛入外交家にも長所あり、生拔の外交官にも短所があると云ふべきは、兎角苦

實質的知識の尊重



勞人外交官は、細事には熟して、而して大事に通せざるの弊があるのである、是は即ち外交官の養成及び其試験制度に於ける短所が、直ちに靚面に現れて居る次第であるので、例へば法律の力は十分であるが、外交史一般を知ること甚だ粗雑であると云ふが如きは、我國外交官の養成及び試験の短所の一つである、之が爲めに世界の大勢に通ずるが如き人が、假りに飛入外交官となることがあると、其方が寧ろ苦勞人外交官を壓するの成績を呈する次第である。

右は較<sup>△</sup>實質<sup>△</sup>的知識<sup>△</sup>を有する、苦勞人行政家の居る諸<sup>△</sup>の省を擧げたのであるが、未<sup>△</sup>熟<sup>△</sup>なる實質<sup>△</sup>的知識<sup>△</sup>を以て事に當るの省を擧ぐるならば、先づ第一に文部、第二に農商務、第三に逓信、第四に内務を擧げなければならぬ、是等の局に當る所の官吏は、初めより必ずしも之に向ふべき素養を以てするのではない、併ながら茲に最も注意を要するとは、其當る所の政務の性質上、若くは其事項の極めて單純なる所からして、特に専門的實質知識を要せざるが爲め、或は其事項の繁瑣なるも、然も零碎なる所からして、發達せる常識を以てせば事足りて、特に専門知識の之に應ずべきもの無きが爲め、斯る特別なる専門的素養の無き人士が其局に當りても、格別若く

は何等の弊害を現さぬものがあるのである、例へば内務行政に於ける各種の事項の如きは、其最大適例である、逓信の事の如きも、其事たるや甚だ單純なる事柄であるが故に、一年若くは二年、忠實に省内に於て其事に當るだけで、立派なる逓信行政官を得ることが出来るのである、然れども内務行政に於ける衛生行政の如きは、到底簡單なる常識、若くは素養なきの素質を以ては當り得る所はでない、普魯西の如きは、斯る理由がある爲めに、衛生行政は之を文部省に屬せしめて、文部省は、詳しく言へば、宗教教育衛生省と云ふ名を取りつゝあるのである、農商務の事の如きも亦然りて、農業の如きは、其性質上保守的とは云ひながら、實は日進月歩極りなきものである、商業の如きも亦然りである、併ながら其事は、未だ教育の如く高尙複雑なる事柄ではないからして、或は其出身必ずしも農學専門家に非ずとするも、稀には善良なる農商務行政官たる人が出ぬとも限らぬ、獨り教育の事に至りては、其問題たるや實に至難中の至難、至深中の至深、而して一步を誤れば、實に國運の前途に影響するの大なること、殆ど陸海軍務に譲らざるものである、斯の如き事に向つて、何等の素養無く、單に法律の知識の發達せるものを充てるのは、頗る無謀の事と云はね



ばならぬ。

茲に一言斷り置くべきは、我輩は我國の文部省に就て斯る議論を立つるのではない、何となれば、我國の文部省は、例令其出身は法律出身なりと雖も、殆ど總て若干の月日を海外に遊んで、教育行政を専門的に調査せる人々より成立つて居るのである、我輩が此論文に於て論せんと欲する所は、一般に世界全體に通じて適用すべき所の、行政の原理論の一部に觸れんと欲する次第であつて、必ずしも我國現下の官制等に向つて、紛更を試みんとするが如き、不穩なる態度と見解とを懐くものではないのである。

七 速かに眞面目なる官僚政治を建てよ

斯の如く述べ來れば、官僚政治は、今日列國競争の上に、必至なる、又必要なる政治制度の一つであることは明瞭である。古代に於て、極めて規模の小なる文明國あり、極めて規模の大なる文明國があつた。極めて規模の小なる文明國は即ち希臘の列國にして、極めて規模の大なる文明國は即ち羅馬である。羅馬は幸にして希臘の僻

國の大小に察せよ

説を襲はず、自個獨得の考を實行して、以て自個獨得の發達を遂げた。希臘が其哲學を以て、其文學美術を以て、古代世界に誇りつゝありし間に、羅馬人は其尙武の精神を以て、其自由を愛護するの精神を以て、其秩序を重んずるの精神を以て、内には秩然たる法律制度を制定し、外には頻りに未開民族を克服して其版圖を擴げ、然も新たに得たる所の領土には、其秩然たる法律制度の網細工を擴げて、何等の缺壞崩落を來さなかつた。次第である。羅馬人が希臘の哲學に憧れ、希臘の文學美術に憧れ、嬖妍たる希臘美妓を寵致して之を寵愛するに至つたのは、即ち羅馬帝政の初年以後に在るので、羅馬帝國の隆々たる勢威は、是よりして次第に陵夷するに至つたのである。我々が羅馬と希臘との得失に鑑むべき所は、今日の世界諸國の一等國なる者は、果して希臘に近きか、羅馬に近きかの點に在る。希臘列國は、僅に數十萬の人口を有して居つた。羅馬は、其首府のみを以て三百萬の人口を有し、其國家を以ては、殆ど一億に近き人口を有したのである。而して今日世界の一等國は、少きは四千萬、多きは一億四千萬の人口を有する次第ではないか。希臘列國は僅に數百方里の版圖を有し、羅馬は百萬餘方里の面積を有して居つた。而して今日世界の一等國は、小なる



の時世後れ  
の見解

も五六萬方里大なるは二百萬方里の面積を有しつゝある次第ではないか。然らば則ち今日の世界一等國が希臘と比肩することを期すべしや。將た羅馬と雁行するを期すべしやの疑問は殆ど研究を要せずして自ら明かなる事とせねばならぬ。彼の自由と謂ひ自治と謂ひ議員政治と謂ひ民主政治と謂ふが如きは之を小規模なる國家に施すべくして之を規模大なる近世的大國家に施すべきではないのである。世に社會主義と云ふものあり、徒らに國內の秩序平和を旨とし、徒らに個人の幸福をのみ見て、國としての發展、世界列強の間に處する己が國の運命を如何にすべきかに向つては、何等の思慮を費さぬ者共である。然るに今日所謂自由主義所謂素人政治主義所謂常識政治主義凡そ斯の如き主義は言ふまでもなく其の多くの點に於て固より社會主義と日を同うして談すべきに非ずと雖も、唯夫れ國運の發展を希圖するに於て既に甚しく時世後れの見解であると云ふことに氣の付かぬ所は或は彼と其科を同うするではなからうか。般鑑遠からず英國に在り、唯だ英國は其科の同じきに注意して自ら改め、猛然として自ら新たにし、以て其更始維新の新たなる進路を開いた次第である。自治の本家本元、議院政治の本家本元たる英

國に於て眞正なる意味に於ける官僚政治が斯の如く駸々として發達しつゝあることは、他山の石以て玉を攻くべし、我々の取つて以て大に鑑みとすべきものと云はねばならぬ。

國の柱石

我輩は、此度世界の文明國二十餘國を歴遊して、十一年振りに再び獨逸を見舞ひ、其國情の頗る變遷せることを注意し、其大都府の生活は、要するに國家の著實なる發展に向つて、甚だ賀すべからざる者あることを認め、併ながら假令斯の如き風が滔々として獨逸帝國の上下都鄙に瀰漫するに至つたと假定しても、大厦の覆らんとするを支ふる所の一本は必ずや獨逸の官僚社會にあるであらう。何となれば、獨逸の官僚は、兎も角も獨逸民族の精銳を集めて居る、嚴肅なる人爲淘汰の結果として、最も有爲なる獨逸社會の成分は、其官僚に集つて居ると謂ふべきである。併し獨逸の官僚組織と雖も、固より未だ以て理想的完全と爲すに足らぬ。若も獨逸の官僚組織以上に、若くは以外に、長所を多く有する所の官僚組織が成立するならば、斯る官僚組織を有するの國家は、少くとも其柱立、其結構に於て、強き地震若くは暴風に對して十分の抵抗を有する所の國家と謂ふべきである。



夫れ官僚政治は組織的政治である、特殊能力の政治である、分業の政治である、而して實に専門的知識専門的修練の苦勞人政治である、如何に政黨不可入の門標を掲ぐるとも、如何に嚴重なる一種の試験制度の關門を設くるとも、職司に適應する實質的知識専門的修練なき官吏より出る所の政治は是れ實に似て非なる官僚政治と謂はねばならぬ、吾輩は我國に於いて官僚政治打破といふ一派の主張に正面より反對すると同時に、我國の官府をして一日も速に眞正なる官僚政治を行ひ得るの官府たらしめんことを切望して止まぬのである。

若し夫れ官術を以て己が家と爲し、官府に依て私利を營み、資縁攀附黨援比周、以て官僚政治の實此に在りとするが如き者あるならば、是れ獨り官僚政治の賊たるのみならず、之を我國に見んか、即ち直ちに王命を賊するものと云はねばならぬ、斯の如きは、固より我輩の正大剛健を期する所の筆陣を煩すの價値あるものではないのである。(明治四十四年一月太陽)

## 二 政友内閣と教政

### 一 緒言

一、緒言—二、永久の一等國は教化國—三、我國初等教育の不完—四、我中等教育の不備—五、恬然たる留學制度—六、教育行政機關の失形—七、地方教育行政機關の逆轉退化—八、政友内閣亦噴火山下に湯治するか

今年一月の本誌上に於て、吾輩は『官僚政治論』と題して、最も新しき、最も進歩せる、行政組織上の所見を述べた、然るにも拘らず、世は官僚政治と云へば、直ちに私黨政治を意味すと爲し、政黨政治と云へば、直ちに公黨政治を意味すと爲す、如何にも我國の現今に於ける反對黨の眼底に映ずる官僚政治は、一種の閥族政治、一種の私黨政治に相違なからう、併ながら所謂官僚派なる者の眼底に映ずる政黨政治が、果して眞に公黨政治たるの實を呈するであらうか、是は強ち官僚派のみと云はず、一般政治家の疑問とする所に相違ない、併ながら現今の政友内閣は、先づ其組織に於て頗る私を捨て公に就けるの觀を呈した、即ち其政友内閣たるにも拘らず、陸海軍は



依然たる  
教政

始く措くも、他に大藏、農商務及び遞信の三省に向つて、純然たる黨派以外の人物を任用した、若も私に殉じて公を捨つるの狭き考があるならば、斯る形體を具ふる内閣組織は出来ぬことである、即ち此點よりして、先づ此度の政友内閣が、幾分所謂公黨政治の方面に向つて進みつゝあることを期待すべき理由がある。

斯る理由の下に、我輩は大なる期待を以て、今回の政友内閣に屬望するもの、一人である、我輩の所謂官僚政治の尺度に照して、前内閣が幾許り好き及第點を得たかに就ては、遺憾ながら、或點に就ては及第點以上であり、或點に就ては及第點以下であつたと宣告するの止むを得ぬ殊に最も遺憾とすべきは、我輩が『官僚政治論』に於て論究せる、我國官僚政治の最も不完全なる發達に止まれる局面に向つて、前内閣が依然として其面目を改むるの遅々たるものありし點に存する、其方面は何れに在るか、即ち教政、更に狭く云へば教育行政の方面に在る。

我輩は強ち世人に雷同して前文部の失敗を咎むるのでない、我輩の『官僚政治論』を一讀されたる讀者は、我教育行政從來の弱點の、決して大臣其人に存せず、若くは文部の當局大小官吏其人々にすらも存せざることを審かにせらるゝであらう、教

の政友内閣  
責任

育行政の不振は、根本に於て、其由來する所深く且つ大なる者がある、不幸にして、我從來の教政當局者の缺點は、其人々の無爲無能には斷じて存するにあらずして、我國教育行政不振の眞の原因に向つて、一雙の活眼を開き得ざりし點に存する、故に此度政友内閣が組織せられ、教政の當局者、亦其間に於て頗る重きを爲す所の人物を迎ふるに至つた以上、我輩は更に復た、我國教政の不振の由て來る所の眞原因を指摘して、一は以て新當局者の注意を促し、一は以て我天下萬衆の警覺を促さんとするものである、蓋し文部は文部大臣の文部省に非ず、實に我日本國民の文部省ではないか、然らば則ち文部省の缺點を指摘し、政府の他の部局に當る者若くは社會の他の業務に携はる者と相雷同して、徒らに文部の失態を嘲笑し、徒らに文部の無勢力を慢侮して得々たるが如きは、是れ實に日本國民の如何なる考より出づるかを怪まざるを得ぬ點である、他人ならばいざ知らず、自ら我家の屋根の漏ることを嘲り、我家の柱の傾けるを譏るが如きは、到底常識ある者の仕業と見ることは出来ぬ、而して二十年來、我國國民は、滔々として此非常識を敢てしつゝあつたのである、是れ我國國民が、先づ以て我輩の忠言に聽いて、大なる警覺を成し、而して斯國



民を基礎として立つと稱する政友内閣は、亦國民と與に共に一大警覺を成し、眞個に教育行政の不振の眞原因を索め、之に向つて拔本塞源の救済策を講ずることをせなければならぬといふ論理上の必然の結論に達する所以である。

## 二 永久の一等國は教化國

頃者一代の偉人乃木大將が、歐米を漫遊し來られたる其土産話として世に傳はる所に據れば、大將は、歐米各國を巡遊して我國が一等國の虚名を得たるの、寧ろ極めて愧づべきを感じたと言はるゝのである。我輩も亦此感を大將と同じうするもの、一人である。大將は謙遜の徳を充分に保つて居る人でありながら、我軍事上の成功は、必ずしも一等國の伍伴に就くに足らぬとは言はれぬ、我輩も亦之に向つては何等の異議を挟まぬ、我國が一等國と云ふに足らざるの實は、實に軍事に在らずして外交に在らず、外交に在らずして財政に存する、財政に在らずして實に教育に存する、教育に在らずして實に教育行政に存する、教育行政に在らずして、實に教育行政組織に存すると極言せねばならぬのである。

抑々今日の所謂一等國は、最早強大なる軍備を要して、居直り強盜式の外交に成功するもの、謂ではない、泥棒仲間にも、強盜は強盜より幅が利けず、其強盜仲間にも、居直り強盜は殊に幅が利けぬと云ふではないか、即ち時代後れの政客が夢想する如き、居直り強盜式の外交若くは強盜式の外交は眞の一等國の執るべき方針ではない、國家の政務が數々ある中で、國家が始めて強大を致すや、先づ軍事上の成功に於てする、併ながら軍事上の成功の永續すべき基本は、其財力の裕なるにあらねばならぬ、財力の永續すべき資本は、國民の智力に待たねばならぬ、而して此智力、財力及び軍事に依て代表さるゝ強力、此國民的三大勢力を最も能く培養して、永久に萎靡すること無からしむる總ての根柢は即ち徳力である、此四個の力の中、後の二は最も直接に、前の二は稍、間接に、何に依て培養せらるゝか、即ち教育に依てせらるゝの外は無いのである、更に之を汎く言へば、教化に依るの外は無いのである、故に眞の一等國として各國の畏懼を惹く所の國は、必ずや大に力を教化教育に用ゐ、少くとも此點に於て、世界の何れの國よりも劣らざる所の國家であらねばならぬ、

昨年伯林大學の創立一百年紀念祝典の舉行せらるゝや、獨逸は既に二十一個の



完全なる大學を有し、幾多の學術上の造詣發明、及び其發明の應用に依て、教育並に學術の發達に於て、業に既に天下に冠たりと呼べるゝに拘らず、維廉第二世皇帝陛下は、其天を衝く所の髯の下より、其天を衝く所の兜の下より、更に皇帝維廉學問獎勵協會を紀念事業として新たに設くる計畫を宣言し、獨逸國の學識あり若くは財力ある階級は、響の如く之に應じて、立ろに五百萬の資金を得たのである。獨逸が國際競争上の永久的戰備を修むること、實に斯の如く周到にして、宏遠なるものあるは、是れ實に獨逸の勢力が、時として外交上の小波瀾に遭遇するに拘らず、隱然として益々其重きを加へつゝある所以と云はねばならぬ。

顧みて之を我國に見たならば如何であるか。濟生會の事や甚だ美なり、併ながら教育基金一千萬圓を如何にせんとするか、三千萬圓の濟生會の資金が立ろに集まると云ふことは、國家の爲めにも賀すべからざるに非ざれども、我々は最も桂公爵の爲めに賀せんと欲するのである。如何となれば、此世智辛き世間の景氣に際して、公爵一たび口を開けば三千萬の資金立ろに成る、日本國民如何に口を開くも、貸した金を取ると云ふ極まり切つた性質の一千萬圓が、中々教育の方面に回収し來ら

濟生會  
三千萬

永久の  
一等國

ぬではないか、吾輩は桂公爵の偉大なる名聲徒らに輝いて、國民の力の轉た甚だ乏しきを感じざるを得ぬのである。政友内閣は、國民を基礎として立てる内閣なりと聞くからは、我々は、斯の如き些末なる問題は、殆ど朝飯前の仕事として解決さるゝであらう、又解決さるべき理由があると信ずる。

併ながら我輩は、斯の如き些末節の問題に向つて、敢て千萬言を連ねやうとするものではない、唯世界の一等國と云ふ榮稱は、世俗の夢想するが如き、日清日露の兩戰役に於て、可なりの野戰及海戰上の捷利を博したと云ふが如き事を以て直ちに受けらるべきものでないことを注意する。眞個の一等國は、必ずや一時の一等國であつてはならぬ、必ずや永久の一等國でなければならぬ、永久の一等國は、必ずや教化教育に於て、少くとも他の列強に劣らざるだけの經營施設を成し遂げつゝあるものであらねばならぬ。

然るに今や我國の教化教育の實勢は如何之を歐洲各國に比して如何なる状態に在るか、我輩は此點に向うて聊か一日の長を利用して、國民及び政黨諸君の前に、敢てデモンストラチオン即ち供覽を試みやうと思ふのである。



### 三 我國初等教育の不完

普魯西の  
小學教員

先づ初等教育より始めるならば、普魯西の小学校教員は、己が教ふる所の小学校八年の卒業以上に、更に三ヶ年の豫科修業、及び三ヶ年の師範學校本科修業の上、通例一ヶ年の志願兵生活を爲し、而して後更に三ヶ年の訓導試補として勤務し、固より其間は正式の訓導に非ず、本式の月給を貰はず、即ち己が教ふる小学校卒業以上、更に十ヶ年の鍛鍊を経て、始めて小学校教員一人前のものとなるのである。我國の小学校教員は如何であるか、我國にては、己が教ふる小学校卒業以上、通例更に一ヶ年の補習を爲し、而して師範學校に入學して、四ヶ年にして直ちに小学校本科正教員の免狀を得るのである。即ち獨逸の教員が、其教ふる生徒と十ヶ年以上の鍛鍊の差あるに對して、我小学校教員は、五ヶ年の差を有するに過ぎぬ。況や我國に於ては、斯の如きは實に理想的教員で、斯る師範學校出身者に混ふるに、所謂一年講習の結果として養成せられたる、准教員を以て補足せられつゝあるのである。専科教員は、姑く措くも我

小學教員  
の待遇

小学校教員總體の學力は、之を平均すれば、實に小学校卒業以上、殆ど三ヶ年乃至四ヶ年に過ぎぬのである。然らば、則ち我國の小学校教員は、獨逸の教員に比して、約三分一の鍛鍊を以て事に當りつゝあると云はなければならぬ。獨逸が初等教育に於て先づ優尙なる成績を呈し、國民國家社會も亦國民教育の有効なるに信頼しつゝあるのは、之に職由すること大なりと云はなければならぬ。況や寒村僻地に於ても、斯る綽々たる餘裕ある教員が教育の事に従ふことであるから、複式教授を爲すことと極めて容易にして、教員三人教室三個を以て、綽々として八ヶ年程度の授業を爲すことは何處にも行はれつゝある次第である。

斯の如き小學教員に對する待遇法も、亦隨つて甚だ至れるものがある。我國に於ては、小学校教員俸給國庫補助の聲が徒らに大にして、既に數十年を経て居る併ながら、我國の政客論客は、何事に對しても徒らに希望の聲を高むることを知つて、計畫を立てることを知らない。是等の希望があるならば、何故に此希望を充たすべき調査研究の事業を始めぬのであるか、苟も調査研究に志があるならば、單に一個の獨逸のみを參考するも、既に大に得る所があるのである。之を概説すれば、普魯西に



於ては、學校所在の町村自治體と各地方と及び國庫とが、一定の比率を以て、小學校教員俸給基金なるものを醸出して、此醸出せる金額よりして、學校生徒の員數、町村自治體の富の程度、及び教員の資格、及び成績に應じて、其俸給を支出するの制度が、確然と立ちつゝあるのである。埃太利に於ては、人口及び富の程度に比例して各地比率を異にするも、亦一定の方法に於て、其間に不公平なき教員俸給支出の途が立ちつゝあるのである。我國に於ては、必ずしも小學校教員俸給の國庫支辨と云はず、せめては小學校教員の俸給に對し、一府縣を以て其割出區域とするに於ても、亦現行よりも數層優遇の目的を達するの途は、強ち之を索むるに困難でない、併ながら總て斯の如き綿密なる設計を爲さんとするには、先だつものは調査事業である。我國小學校教育の不振は、學制にも在らう、町村の状態にも在らう、教科書にも在らう、而して教員の養成及び待遇にも在らうが、併し總て是等を通じて、其根柢は何等の調査の行はれざるの點に於て存すると云はなければならぬ。調査事業の行はれざるは、恰も診察を須ひずして、素人忠告の投藥を爲すの類である。

調査事業の必要

#### 四 我中等教育の不備

進んで中等教育に就て之を見れば、更に甚しきものがある。實に中等教育を顧みる毎に、我輩は乃木大將以上に、日本の一等國と呼ばれることに對して、愧汗背を沾すものがある、今少しく之を御話しやう。

歐洲の文明先進各國に於ける中等教員の程度資格は、略ぼ普魯西を以て其代表として見る事が出来る。普魯西の中等教員は、己が教ふる所の中學、之には低度の尋常中學と高等中學とがあるが、其尋常中學を卒業せる上、更に高等中學を修むること三年、大學に於て研究すること三ヶ年、而して嚴重なる國家の教員檢定試験を受け、之に及第せる上に、更に一ヶ年間教生として實地授業の事を經驗し、更に一ヶ年間教諭試補として實地の経験を積み、是に於て始めて教諭の資格を得る、然れども其始めて任せらるゝや、多くは教諭に非ずして助教諭である、斯くして一定の時期の後教諭に任せられ中學教育に従事すること十二年にして、茲に教授の榮稱を得るに至る、即ち普魯西の中等教員の資格は、尋常中學卒業以上、少くも約九ヶ年の

普魯西の中等教員



鍛鍊を経て居るのである。

翻つて之を我國に見れば如何であるか。我國の中等教員は第一、文科大學若しくは理科大學卒業の文學士、理學士、第二、高等師範卒業生、第三、舊理科大學簡易科若しくは臨時教員養成所卒業生、第四、教員檢定試験及第者、及び第五、無資格者、此五類より成立するのである。第一は尋常中學卒業後六ヶ年の鍛鍊、第二は四ヶ年、第三は二ヶ年、而して第四は尋常中學學修の經驗の殆ど全く無きものである。即ち普通智識に於て、己が教ふべき中學生の學びつゝ、知りつゝある所の事を知らざる者も少からざる次第である。之を平均すれば第五は姑く沙汰の限りとして之を描くも、第一乃至第四に於て、僅に平均三ヶ年乃至四ヶ年の素養あるに過ぎぬと云はねばならぬ。斯の如き中等教員の實狀を以てして之を普魯西に比するならば、實に其效果の擧らざることは、殆ど必然の勢と云はねばならぬ。併ながら是れ決して教員各個の罪ではない、如何となれば、教員各個は其力一杯の事を爲しつゝあるにしても、如何にするも、長袖善く舞ひ多錢善く買ふで、普魯西の九ヶ年、即ち我に比して三倍以上の素養ある中等教員の爲すが如き成績に達し得ざることは明瞭である。

我輩第二回の歐洲漫遊に於て、普魯西の文部省の要路に立てる官人に質すに、學校騒動の事を以てした、彼等は殆ど學校騒動の何たるを理解するに苦む面色であつた。蓋し普魯西に於ては、中等教員は、各中學所在地に於ける『王様』である。之に對して生徒が反抗する、若くは慢侮の色を以て地方の有力者が之に接すると云ふが如き事は、全くあり得べからざる事柄である。然るに我國は如何であるか、今や教育に權威無く、中等教育に權威無く、中等教員に權威無く、而して學校騒動は、些末なる事柄にても容易に激發する次第で、以て既に權威無き教育を復た更に權威無からしめつゝあるの實狀である。而して中等教育を受くる青年學生は、即ち取りも直さず我社會の中等階級を形造るべきものである以上、此中等階級が人間修養の最も重要ななる中學時代に於て、何等の權威に接せず、教育の權威に服することの經驗を有せざりし結果は、我社會の活氣無く、秩序無く、發展無きことを豫言するものに非ずして何であらうか。

若も我國運が、一等國とならずにしまふべきものとするならば論ずるまでもないが、我國は既に朝鮮の併合をも實行して居る、我國民は、朝鮮の宗主國民たるの品



位實力あるものである、此程度に於て、我國民と普魯西其他の一等國民と、何等異なる所は無いのである、而して少壯獨逸國民は、其實力ある中等教員に對して、如何にも子弟の道を完うし、恭順にして能く其指導の下に勵精する、我少壯國民は之に反して、中等教員に對しては殆ど子弟の道を解せず、往々之に加ふるに學校騷動を以てする、併ながら我輩は斯の如きは寧ろ避くべからざる現象と思ふ、如何となれば生徒は既に一等的生徒にして、教員は今尙五等國七等國の教員であるとするならば、如何にするも此場合不調和が起らざるを得ぬ筈ではないか、併ながら此の如き教員を中等教育に於て尋常とするの制度をば、國民及び政黨若くは政治論客は、日本の貧を口實として己むを得ざる所以の説明としやうとする。

所で文部省といふものは、中等教員をば精々御し易きものとするに腐心して居る、如何となれば、彼等は行政の首腦を以て自ら任ずるが故に、彼等の胸間に往來する綱領は、秩序と服従とである、故に訓令に次ぐに訓令を以てし、其部下中等教員に臨むや、實に教訓指導親切にして至らざるなきの状態である、併ながら其効果は、到底見るべきものが無い、軍隊に於てすら常に言ふが如く、命令及び服従は軍紀

御し易きを旨とする

の生命である、併ながら其範圍に於て、獨斷專行が極めて必要である、獨斷專行を爲すの能力ある者にして、始めて一個有力なる部隊長となり、或は有力なる獨立任務を爲すに足るの下士卒と謂ふべきである、然るに教育は、最も獨斷專行を要するの大なるものである、教室内に於ける教師は、少くも其生徒に對して絕對的人格ならざるべからず、然るに此教師が先づ校長に抑へられ、校長は縣視學に抑へられ、縣視學は縣の教育事務官に抑へられ、縣の教育事務官は内務部長に抑へられ、内務部長は縣知事に抑へられ、縣知事は地方局長に抑へられ、地方局長は内務大臣に抑へられ、而して文部省は又傍より訓令の雨下を以て之を掣肘する、斯の如くまでするに非ずんば一人前の教員の職が務まらぬと云ふが如き教員を以て、中等學校の各部を充たして居るとするならば、激潮たる新進國民、年少氣銳の青年が、之に對して不満を感じざらんと欲するも、豈に得べけんやと云はねばならぬ。

故に我教育行政の體統は、内務と地方教育、文部と學校長教員等との間の秩序は、極めて美事に行つて居る、が併ながら其教員と生徒との間の秩序が洵に美事に行かぬ、本來生徒、教員、教育行政官、大臣、是等は皆各々一定の間隔を隔てて、其實力及び

文部大臣の眞因



地位の懸隔が無ければならぬ、然るに我國に於ては、大臣、教政官及び教育者の間は、適當の間隔を保つて居るが、教育者と生徒との間が、保つべき適當の間隔を保たぬ、是に於て乎其間に衝突騷動が起るのである。若も此教育者に相當するが如き少壯國民になるならば、此少壯國民と我新領土の土民との間の間隔が保てぬことになり、此間隔を保持すれば、少壯國民と教育者との間隔が保てぬ、そこで此間隔を保てば、是等の教育者は教政官に對して間隔が保てぬことになる、此間隔の保てるやうな教政官ならば、文部大臣に對して間隔が保てぬことになる、此間隔を保ち得る程の文部大臣であるならば、陸海軍大臣と同格となつて、茲に始めて所謂伴食大臣と云はれぬものが出来るのである。併ながら滔々たる世俗は、まだ文部大臣と云ふものは、本來の性質上、陸海軍大臣よりも一等下るものと思ひ馴れて、寄つて集つて文部大臣及び文部省を嘲笑しつゝ、ある、文部大臣及び文部省を嘲笑するは、是れ直ちに現下の教育を嘲笑するもので、即ち彼等國民自らを嘲笑しつゝ、あるものである。凡そ斯の如きの弊害は、中等教員學力の不足に最も著るしく現るゝ次第である、而して中等教員は、常に讀んで字の如く中等教員たるのみならず、白耳義の如きに

教育の中堅問題

於ては、中等教員の資格者及び經驗者が、實に教育、殊に教育行政の首腦者となりつゝあるのである、白耳義の『中等教員有資格者』と云ふ稱號を有する人々は、實に文部省の中堅として働きつゝあるもので、他の法學士杯は、此所に働くことの甚だ小なる次第である。即ち中等教員問題は、實に獨り教育者の中堅如何の問題たるのみならずして、亦實に教育行政家の任用如何の問題に觸るゝこと、極めて深く且つ大なるものがあることを注意せねばならぬ、而して其中等教員の爲體が今日の如しとせば、我國民は、先づ此點に於て五等國七等國と云はれねばならぬ、に、沐猴の冠して、西洋人の煽動に乗つて一等國がると云ふが如きは、實に片腹痛き沙汰と云はなればならぬ、ではないか、我國民諸君は、果して知らぬもの、佛と云ふ態度で、斯の如き重大なる實際の事實を、何時までも解決せず、に、棚に上げて置くつもりであるか。

五 恬然たる留學制度

其外教育上の事柄に就て、歐西と我國との間に著しき差等を認むる事は、尙ほ多々ある、大學教育の如きは、我國に於ても、碩學其人に乏しからぬことであるが、併な

大學教育



がら陸軍が既に歐洲第一の陸軍國と干戈を交へて相當の成績を收めつゝあるにも拘らず、我國の大學は彼等の大學に比して、甚しき不對等の位置と見られつゝある。世人往々文部省が大學を憚ると言ふが、教育行政上から言へば、殆ど文部省が大學を輕蔑するの姿がある、それは何かと云ふと所謂留學制度である、凡そ世界の所謂一等國なるものは、何れの國と雖もが、其大學を以て最高學府と爲し、知識若くは知識を要する人物の供給は、皆な之を大學に仰ぎ、之を大學に仰ぎ得るだけの程度に、大學を改善し發達せざれば已まざることゝなつて居る。希臘の如き小國ですら、留學制度の有無を吾輩が其大學總長に問うたときに、冷なる笑を浮べて、弊國では留學生などは出させぬ」と言うて居る。然るに我國に於ては、大學と云ふ所は一種の卒業生を出す場所たるに止まつて、我國の眞の最高學府は、西洋に在るではないか、即ち何かと云ふと、直ちに留學生を西洋に派遣して、此所で最高學習を爲さしめ、つゝあるではないか、凡そ物は用ゐれば次第に其用を爲すに至り、用ゐざれば何時までも其用を爲すことが無い、人間は昔三つ目小僧であつたのが、一つの目だけは用ゐなくなつたので、腦の中の松果腺と云ふものになつて残つて居る。人間は昔尻

我國最高學府は西洋に在り

尾があつた、然るに人間が直立するに至るや尻尾は不必要となり、遂に所謂龜の尾即ち尾骶骨となつて外に現れず了つて居るのである。我大學が最高學府たるの用を爲さず、我大學が世界各國の大學とは一種低度なるものとして止まりつゝあるのは、國民及び教育行政政府が、斯る取扱を以て、斯る期待を以て大學に對するに職由すと云はねばならぬ。

各種の機關其價值

我國に於ける學士院の如きも、其制度は既に數十年來のもので、頗る立派なものであるが、併ながら世界の學界に立つに於て、未だ何等の方法を講じて居ると云ふことを聞かぬ、近頃美術展覽會が開かれ、文藝調査會が出来、又通俗教育調査會が出来たりして居るが、斯の如き事項をば、教政の一部と認むるに至つただけは一大進歩であるが、併ながら果して之を以て、教政の組織の一部とするだけの決心があるのであるか、或は徒らに烏合の衆を集めて、人氣取り旁々仕事をすることに止まるのであるか、是等は追々其成績や遣口を見ぬ中は、猝に評することは出来ぬ、併し要するに斯の如きは、其關する所も甚だ大なるものに非ざるが故に、左まで力を入れて評するの價值のあるものではない。



### 六 教育行政機關の失形

若し夫れ教育行政組織の全體に就ては、頗る言はざるべからざる事がある、併ながら事官制等に關係するが故に、思想發表の斯る機關に於て、具體的に之を述ぶることは姑く避くることを適當とする、唯々茲に國民、殊に政黨、殊に政友會名流諸君の參考の爲めに、一二の西洋に於ける具體的の例を説明して置かう。

英吉利に於ては、文部省即ち教育行政政府の組織は、殆ど全體教育者中の才幹ある有能の士を以て成立し、法律及び行政に通曉するの士は、大臣官房に於て法律局と云ふものがあつて、此所に極めて僅少なる若干名を充たすに過ぎず、其外初等教育局、中等教育局、大學教育局、實業教育局を首め、教育行政の實質的の方面に當るは、皆な夫々教育者出身にして教育に經驗あり、而して支配的及び事務的才幹の人々を用ひて居るのである。

埃太利に於ては之に反して、法科大學卒業生にして官吏を志願する者は、先づ高等文官試験を受け、而して内務系統を志願する者は先づ郡役所に奉職し、大藏系統

英國の文部省

埃太利の文部省

の者は税務管理局、司法系統を志願する者は、區裁判所に奉職することより其官歴を始める、斯くて少くも五ヶ年間地方の小官衙に於て奉職したる者の中、成績顯著なる者にして、始めて或は内務の本省、或は大藏の本省、或は司法の本省、若くは地方裁判所控訴院等に奉職することが出来るのである、借て然らば文部本省の官吏は如何なる所から採り來るかと云ふと、右の内務大藏及び司法の三系統の、各々地方に奉職する少壯行政官の中、成績顯著ならざる者が、内務ならば中央本省へ行けぬが、文部ならば行けると云ふが如き者を、拔擢して任用することとなつて居る、即ち彼等は少壯行政官中、第一流ではなく、其五ヶ年間勤むる所の事も、教育とは甚だ縁故の薄い所の、或は大藏、或は司法、又或は地方郡役所の事柄である以上、内務高等官若くは大藏高等官等に比して、非常に實力の懸絶の存することは已むを得ぬ次第である、斯の如くにして、埃太利の文部省は、餘り多くの成績を擧げることが出来ぬ仕組になつて居ると云ふことは、我輩が同國內務省官房長より、親しく直話として聞いた事柄である、我、政友會の政務調査諸君は、斯る事柄に對して如何の感、を爲さるゝか。



我日本に於ては、幸(?)にして大學卒業の成績等に依て、各省に人物が配當せられ、而して又幸にして現在の我文部省には、實に大學出身の第一流の人物、其第一流の學識が集つて居るとであるから、埃太利の如き弱點は、之を夢にも見ることが出来ぬ。唯、如何せん我文部省は、如何にも人物に貧強である。強とは何ぞや、唯今述べたる、錚々たる人物のみが一粒撰りに集つて居る事實を云ふ、貧とは何ぞや、其人物の甚だ少きを云ふ、試みに各國の文部省に就て見るならば、佛蘭西は人口我國の四分の三にして、文部省高等官の數が會計官を除いて七十二人、埃太利は人口我國の二分の一にして、文部省高等官の數が六十七人、普魯西は人口我國の四分の三にして、七十二人の會計官を除くの外、文部省高等官の數が四十八人、英國も亦人口我國の五分の四にして、實に五十人許の高等官を數へる。然るに我國は如何であるか、大臣次官、秘書官、參事官、書記官は勿論、視學官も之に加へ、甚しきは圖書審査官、文部編輯及び技師等を洗ひ浚ひ掻立て、僅に三十人と云ふ立派なる數を呈するに過ぎぬのである。如何にドレツドノオト形の戰艦なりと雖も、僅に三隻より成る一艦隊を以て、雲霞の如き敵の數十隻の戰艦より成る所の艦隊と會戰するならば、其勝敗

の數は極めて明瞭と云はねばならぬ。幸にも我現今の文部官は、實に第一流の教政家、第一流の學識、第一流の人物を集めて居る、さりながら其數に於て貧なること斯の如くんば、到底以て西洋各文明國の敵となるに足らざることとは明白ではないか。是に於て之に對する自然の補缺方法が出來て居る、それは即ち各種の調査委員會の組織である。試みに職員録を繕いて見ると、實に我文部に於ける調査委員會の數の多いのに驚絶せずんばあらず、曰く文藝調査委員會、曰く通俗教育調査委員會、曰く國語調査委員會、曰く實業補習教育調査委員會、曰く盲啞教育調査委員會、曰く震災豫防調査會、曰く醫術開業試験委員會、曰く藥劑師試験委員會、曰く萬國測地學委員會、曰く教員檢定委員會、曰く理學文書目錄委員會、曰く美術審査委員會、曰く教科用圖書調査委員會、而して我文部省の其所管の政務に熱心なるや、朝に一委員會を増し夕に一委員會を加へ、尙ほ駭々として進んで止まらざるの勢があるのである。蓋し是等の委員會の中、當然文部省の内に組み入る可らざる附屬的の事業がある、例へば萬國測地學委員會、理學文書目錄委員會と云ふが如きものが是れで、斯の如き事柄は、之を委員會とするに非ずんば、文部高等官の手におへないと云ふとも、



誰か之を怪むものあらんや併ながら今若し陸軍に於て国防調査委員會、陸軍教育調査會、武器調査委員會と云ふものを設け、設くるは別に怪むに足らぬが設けて而して主として部外のものゝを驅集めて、曰く衆議院議員、曰く貴族院議員、曰く文科大學教授斯の如きものを驅集めて、陸軍省が必ずやらねばならぬ所の喫緊なる政務を之に附託するが如きことあらば如何であらうか。

軍夫亦戦線に立つ

如何にも此の如き状態にも其れ相應の因縁がある。今日の文部省は、人物は非常に優れて居るが、其數に於て甚だ貧しい、是に於て其形勢たるや、恰も戦闘員の極めて乏しき精銳なる軍隊の觀がある、そこで大敵に對するに於ては、勢ひ軍夫にも亦銃を渡して、戦闘線に立たしむるの必要がある、然るに其軍夫は、本來十二分の鍛錬あるものでないから、眠りたいときには眠る、休みたいときには休む、甚しきは軍夫にして、銃を倒まにして、我軍と同士打することも無いとも限らぬ。某調査委員會に於て、或重大なる事件が議に上つた、其委員會の有力なる委員の一人が、予は其議事の當日缺席せりと云ふ理由で、其後其事件が端なく世上の大問題となつたときに、矛を倒まにして文部を攻撃したと云ふが如きは、是れ有名なる話柄でないか、蓋し

抜木塞源の策を講

此委員としては、必ずしも矛を倒まにしたのではない、如何となれば、委員會の委員なるものは文部の官吏に非ず、従つて行政體統の關係を以て、何等文部大臣の命を奉すべき窮屈なる規律に縛らるゝものでない、併ながら斯の如き鳥合の衆を頼むに非ざれば、文部は當然其頭上に墜來る所の大事件をも處理することが出来ないとなるならば、如何に各個人物の力は強しと雖も、文部其物が全體として、獨り我政府大行政體系の中に勢力を有せざるのみならず、一般社會國民よりも亦當然の敬重を拂はれざるに至るは、避くべからざるの事と云はねばならぬ。  
斯の如きは、固より之を批評するは易く、之を如何にすべきかの方策を立つるは頗る難い、而して斯の問題は實に我國教育行政の不振の由つて繋る所にして、此點に向つて、抜木塞源の道を講せずして、徒らに教員の無能を攻め、徒らに文部大臣を伴食大臣と嘲り、徒らに文部省の無勢力を慢侮するが如きは、國民自ら侮り、國民の基礎の上に立つ政黨自ら侮るものと云はねばならぬ。

七 地方教育行政機關の逆轉退化



我國の地方に於ける行政組織の進歩を見るのに、最初は、府知事縣令と云ふものが、極めて重大なる職責任務を有すること、之を約言すれば臺灣總督府朝鮮總督府の如きもので、普通に謂ふ所の、土木、警察、衛生、勸業等の民政は云ふに及ばず、教政も税政も逓信行政も悉く其手裡に在つた。

然るに其後府縣に收税長と云ふものが出來、收税長は應て大藏官として縣廳内に事務を執るに至り、更に一轉して全國各要地に稅務管理局なるものが起つて、之が大藏省直屬の出店として、全國各地を總攬するに至つた。

逓信行政は、郵便局あり、郵便局に一等二等三等あり、一等郵便局が二三等局を管理して、且つ自らも大なる郵便事業を營む、即ち事業經營と及び行政管理の、此二つの事柄を兼ね扱うて居つた、故に勢ひ行政管理の方面は、餘り完全に行くことが出來なかつたが、最近官僚政府の後藤遞相が局に當るに及んで、此制度に一大變革を加へて、一等郵便局は單に事業經營の郵便局たるに止まり、而して別に全國を若干の區域に劃して、逓信管理局を置いた、此逓信管理局が直ちに是れ逓信省直屬の支店で、逓信省の命を受けて、全國の逓信行政を管區に分けて管理することゝなつた。

たのである。

斯の如き事は、陸軍に於ては夙にあつた事で、陸軍省の下に師管あり師管の下に若干の聯隊區あり、聯隊區なるものは、軍政中徵兵事務等に關する事を掌つて全く地方廳とは獨立なる行政系統に屬して居つたのである。

斯の如く國家の各種行政は、其發達に伴うて、次第に地方廳の管轄を離れ、之を具體的に言ふならば臺灣總督府朝鮮總督府擬きの地方廳の管轄を離れて、中央本省の直接管理に移りつゝあるのに、此大勢に逆行するの奇觀を呈するものは、獨り我教育行政である、維新後我國學制の始めて立てらるゝや、全國を六大學區に分ち、各大學區を更に若干の中學區に分ち、各中學區を更に若干の小學區に分ち、此各學區は夫々の學校を有すると共に、教育行政の管理統一も、亦此學區を通じて行はるゝこと、恰も陸軍の師管と聯隊區とに於けるが如きものであつた、然るに爾來政海の變遷の浪が最も激しく教育を冒し來つて、種々破壊の末、落著いた制度が、各府縣廳に一名の視學官を置いて、此視學官を以て、各府縣下の教育行政を統一管理せしむることゝなつた、而して此視學官は、教育出身の人物にして、中學校若くは師範學



頭ありて  
手足なし

校に多年の経験を積み、人物の簡選も文部省之を爲して、先づ文部省の、小さいながら出店が、各府縣廳の中に置かるゝと云ふ状態となつた。これすらが明治當初の教育行政の規模に比すれば、業に既に一大退歩である。然るに教育行政の組織退歩は、嘗に之に止まらず、更に近年に至りて、是等の視學官は全くの純然たる内務官となり、而して其任用までも、法學出身の高等文官試験及第者たるを要するに至り、其官名は固より普通の『事務官』と變り、而して事務官の中では、事實上最も新進無經驗の少壯法學者が之に當ることゝなつた。即ち府縣管下の幾多の師範及び中學小學教育者を管轄するに、斯る少壯法學事務官の、教育に何等の經驗無き者を以てすることになつて、而して文部省は、此少壯事務官に對しても、直接何等の管理支配の關係を有せぬこととなつたのである。

斯の如きは、實に之を我國に於ける、各行政組織發展の大勢に較へれば、逆行も亦甚しき状態と云はねばならぬ。文部省は、中央本省には如何に人物の強き者あり、如何に有能有力なる大臣を戴くことありと雖も、斯る組織では、頭有つて、而して手足の無い動物と一般で、如何なる人物と雖も、充分に行政上の成績を擧ぐることに

普魯西

出來ないのは明白である。是等の點に向つて注意することなしに、又一定の決心を有することなしに、輕々しく文相の椅子に就くとするならば、其人は甚だ氣の毒なもの、と云はねばならぬ。斯の如き形勢實狀を知らずして、己が政友を文相の椅子に就かしむると云ふならば、其政友をして、死地に赴かしむる無情の仕業と云はねばならぬ。前内閣文部の破綻が、惹いて内閣の運命に大影響を與へたるは、官僚政治必ずしも弊あるに非ず、凡そ我教育行政組織の根柢に於ける斯る弱點は、官僚政治と政黨政治との問題を、超絶せる所の重大問題である。前内閣既に之に向つて、拔本塞源の救治を試むるに至らなかつた以上、せめて政黨政治を標榜する新内閣が、國民の後援の下に、此大問題に向つて、裁理を加ふることを必要とする。

獨逸は、地方教育行政の大機關として、州學務院があり、州總督が其院長として、之に若干の教育家行政家を加へて、地方教育行政機關を形造る。此類の制度は、各國概ね皆な然りである。併ながら直ちに之に模倣して、我國に移したるにて事足るならば、何の困難も無いが、愈々我國の教育行政に於ける、此點に於ける弱味にも氣が付いて之を補はんとするには、更に充分の調査研究の必要があるのである。



八 政友内閣亦噴火山下に湯治するか

川上久しく出でずし

之を要するに、我國が眞に一等國たらんと欲するの志を立つるならば、今日に於て是非とも未だ端緒に就かざるの教育を端緒に就くるの決心をせねばならぬ。我國の教育、殊に其教育行政、就中教育行政組織の大本に就ては、之を陸軍で見らば、大村兵部太輔纔に出で、而して川上參謀次長未だ出でざる時代の陸軍とまで達して居らぬ。我輩を以て之を見否な歐洲各國を以て之を較べ見れば、我國の教育行政組織は、殆ど間に合せと云はねばならぬ。我國の教育行政は、其日暮しと行はねばならぬ。其日暮し、間に合せであるから、間に合はぬことが屢々出来る。其日暮しも暮らされぬことが屢々あるではないか。或は南北朝問題に於ける失態と云ひ、或は近く齒科醫開業試験の紛擾と云ひ、事の大小はありと雖も、到底如何にするも、之を陸海軍部内は勿論、之を司法部内、若くは之を逓信部内に見るも見ることも、出來ぬ事柄が續々起り得るの弱點を内に包藏するのである。

併ながら局外から、我現今の教政組織の弱點を批評するは極めて容易である。恐

我帝國の永久的戰備如何

くは我輩と云はず、歐洲より日本に漫遊せる旅客と雖も、一週日滞在の後、直ちに批評が出来るであらうが如何にして之を補修し、如何にして此弱點を救治せんかの方策に至つては、是れ實に建設的の大事業にして、之を爲すに速断輕忽なる歐洲の實例の移植を以てするに於ては、弊更に加はるものあらう。是に於て總て斯の如き根本塞源の計畫事業の第一著歩、若くは根柢として、調査事業の必要なること、これこそ我國民、殊に政友内閣の基礎たり。後援たる、政友會諸名士が注意を拂はねばならぬ。大事である。我輩の謂ふ所の調査事業は、總て斯の如き諸問題を根本的に研究し、坐して言ふべく起ちて行ふべきの方策を立てんとするのである。若も單に批評を之れ事とし、希望を述ぶるに止まつて、如何にして之を濟ふべきかの方策を立てないならば、是れ直ちに我現下の論壇政界に流行する弊害に陥るもので、我輩の取らざる所、國家に寸益無き所である。嗚呼、我帝國の永久的戰備は如何なることであるか。而して愛すべき政友内閣は、官僚内閣の得失に顧みずして、再び噴火山下に湯治の快遊を貪らむとしつゝ、ありはせぬか。

(明治四十四年十月太陽)



### 三 經國の第一義

一、積極的自動的對外政策——二、國際競争の三段進運、教化競争の時期  
來れり——三、大局の遠觀——四、内政改良と教化——五、慘憺たる我國教育  
の現状——六、諸他の教化事項——七、宗廟社稷を奈何せむ、經國の第一義

#### 一 積極的自動的對外政策

我國維新以來の政策は、嘗て故大久保甲東が道破せる如くに、最初の十年間を以て王政復古の跡始末を爲し、次の十年間を以て内治を改良し、其次の十年間を以て國權を伸張する、約三十年にして一段落が著くと云ふことであつたが、事實は略々之と大なる差が無くて、明治四十三年を以て明確なる一段落が著いたのである。而して此段落は、實に維新以來の國家經營上の段落たるのみに非ずして、實に我國建國以來の一の大なる段落であつたのである。

抑々我國權の侵害せられたること久し、維新最後の對歐洲關係は、條約改正問題の形に於て宿題として残り、對東洋關係に於ては對馬を介しての對韓問題より、琉



韓國併合

球臺灣に關係しての對清問題、續いては明治十五年の朝鮮事件となり、十七年の天津條約となり、而して宿題は未だ何等の解決を告げざりしに、恰も明治二十七年と云ふその年に於て、日英條約改正を手始めとして、一方對歐洲問題の宿題の解決が開かるゝと同時に、成歡牙山の役を木の頭として對東洋問題も亦解決せらるゝが如き場合と成つたのである。二十七八年役を經、三十三年の北清事變を經て、遂に三十七八年日露の役に至りて、茲に殆ど數十年來の宿題たる我國の對外關係に於ける不當の壓迫、縮小、侵害は恢復せらるゝに至つたのであるが、更に之を玉成して是を附けた所の一大事件は、明治四十三年の韓國併合である。

韓國併合は、舊に維新以來、我對外政策の缺陷を補ひ得たるものであるのみならず、實に殆ど建國以來の宿題たる日韓の關係に向つて最後の而かも完全なる斷案を下し得たるものである。此問題の功名が何人に歸するかの如きは區々たる問題、何等吾輩の注意を惹く價值ある事では無いが、此問題、此事件、其者の國史の事跡に於ける價值は實に絶大なるものと言はねばならぬ。此大なる國史上の段落は、獨り維新以來の政事家と言はず、我國上下三千年を通じて國政の變遷に著目する者の

對外關係の一轉機

極めて重要な注意を以て觀察を下さなければならぬ一大時期である。即ち此時期に至る迄、我國の對外政策は、消極的、雪冤的であつた。其の性質上から一刻も緩うすべからざる、又如何なる價を拂うても之に従事せなければならぬ所の問題が常に我政策を壓迫し、之を解決するにあらざれば我國は一個の獨立なる國家社會として存立するの體面をも備へず、實質をも具足することの出來ぬ次第であつた。我國が國家經營上の多くの事物をも犠牲として、只管に此宿題の解決に向つて邁進したのは已むを得ざる次第であつたのである。

積極政策の樹立の機

併ながら既に此消極的、雪冤的對外政策が、幸ひにも斯の如く比較的速かに解決を告げたる以上、此時に於て我國家社會は始めて適當なる社會發達の進路に向ふべき幸ひなる運命に際會したのである。此時に於て吾々日本國民は胸に手を當て、靜かに國運の前途を思ひ、從來の勢ひに驅らるゝ事なく、我國が贏ち得た所の新たなる位地を精察して、審かに將來の國運を指導する所以の根本主義を立つべき時機に今や立到りつゝあるのである。我國の政策は是より始めて積極的政策に進み得る次第であるのである。



## 二 國際競争の三段進遷、教化競争の時期來れり

積極的對外政策

世に謂ふ積極消極は、茲に謂ふものとは頗る其意味を異にして、總ての事項に向つて只管に増進を事とするを以て積極と謂ひ、減退を事とするを以て消極とするやうであるが、今吾輩の謂ふ消極とは萬已むを得ざるの勢ひに制せらるゝ境遇を謂ひ、積極とは我自から我が進むべき途を決定するの自由を有する境遇を謂ふのである。既に積極的の境遇に進みつゝ、猶消極的境遇の惰性に制せられて行動するが如きは獨り國運の新たなる開拓上甚だ不幸なる、不經濟なる損失多き事であるのみならず、抑々亦甚しき陋愚の沙汰と言はねばならぬ。今日の日本は此意味に於て既に積極政策の時機に達して居る、吾輩は敢て此點に向うて國民の注意を請はんと欲するのである。

凡そ一國の政策を確立するは必ず常に其の大本を對外的立脚地に置かなければならぬ。若も對外的眼光を有すること無しに一國の國是を樹つることありとも、そは必ず久しからずして遵由實行の效力を失ふものと見なければならぬ。かるが

國際政策の三段歩

故に一國政策の大方針は必ず常に對外的政策でなければならぬ、即ち我國今後の政策は積極的對外政策の時機に進みつつありと謂はねばならぬ。

對外政策は即ち國際政策である、凡そ國際競争は古來社會の進運、文明の進歩に随つて三段の根本的進歩を爲して居ることを注意せねばならぬ。國際競争の様式は第一段に競争を以てする、即ち紛争兩國が互に兇器を取て鐵火相見え、兩國民は生死を賭して争ふの行動である。然るに斯の如きは永く續く所の様式にあらずして、少しく進みて第二段に入れば武力競争の様式に進む。武力競争は、直接に武力を闘す所の戦争にあらずして、陰然たる武力の蓄積に於ける競争である、即ち戦はずして武力の大なる者が勝を制し、武力の小なる者が敗を取る。斯の如きは之を第一の戦争の様式に較ぶれば、頗る既に直接より間接に進めるもので、人智の進歩を見るに足ると同時に、人間に蒙らす慘禍は幾分か輕減すと雖も、其の經濟上に及ぼす影響は寧ろ第一段に過ぐるも劣る所なきに至る次第である。然るに武力競争も亦久しからずして下火となり、國際競争や其第三段に進みては、國力競争となるのである。蓋し武力は單獨にして何等の力となるべきもので無い、如何に軍備の充實せ



るありと雖も、一國の財力にして疲弊困憊を極めて居るならば、斯の如き武力は何等國際競争上の威力とはならぬ、即ち武力競争は更に進んで武力財力の總和に於ける競争となる、併ながら武力財力も、更に之を培養し又之を運用する所の智力を以てするに非ざれば、一時充實せる所の武力、一時具足せる所の財力は、決して一旦にして止む可らざる、即ち社會の進むに隨ひ益々持久的性質を帯び來る所の國際競争上甚だ大なる威力となるに足らざるので、是に於て武力財力の總和の競争は更に一轉して武力財力及智力の三要素の總和の競争となるのである、併ながら武力財力智力も亦究竟にあらずして、之を調和し之を育成し而して眞の社會的活力を永久に發揮せんとするには、必ずや徳力の一以て之を貫くものなかる可らず、是故に國際競争の究竟の威力は、露骨なる武を闘はず所の戦争にあらず、又單に世に謂ふ武裝的平和の武力競争にあらずして、實に武力財力智力及徳力此四要素の調和的總計を以てする國力競争に歸著する次第である。

以上は國際競争の三様式を學術的に考察せるもの、さて現今は如何なる時機にあるかと云ふに、露骨なる第一段戦争の時期は既に過ぎ去つて居る、第二段武裝的

の國力競争  
の時機

平和の時期も最早今日以後の國際競争の様式には少しく時世遅れとなりつゝある、今後國際競争は益々深刻となり、益々大規模となり、益々持久的となりつゝあり、即ち今日は最早如何にしても武力財力智力徳力の四要素の調和的總計たる國力競争の時期に入れるものと覺悟せなければならぬ、我國政界の短見者流は、時として、今尙露骨なる、直接なる、白刃を以て相見え、鐵火を以て相向ふ所の戦争にあらざれば、國際競争の問題は何等の解決にも就く可らざるが如く考ふる者があるらしく見えるが、斯の如きは時世に通せざるの甚しきものと謂はねばならぬ、是よりは少しく進める我國の政治的經綸家の中に、直接の戦争は必ずしも期すべきにあらずとするも、武力の競争が必ず適實究竟なる我國の國際的地位の保障であるかの如く考ふる者があるが、若しも斯の如き單純なる要素を以て、今後の國際關係に處しつゝ、鬼面人を嚇するの讖無くんば抑々幸甚と謂はねばならぬ、今日以後の國際競争は、明白に、其規模の大に於て、其時間關係の恆久的なるに於て、皮相なる威力を以てしては、何等究竟の權威となるべきでない、必ずや國家社會の根柢の最も深き處より來る所の、鬱然たる一種の眞正なる力を根柢とせる所の威力でなければならぬ。



らぬ。

斯かる國力を培養するものは何であるか。謂ふまでもなく武力財力は要するに  
智力の發動である。然らば武力財力智力徳力は畢竟するに智力徳力の二に歸する、  
而して之を培養する所以のものは即ち教化に外ならぬ。

是故に今日以後の國際競争の様式、即ち國際競争の最新の様式は一言にして之  
を言へば實に教化競争に歸するのである。

之を約めて言へば、國際競争の様式は、戦争より武力競争に進み、武力競争より教  
化競争に進む、而して今日以後は實に教化競争の時代であると云ふ事に歸著する。

### 三 大局の達觀

斯の如く、我國の積極政策、國是の根本的樹立は、教化競争に於ける國際上の敗者  
とならざる事に在らねばならぬ。

夫れ既に國家經綸の根本的大政策、國是の大方針にして、政事家の胸中に卓然と  
して樹立せるものがあるならば、社會歴史の大海の上に、時々刻々に且起り、且消ゆ

國是の根  
本的樹立

る所の小波瀾の如きは何等我心を亂すに足らざるものでなからうか。我國の政事  
家諸君にして、國是の大方針、對外政策の大根柢を卓然として内に儲へ、大海を吐吞  
するの概を以て尙且細波小瀾には又一種の興味を以て注意するといふならば、開  
は暫く問はずに措かう、若し併ながら大方針大根柢に於て何等見る所なく、朝に一  
事件を聞いて耳を驚かし、夕に一事件に接して胸を轟かすが如き次第であるなら  
ば、吾輩は我國の政治家の爲に甚だ取らざる所である。

近頃我隣國の支那に於て、所謂革命騒亂の事件が起つた。新聞紙上には、極めて輕  
忽なる矛盾に富める報道が、頻りに二號活字を以て飛躍しつゝある。昨は漢陽陥り  
武昌危うしと聞いて胸を躍らし、今は南京陥ると聞いて更に心をときめかす。併な  
がら斯の如き刻々の小波瀾は何等我卓然として樹立する所ある政治的大經綸の  
胸懷を慌擾するに足らざる者ではないか。我國にして既に百年の長計を劃し、世界  
に處する所以の大國是を樹てたりとせば決して單に支那のみを以て注目の區域  
とすべきではないのである。決して單に支那の昨今を以て決皆の目的物とすべき  
では無いのである。我政事家の注目すべきは、實に世界の總體、百世の得失の上にあ

隣火に慌  
つる勿れ



らねばならぬ。世界の廣き時世の永き其間、一波、一瀾、一事、一件の起る毎に、直に、我、政治家の大方針に變動を來すが如きあらば、是れ、濟世、經國の大方針、大根柢の未だ樹立せざる證據である。

吾輩は世の或は慌々擾々に陥り、動もすれば國際上の波瀾に對して餘りに神經的態度に陥らんとする人々の爲に、今聊か土耳其の革命に就て少しく語る所あらう。支那革命騒ぎの近き將來に於ける發展に對し、或は又幾分參考となる所があるかも知れぬ。

## 土耳其革命の物語

土耳其の革命は、サロニカ及巴里に於けるユニオン、エ、プログレエ、即ち一致進歩黨の、一昨、昨年實行せる所、中にも武人が最も目覺ましき活動を爲し、武人中には、憲法と云ふ語は、恰も萬能の魔語の如くに響いた。サロニカは希臘猶太人の商業中心にして、傳播的策源地として形勢甚だ便であつた。併ながら革命運動の根柢は、二様の關係に於て甚だ薄弱であつた。一は社會的素地の缺乏である。土耳其は宗教及軍隊に於ける若干の中流社會の外、歐洲最近の政治的自由革命の根柢たる所謂第三級、則ち平民の缺乏せる社會である。其農は極めて幼稚にして、農具は多く木製で殆ど鐵製の物をも使用せぬ程度である。工は土耳其人としては全國に跡方もない。唯聊か外人の企業あるのみで、それも何等本國人を刺戟して之に向はしむることは無い。商は全然希臘人アルメニヤ人及猶太人の掌中に歸して居る。次に又革命黨員の修養及組織の缺乏は、革命運動の根柢の薄弱なる第二の原因である。革命黨は全く一種の理想的の運動、一種の知識的運動、一種の學說的運動で、殆ど何等實際的の經路手段を有せぬ。學問上の結論を其儘實行せんとし、爲に議論徒らに多くして、結合的推讓的精神に乏しい。唯徒らに西歐思想に染める者の一群たるに過ずして甚だしく非組織的である。斯の如く根柢の薄弱なる革命運動は、幸にも餘り多く及に軋らずして、一九〇八年の革命を實行し、巴里に於てメシグエレットと稱する一致進歩黨の機關雜誌を發行しつゝ、あつたアマメット、リザ、ベイ君は直に歸國して第一期の衆議院議長となり、昨日巴里ブラアスモンジの一町屋の四階の上なる悲歌慷慨の客は、今や一躍して君府山の手ペラなる宏壯なる白屋衆議院議長官舎の主公となつた。併ながら革命が出來て見た所で、偕て其豫想と實際との齟齬は、非常なるもので、其結果一般の失望は、忽ちに至つた。先づ一には獵官の不能である。革命黨

と鐵製の物をも使用せぬ程度である。工は土耳其人としては全國に跡方もない。唯聊か外人の企業あるのみで、それも何等本國人を刺戟して之に向はしむることは無い。商は全然希臘人アルメニヤ人及猶太人の掌中に歸して居る。次に又革命黨員の修養及組織の缺乏は、革命運動の根柢の薄弱なる第二の原因である。革命黨は全く一種の理想的の運動、一種の知識的運動、一種の學說的運動で、殆ど何等實際的の經路手段を有せぬ。學問上の結論を其儘實行せんとし、爲に議論徒らに多くして、結合的推讓的精神に乏しい。唯徒らに西歐思想に染める者の一群たるに過ずして甚だしく非組織的である。斯の如く根柢の薄弱なる革命運動は、幸にも餘り多く及に軋らずして、一九〇八年の革命を實行し、巴里に於てメシグエレットと稱する一致進歩黨の機關雜誌を發行しつゝ、あつたアマメット、リザ、ベイ君は直に歸國して第一期の衆議院議長となり、昨日巴里ブラアスモンジの一町屋の四階の上なる悲歌慷慨の客は、今や一躍して君府山の手ペラなる宏壯なる白屋衆議院議長官舎の主公となつた。併ながら革命が出來て見た所で、偕て其豫想と實際との齟齬は、非常なるもので、其結果一般の失望は、忽ちに至つた。先づ一には獵官の不能である。革命黨



員は多く是れ新聞記者であるので、獵官の不能から、偏狹にして相互に憎悪し排擠する固癖は容赦なく鋒鏑を露はした。二には種族發展の希望は忽ち空望なりしを見るに至つた、即ち希臘人、アルメニヤ人、勃牙利人等は皆革命を以て、各自己種族の發展と豫想して居つた、然るに是は固より到底實際に期待し得べからざる希望であつたのである。三に兵士も亦甚しき誤想に陥つたことを發見したのである、彼等は過去の國威の隆盛は新たに樹てらるゝ所の憲法に依つて、直に恢復せらるべしと思つて居つたが、憲法が斯の如く萬能丸であらう筈は勿論無い、四に農業地主は革命に依つて民力休養の出来ることと考へて居つたのが、是れまたガラリと目算が外れた次第である。

偕て右の如き結果として、直に革命黨に對する一般の失望を來し、人民の信用は尠くとも一時失墜し、而して直に至つた所のものは革命黨の分裂と保守的的反動派の勃興とである。一致進歩黨分裂して新に自由一致黨なる一派が出来、其主なる目的は一致進歩黨を撲滅するにあり、彼等はアアメツド、リザ君を誣ひて王に買収せられたりと爲す、そこで時來れりとして直に出來たのが即ちムウラツド、ペイを首

領とし、ミザンを機關紙とせる回教協會といふ保守的的反動派で、實に陰に王を中心として居る。所で革命の翌年、一昨年即ち一九〇九年四月八日に、セルベスチエ新聞記者ハツサン、フエエミがガラタ橋上に虐殺せられたるを動機として、忽ち反革命的事變が始つた次第である。斯の如くして爾來革命運動の形勢は甚だ面白からぬもの、と成つて居る次第である。

右は本論に縁も因りも無いやうに見ゆる所の土耳其の革命に就ての一場の小話に過ぎぬが、併ながら我國の政事家にして幾分國家の爲に深憂を懐く所の人々すらもが、餘りに時々刻々に且起り且消ゆる所の國際上、世界形勢上の細波小瀾の爲に、慌々擾々たるが多く、果して那邊にかどつしりと落著のある、卓然として動かざる態度を示す者あるかと杞憂もせらるゝ事ゆゑ、一寸横道に入つて御話をして見た次第である。凡そ國運の將來を洞觀し、國家の重きを雙肩に荷ふ覺悟ある堂々たる國士は、内に卓然不動なる大主義大根柢を樹て、二三の新聞號外的事變に依つて餘りに慌々擾々の陋態を呈せざるの抱負と自任とが大切である。いふまでもなく、何等知る所なく、何等執る所なく、唯惘然として新聞の號外にも無感覺なるは、



是れ固より痴呆の沙汰である。要する所は號外的事件に慌々せざるにあらすして、國家の大方針國運の大根柢に向つて卓然たる樹立識見を有するや否やの點にある。

之を要するに、苟くも達人にして大觀するか、支那の前途の如きは極めて明々白々である。世界の前途も亦極めて明々白々たるものがある。今日の場合、我は宜しく列國に向つて我王道の態度を明かにすべきである。我國の態度は東洋の平和を擁護し、我國の體面及利權を保持し、殊に清國に對しては歴史上及情義上善隣の好意を以て對するものであることを明にせば事足る。何も細かい事を彼れ是れ言ふべき責任もなければ必要もないのである。

#### 四 内政改良と教化

教化競争は實に今日世界列國の大勢である。教化に於て一步の前進を爲せる者は究竟國際上の優者となり教化に於て一步後退りして居る者は究竟國際上の劣者となるを免れぬ。

列國の大勢亦茲に大存す

吾輩は茲に更に政治の改良も亦教化を以て先決條件とすることを一言しやうと思ふ。

多數政治か少數政治かに就て惑ひを懐く者が今日往々にして見える。併ながら歐米諸國に於ても識者が夙に其國家多年の經驗上より明言するが如く、多數は健全なる希望を發表すべき天職を有す、少數は多數と共に此健全なる希望を有し、且自から此健全なる希望を實現するの職責を有する。斯の如くにして一國の政治は次第に進歩發達すべきものである。此多數は即ち國民である、此少數は即ち官僚である、而して多數を代表して此少數の希望を表明し、殊に此少數を監督する機關は即ち議院である。

希望と實

希望すら不健全

然るに我國の如きは、今尙希望と政策とを混同する者が比比として皆是れである。希望は希望にして政策にあらす、併ながら是れ猶暫く措いて問はずとするも、我國の教化は未だ國民をして健全なる希望を懐かしむる迄にも進んで居らぬ。吾輩は實に甚だ之を悲む、實に極めて著明なる例證を數多有するを悲む。

政友會は其未だ内閣を組織せざるに際して、所謂積極政策を標榜し、港灣鐵道學



校等を各地方に向つて約束した各地方の人民も亦政友會に頼つて各地方に港灣鐵道學校等の建設を期し得べきものと考へた若し是が果して健全なる希望であつたとするならば今日其健全なる希望を破棄して弊履を棄つるが如き態度に出でたる政友會に對して何故に人民は之を責めず政友會は又之に對して責を負ふの行動を取らないのであるか併ながら斯の如きは實に一地方の小利害より打算せる希望たるに過ぎずして我帝國國民としての希望としては決して之を善美なる希望と謂ふに足らざるものであるさればこそ其希望を懐ける國民も甚だ之を以て政友會を窮迫するの勇氣無く政友會も亦前言を反古として敢て甚だ心に關せぬ如く見ゆる次第である斯の如きは往々輿論と言ひ舞ひする所の我國民の希望其者が未だ十分に健全ならざる事實の一例證と見るべき次第である

凡そ多數が政治上に不健全なるは少數即ち行政機關に當る所の官僚をも不健全ならしむる所の効果を生ずる之に對しても亦吾輩は一の痛切なる實例を有すること悲まざるを得ぬ例へば内閣大臣の一人が政黨より出でたりとしてさて其大臣に向うて國民は其所管の政務に就て餘り多きを期待せず唯其大臣の力に依

實現の不健全

つて豫算に於ける分割の大なることを希望するのみである、と云ふ事を公々然として言ふのである併ながら國務大臣とは抑ふ斯の如きものであらうか吾々が人力車夫を備ふ時に吾々は車の上に居つて行くべき處を車夫に命じ車夫は唯出來得る限り健脚にして一定の目的地に達するに多くの時間を費さるることを以て能事とする今豫算に於ける金額を取ることの大なるだけが大臣の能力にして其金額を如何に使用すべきかに就ては惘然として知る所なきが如きも以て大臣の能事了れりとするならば斯の如きは實に國務大臣を車夫視する者と言はねばならぬ然るに我國民は恬然として斯の如き状態にして我國の政治の改良は果して如き姿が無いでもないのである斯の如き状態にして我國の政治の改良は果して孰れの日を待て期し得べき事であるか吾輩を以て見れば我國の内閣大臣は所謂官僚出身と言はず所謂政黨出身と言はず決して單純なる人力車夫では無いのである然るに内閣大臣は人力車夫であるのが當然であるかの如く考へる國民若くは俗論が我社會に今猶其存立を許さるゝが如き現象ありとせば其現象其者が實に最も悲むべき事である一個人としての政黨出身若くは官僚出身の大臣の能不



能の如きは言はざるも妨なき次第である。斯の如き誤想を國民の腦裡より一洗し去るには實に國民に施すに政治的教化を以てするに存する。教化普及し健全なる教化行はれ而して國民が今少し進歩せる思想を以て政治に對するに至るならば其國民たる多數より出づる所の希望は常に健全となる此健全なる國民より選出したる選良即ち代議士は十分に少數なる實現機關を監督して健全なるものとなすべく茲に於て憲政の發達は期すべく我國政治の發達も頗る理想的に近きものとなるべきである何を言ふにも我國今日の狀態にては教化の不足せる國民より來るものであるから政治其者が斯の如くみじめである若も一片の熱情を缺いて之を冷々たる批評的見地よりするならば實に憤飯に堪えざる滑稽劇の引續きと見ゆる次第となるのである我國國民は對外政策の上よりのみならず單に内政の改良といふ點よりしても教化政策の極めて重要な點に向つて三省する所がなければならぬ。

### 五 慘憺たる我國教育の現状

中等教育の慘狀

玉乗り式中等教育

如何にして斯の如く我國の教化は振はざる次第であらうかそれとも又教化は實に振うて居つて而かも一時の假の現象として右の如き状態が現はれるのであらうか以下少しく我國教化の現状就中先づ教育の現状に就て一瞥を試みやう。先づ一つには我國には殆ど中等教育が存在せぬ實狀である我國の教育は初等教育及高等教育は殆ど緒に就いて居るが如き状態であるが中等教育は殆ど之れなしと云ふも過言にあらざる状態である我國の所謂中等教育は歐米列國の初等教育の補充機關に該當するものといふを寧ろ適當とする今これを細説するの違ないが唯暫く其教員について一語を費すしやう。我中等教員は事實教育者と云ふ資格を以て律せられつゝあるか中等教員の任命淘汰の標準は僅かに一藝一能に通ずる者といふに過ぎないのである若も中等教育は我中等階級の根柢的教育であるとするならば中等教育に任ずる所の中等教員は中等階級を組織して十二分の資格ある者でなければならぬ然るに今日我中等教員は如何なる素養を有つて居るのであるか中等教員にして陸海軍の編成、經理、戰略、戰術の大體を心得て居る者があるが中等教員にして經濟の原理、法律の



通則を心得て居る者が何の位あるか、中等教員にして社會の由來、構造及進化に就て大體の法則を心得て居る者がどの位あるか、斯の如く、我國中等社會として、單に知識上よりするも備へなければならぬ所の資格を、中等教育を受けたる生徒が之を有して居るか否かは暫く措き中等教育の局に當る所の中等教員其者が何等之を備へやうとせず、而して我教育行政は亦中等教員に少しも是等の點を備ふることを期待せぬと云ふ實狀である、我中等教育社會の空氣が如何に皇天の特命ある我國社會の要求する中等階級の要素から千萬里を隔てつゝあるかは、これにも明白であるではないか、斯の如く、我國運が需要する所の中等階級から數萬里を隔てたる、全く違つた空氣の中に於て形ばかりの學校教育を施したりとて、我國に於ては中等階級を養成すべき中等教育といふものは全然存在せぬと云うても誣言ではないのである、是は實に我國の教育に於ける極めて重大なる病源にして、而して斯かる中等教育の缺乏より來る所の惡結果は、前項に述べたる、政治界の改良も到底覺束なく、積極對外政策に於ける國際競争の根柢たる教化競争に於ける劣者たらざるを得ざる所以となる次第である。

國運の需  
要に視よ

數量的設  
計の缺乏

次に我教政の最大缺點の一は數量的設計の全然缺乏せる事である、我陸軍の設營の如きは、兎も角も頗る精密の計算に基礎を立て、我日本は某々國を目標とするが爲に、少くも何個師團の必要ありと爲し、此何個師團の設立維持の爲には若干人の將校下士卒を必要と爲し、是が爲に彈藥若干、被服若干、給養資料若干と一々精密なる計算の上に立ちて之を豫算し計畫し實行して居るのである、我海軍の如きも亦然りて、海軍省は一種の計畫を立つる時には、必ず列國及我國の狀態を審かにする、例へば海軍大佐小栗孝三郎君の如き海軍省内に重要な職務を帯びて居る人が、其職務の寧ろ一端として必ず一般國民に向つて、説明的議論を公にするのである、然るに教育の方面に於ては如何であるか、其動機の商賣主義であるか或は報國主義であるかは暫く措くも、中學を建て様と云ふ私人があれば直に之を許可する、法律専門學校を建てたいと云ふ願を出す者があれば直に之を許可する、高等師範學校を建てたいと出願するものがあれば直に之を許可する、凡そ我國家の健全なる發達の爲には年々法學卒業生若干、醫學卒業生若干、所謂高等師範卒業生若干を要すると云ふが如き數量的設計は、吾輩の見聞せる限に於て、我教育行政當局者



は未だ曾て之を研究し豫算し計畫し報告せることは無いのである。斯の如くにして樞密院あたりから高等遊民の過多とか云ふ御託宣が一度出ると、今更の如くに我教育行政當局者は遑々焉として慌て出すと云ふ次第である。陸軍海軍の事柄よりも、教育の事柄は勿論複雑なる事柄である。故に陸海軍に於ける數量的設計よりも教育上の數量的設計は數層複雑である。併ながら複雑は不可能を意味するものではない。苟くも國家樞要の地位に立ち、國家の爲に教育行政の樞機を把握する以上、事の困難なるを以てして不可能の辭と爲すべきでは無いのである。

併ながら我國の教育行政機關は餘りに菲薄である。縦令絶大の精力を有する所の有能の士のみを以て現今の教育行政の機關は充されて居るとは言ひながら、殆ど其日々々の細務に忙殺されて、力を此大本問題の講究に及ぼすの暇と精力とが無いと云ふ實狀であるらしく見えるのである。我國の教育行政當局者の教育上の數量的設計に於けるは、必ずしも氣付かざるに非ずして、蓋し多忙の爲に之に及ばすの暇あらざる次第と察するより外ないのである。然らば則ち根本國防機關の整備の爲に文部機關の些の増大の如きは賢明にして思慮ある國民の速に漸行すべ

根本國防  
機關の整備行政機關  
の不完全

き所である。

次に第三には教育行政機關が甚だ不完全なる點に於て在る。即ち一に文部大臣が伴食大臣と見られ、文部省が伴食省と見らるゝ事、二には文部省は頭ありて而して尾なき奇態なる有機體なる事、換言すれば中央に文部省があるけれども文部省の手足となるべき地方機關が全然缺乏して居る事、三には文部官の選任に當つて、一の椅子が缺けると唯一人の候補者を見出すにも困難し、部外の内務系統其他に向つて、之を補充すべき人物の供給を哀訴歎願し來ると云ふ状態に在る事、四には教育行政官吏の數に於て之を海外先進國、獨逸、佛蘭西、英吉利、埃太利等に比して、殆ど比較に成らざる程少數なる事、凡そ是等の點の審かなるは前々號の本誌にも多少説いてあるから、今茲で之を絮説することをせぬが、之を要するに、我教育行政機關は機關其者が既に極めて不十分不完全なるものである。其機關の各部を充す所の材料は、大臣には政黨の有力者前衆議院議長を戴き、次官以下には極めて優秀にして且學識經驗共に揃うて居る人士を持つて居るにも拘らず、其活動の甚しく時勢の要求、國運の需要と伴はざるものある所以である。一個の軍艦にしても、其甲鐵、



其積載せる兵器其他吃水、運航の速度、是等が總て調和的に進むにあらざれば到底戦闘力に富める軍艦となることは出来ぬので、乃ち我教育行政機關は、之を例せば先般全くの廢艦となつた我扶桑艦に、ドレットノオト型に積むべき所の大砲を一二門積んで而して是に清國の水兵を乗組しめたるが如き状態である。

第四に我教育者の地位が甚だ又教育行政機關と調和せざる點である。教育者の地位は、今日に於ては全く労働者の地位に類する。會社の重役と云ふ者があり、是が會社の支配者である。労働者は其監督支配の下に、役々として會社の實質的事業、生産的事業に従事し、而して其生産の利得を按排するのが重役で、分配に預る者は株主である。今我國の文部省は恰も帝國教育株式會社の類で、全國幾多の官公立學校は即ち教育工場である。文部行政官は株式會社の重役で、大中小の學校に於ける教授、教諭、訓導は即ち此會社の労働者である。而して父兄たる國民は恰かも此會社の株主である。労働者は如何にするも會社の重役會議に喙を容るゝの權利が無いと同じく、我教育者は、教育には素人にして行政にのみ黑人なる會社重役の監督指揮に黙従せなければならぬ。そこで斯の如きの弊は、教育行政家と、教育當事者とが全

く別なる世界の住民たるの弊を誘ひ致すのである。即ち我教育部内に於て、教育者は家鴨の子の如く水中を以て己が天地と爲し、文部行政官は牝鶏の如く陸上を以て己が生活場となし、家鴨の子が水中に遊ぶのを見て、慈愛深き牝鶏は頻りに其溺死せんを恐れて、陸上より慈愛の叫びを續發し速かに陸上に歸り來らんことを迫り勸める、併ながら自ら水中に飛込んで家鴨の子を連れ來ることは、牝鶏の慈愛と雖も遂に能くする能はざる所である。此慈愛ある、牝鶏の叫びの續發が名けて文部省の訓令、雨下と云ふ事である。若も牝鶏と家鴨とが別種の動物にあらずして、家鴨も陸上に上り、牝鶏も水中に入るならば、訓令、雨下を勞するまでもなく、我教育の進歩は、此點からも尙多少の進歩改良が出来らう。斯の如くにして、客觀的に見るも教育者の地位待遇は頗る低きものであるのに、夫れ以上、教育者共は、主觀的に、實際以上に、己れ等が低き待遇を與へられつゝあるかの如き誤想を懷きつゝある次第である。教育者は恰も鑛山の坑夫の如く、終世役々として、陰暗なる教育界の空氣内に労働する、殊に其淘汰選任の標準、資格の要素が、中等社會に最も大切なる常識の基礎とも云ふべき、社會、經濟、法律等の大體に就ては風馬牛相聞せざるもので



ある所から、外社會、實社會とは殆ど交通交渉を絶ち、蒼白い顔色と奄々たる氣息とを以て、只管に職務大切と勤勉し若くは其職務を失はんことを恐れつゝある次第である。これは誠に一面に於て中等教員其者の爲に氣の毒と言はなければならぬ。と同時に更に翻つて我六千萬の蒼生を如何せん、國家の前途を如何せんと言はなければならぬ。次第である。

文部嘲弄の不心得

第五に我教育の實際としてモウツ附け加へなければならぬ事は國民が平素文部を嘲弄する不心得の點である。今日の我國の新聞雜誌記者は殆ど附和雷同の目的物と文部省を見倣して居るが如く見える。尤も明治の日本國民は全體附和雷同の性癖を最も猛烈に發揮しつゝあるので、獨り新聞雜誌記者を咎むべきではないかも知れぬが、今日の新聞雜誌は所謂道聽途説の機關である。縦令重厚摯實の士が新聞界に入つても、新聞雜誌記者である限り矢張り輕薄兒の如く自ら裝ふ必要があるものと見える。偕て實際我文部省は、苟くも一片愛國の熱情を以てするに非ざる限は、人をして失笑を禁ずる能はざらしむる如き形跡を現はした事が遺憾ながら過去に於いて往々にあつた。故に一犬虛に吹えて、萬犬實を傳ふ、文部省が新聞

雜誌の嘲笑の目的物と成つたことは實に日既に久しいのである。新聞雜誌既に斯かる態度を示す所から、日本國民も亦其因つて來る所を仔細に研究し、吟味するの勞苦も取らず、識力もなく、遂に文部省に向つて輕薄なる漫罵惡罵を試るのがそれが政界の通人の事とするやうな状態となつたのである。實に氣の毒なるは文部省であるが、併ながら國民諸君は翻つて靜かに思ふべし、文部省は決して官僚の文部省ではない、政友會の文部省でも無い、實に吾人國民の文部省であるでは無いか。然るに漫然として、他の羽振の好き陸軍海軍其他の成功者強者に雷同して、失意者たる比較的不成功者たる、而して弱者たる文部省を嘲笑漫罵して以て快哉とするが如きは、是れ直に我身に向つて唾すると一般實に我國國民の體面を傷ぐる事、大なるのみならず、我國運發展の培養を遂ぐる所以に非ざること昭々として明かなる次第ではないか。

### 六 諸他の教化事項

然るに教化の事は獨り教育のみではない、我國教育の慘憺たる實に見るも憐れ



神社行政

なる、みじめなる状態は以上の如くであるが、尙教化の事項として、教育の外に宗教あり、神社あり、教導機關あり、感化機關あり、將又國語の整理あり禮儀の復興もある。今我宗教機關に就ては殆ど今之を言ふに堪へぬ、我神社に就ては内務省は之に對して頻りに氣を揉んで居る様子である、内務省に神社局と云ふものがあるが、併し内務省の眼中に映する神社は、徳教を淵源とする神社と云ふよりも、寧ろ一種の經濟的要素に制限せらるゝ一種の建造物として映するらしい、是は内務行政の色彩上自から然らざるを得ざる次第である、是は決して内務の行政官を咎むべきにあらずして、寧ろ制度其者を咎むべきである、全體神社の存立は、資本が相當にあつて、春秋の祭典を節儉せず、遣つて行けるや否やと云ふことが主眼ではなくして、實に禮儀行政上國民教化の一大淵源たるにあつて存するのである、然るに單にこれが資本關係經濟關係を監督し、經理し、按排するを以て、特色とし、能力とする所の内務當局者に之を任せて置くのが抑々の間違ひである、神社行政の如きは宜しく速かに之を教政省に併合して、教化行政の一大機關の一部局とせねばならぬ事柄である。

感化機關

感化機關の如きも亦然り、是に就ては我現今の内務省は却々善美なる、親切なる監督經營を爲しつゝある次第であるが、併ながら監督經營指導が、斯の如き有能の士に依りて而かも教化行政の一大機關の所屬として、十分に其手腕を振ふに至つたならば、更に一層の好成绩を擧ぐることであらうと思はれるのである。

國語及美術行政

國語及美術行政に關しては從來其事業が多少行はれつゝあるのであるが、其内容に就ては吾輩は此論文に於て之を批評することはせぬ、唯國語及美術は、學者若くは好事家の好事的事業に非ずして、實に教化行政の最大事業であると云ふことを、我朝野が擧つて覺悟するに至らんことを切に希望するのである。

教導機關

次に教導機關としては新聞雜誌の經營及講談會の如きが存在し、而して之に向つての行政は又是れ教化行政の一部分を爲すのである、我國の新聞雜誌に就ては、世界の新聞雜誌と同じく、大に言ふべきものがあるが、是は此論文に於て之を説くよりも、更に他の機會に於て審かに論ずるを適當としやう。

教化行政の大機關

之を要するに教化の事項は獨り教育のみならず、宗教、教導、感化、國語、禮儀、美術等尙種々の事項を含むのであるが、獨り教育に於てのみならず、其他の各事項に就て



も我教化行政に求むべき事は實に種々雑多あるものと言はねばならぬ而して先づ以て此際に吾輩が我國朝野識者の注意を惹きたいと思ふ事は學校教育を取扱ふ所の學校教育局と目すべき文部省を一省として置くよりも更に一切の教化行政即ち最新の政局より世界の大勢より割出せる國際競争の根本義政治改良の最大基礎たる教化行政其教化行政を渾一的に一纏めにせる教化行政の大機關として文部省を成立せしめ發達せしむることを策すべき一義である。

### 七 宗廟社稷を奈何にせん

斯の如く對外交策國際競争は今や既に進んで教化競争の時機に入り國內政治の改良も亦必ずや其本源を教化に依つて培養せねば最早手を下すべき地步は無いのである而して我國の教化及教化行政の實狀實に斯の如きものありとするならば此時に於て我國經國の第一義は實に教政の整理にあることは何人も首肯せざる可らざる所である。

教政の整理は如何にして之を爲すか英國が既に小規模ながら嚴格なる態度を

以て一大英斷を實行せるが如く少くも文部省に調査規劃の一局を新設して茲に教化行政整理の大事業を一任するに存する或は更に其規模を大にするならば内閣に教化行政調査局を設くるも亦一策である今は唯英國が最近の世界の大勢と自國の形勢とに鑑みて最小規模に於て實行しつゝある所の方策を朝野の識者に告げて參考に供するに止むる。

凡そ一國の運命を雙肩に擔ふ所の人士は朝に起り夕に消ゆる所の世相の小事細故を以て天下の形勢世界の大勢を見るの明を晦まざるを期せねばならぬ天下の形勢世界の大勢よりして深奥透徹する觀察を下し來るに於て朝に迎へ夕に送る所の世相の小事細故國際關係の大海の表面なる細波小瀾も茲に始めてと奥且微妙なる意味を有するものとなるのである夫の慌々焉として漢陽の陥落に膽を潰し南京の陥落に雀躍するが如き政局評論家は固より言ふに足らず苟くも我國家の上下朝野の識者にして眞に卓然たる識見を國家の將來に對して有し卓然たる樹立を國際競争の根本義經國の第一義に向つて儲ふるならば我三千年の社稷は茲に始めて其將來を祝福すべき次第である。



吾輩は茲に肅然たる態度を以て我元老諸公に語を寄す、諸公は宜しく遠大なる考慮を以て、教化政策の確立に一臂の力を投ずるを以て老後の事業とせよ、吾輩は同じく肅然たる態度を以て我朝野の大小政治家諸君に語を寄す、既に消極的雪冤的對外政策の時代を送りて、新たに積極的自動的對外政策の時期を迎へたる我今日の國運に際して、諸君は須らく胸に手を當て、靜かに考へ、教化政策の確立を以て我國家百年の大計とせざる可からざる事に注意を拂へよ、吾輩は更に肅然たる態度を以て我六千萬の國民諸君に告ぐ、諸君は須らく教化事業の發展を以てするに非ざれば、我國の前途は岌々乎として危きものあることを深く深く覺悟すべし、之を要するに、教化政策の確立、是れ即ち我國の自働的國家經營の最大根本義にして、而して今日唯今より直に周到にして違算なく、精密にして而も大體に通ずる所の教化政策を確立することが、即ち吾々臣民が聖明に獻替翼贊し併せて宗社廟稷の爲に國運の發展を策する所以である、此新年に際して經國の第一義として平生胸裡に儲ふる所を披瀝して、敢て我上下同じく國を憂ひ國を愛するの士に告ぐることを爾り。(明治四十五年一月太陽)

#### 四 行政整理管見

千九百四年六月二十一日、時の印度太守カルゾン卿は、倫敦市廳に於て演説して曰く、『凡そ如何なる國の歴史に於ても行政機關が根柢より分解改善せられ、以て時勢の必要に應ずるを要するの時機は來る、行政機關の運用久しければ、次第に其當初の任務を完行するに堪へずして、各所に罅裂重複及び弛廢を生ずるを常とす、行政の綱領は功率に在りとするは、予固より之に一致するも、唯此綱領や空言に畢るなく必ず實行に持來さるゝを要す、此目的を以て、予は印度に於て根本的行政整理調査會を設け、先づ局課の内部より著手して政府の全體に及ぼし、繁文縟禮の弊害を免除し、獨斷專行の禁壓を解除し、以て政務の簡捷を計らんことを期せり。』印度太守カルゾン卿の此意見は、亦埃及に於ても識者の爲めに必要を認められつゝあるのである、而して圖らざりき七年を隔て、我國現西園寺内閣の下に同様の計畫が唱道せらるるに至つた事は、先づ我輩の雙手を舉げて賛成するに吝なら



ざる所である。

桂内閣が、其内閣組織の初に於て戊申詔書の煥發を承け、戦後經營の浮華虚街の頹勢を防遏し、財政整理に向つて幾分の歩を進めた事は、當時我輩の頗る時務に通せる施設として歓迎した所であつた。今や西園寺内閣は亦其内閣組織の劈頭に於て、臨時制度整理局を設けて、行政整理の大事業を企てつゝある。桂内閣が其當初の政綱を實行するに於て、志大にして材疎く僅に當初の抱負の幾分を實行せるに止り、時には亦豫想せざる弊害をも誘致せることありしとは云へ、兎も角も志、善を爲すに存したるの點に於て、我輩は之に對する好意的批評の態度を改めなかつた次第であるが、今や新西園寺内閣に對して、世には又々其旗幟の徒らに鮮かなるに拘らず、其成績の割合に少かるべきを豫想して、冷眼を以て之に對する反情的批評家も無いではない、併ながら苟も其事にして社稷國家の爲めに改革進歩を計る事であつたならば、之を破壊的に批評するよりも、先づ援けて其志を成さしむるの態度を執るが、一般國民及び識者の態度といはねばならぬ、我輩は嚮に桂内閣に對せると同一の態度を以て、今の西園寺内閣の行政整理策に對するものである。

援けて其志を成さしむる

漫に空論を休めよ

主觀的・客觀的・空論

だ、我輩が君國の爲めに聊か懷抱を披瀝して、獻替翼賛する所あらんが爲めに、以下十數條の言論を費すに對して、若干の有司等は必ずや其多くの箇條に向つて、それは空論である、不可行の空論であると排斥するに相違ないのである、斯るなまじ苦勞人めきたる評論は、我輩の平素常に豫期しつゝある所であるが、併し所謂空論と云ふことは、時としてしか評する所の當局者の一大恥辱となる虞があることを茲に聊か分析講述するの必要がある。

凡そ空論に二種ある。一つは其策論其者が所謂泰山を挾んで北海を越ゆるの類で、實行され難き性質を内に含有する場合である、是は即ち客觀的の空論と謂ふべきである、斯る論策を實行せしめんと欲するものは、其愚及ぶ可らざる者であると同時に、斯る論策を策行せんと著手して而して遂げずとも、何等其實行者の恥辱となるべきではないのである、併ながら茲に所謂空論の第二種あることを記憶せねばならぬ、即ち策論其者は如何にも道理至極である、又それが行はれば、國家の爲に非常に幸福利益であるにも拘らず、之を行ふ者の力足らざるが爲に、遂に不可行の空論に了る場合がある、是は即ち空論の第二種、目して空論と云ふ所のものの眼



孔力量に取つてのみ不可行なる空論であるから、名づけて主観的空論と謂ふべきである。今世間の實際家なるものが往々識者の策論に對して空論呼はりをして一  
排し去り、若くは敬して遠ざけ、之を高閣に束ねて敢て顧みざらんとするは最も此  
第二の主観的空論が多いのである。

我輩は、前次の桂内閣を以て萬能力を有するものとも思はず、今次の西園寺内閣  
を以て亦萬能力を有するものとも思はず、故に我輩が宗廟社稷の爲に獻替の微衷  
を效す所の策論が、必ずしも一から十まで實行せられずとも、之が爲めに桂内閣若  
くは西園寺内閣の恥辱たりと速断せんと試むるものではない。併ながら凡そ天下  
の爲めにする所の志士や識者より出でたる獻策に對しては、其策の果して當れり  
や否や、其策の果して天下國家の爲めに幸福利益を持來たすや否やに就て批評す  
べきであつて、其空論なると否とに就ては、之を言ふべきものではないのである。空  
と不空との判断は、唯だ天が之を爲すのみである。然るに宗廟社稷の爲めに天下國  
家の爲めに、億兆生民の爲めに、策論獻替の當否及び便否を吟味するの至誠無くし  
て、直ちに之を目して處士の横議と爲し、野人の言と爲し、目するに空論を以てして

常否が問  
題なるの  
に空なるの  
みならず空  
にあらざる

排斥し去らんとするが如きは、是れ其人既に宗廟社稷の爲めに一身を獻するの誠  
の無きことを表明するものと云はねばならぬ。我輩は多士濟々たる西園寺内閣  
を以て、斯の如き小さな行政整理の衆策すらをも實行し得ざる程の微力なる内  
閣とは到底信ずることは出来ぬ。

併ながら我西園寺内閣の有司は、決して斯の如き輕薄兒のお揃ではないのであ  
る。我輩は以下我輩の述ぶる所の衆策が固より悉く中れるものでないこともあら  
うかと氣遣ふものであるが、併ながら少くとも之に接し、之を讀み、之を參考する所  
の有司及び國家を愛する國民諸君子が、耳を洗ひ目を淨めて、而して我輩の策論に  
對せらるゝことを確信するものである。

### 第一 行政整理の要義は功率の増大に在る事

成るべく僅少の費用を以て、成るべく多大の事功成績を擧ぐるが、即ち功率の増  
大と云ふ事である。功率が行政整理の根本綱領なるべきことは、既にカルゾン卿の  
演説にも擧げてあつた通りであるが、世人は動もすれば、行政整理と云へば、何か若

天引論を  
排す



千の資金を喰出すことを意味するが如く感ずるものがあるらしいのである。随分民間の有力なる批評家杯も行政整理の捷徑は總體の手前で何千萬圓を喰出すと云ふことを掲げて、其綱領の下に大鉦を揮はなければ可かぬとまで論ずるものもあるやうである。我輩はカルブソ卿と同じく、斯る粗慢なる行政整理には反對である。

抑々現今行政各部局の事業は、或は尨大に過ぐるあり、或は成績の擧るべくして而して甚だ擧らざるあり、例へば文部事業の如きは、實に其乙に屬するのである。而して事功成績に比して費用の大なる一點は、蓋し現今行政各部局の全般に通ずる病弊である。

凡そ行政整理の根本主義は三つに約めらるゝ、一つには國家の財力を經濟的に使用すること、二つには未だ擧らざる所の事功を擧ぐることに、三つには不急過大の事業を節約すること、此三つを以て一般行政整理に通ずる根本主義とせねばならぬ。

## 第二 高等官の數を増して大に判任官を減ずる事

現今の制度は、凡そ官廳に於て一事件一問題が起ると、先づ審理の事に當るものは屬官である、屬官が或は起草し、或は立案し、或は處理の上に意見を立て、偕てそれが高等官に廻り、それから次第に局長次官、終には大臣と査閲裁決を経る、此場合に於て世俗は往々之を官判と名づける次第であるが、兎も角も考査の主たるものは實に屬官に在ると、ところで屬官と云ふものは、實に其地位の低い、待遇の薄い割合に、非常に重大なる仕事を爲し、又多くは實に蹇々匪躬、忠義なる心掛の人々の多いことであるけれども、本來屬官の頭腦は先例を追ひ、法規に準して、機械的に事務を執るには適するけれども、獨斷專行、機宜に適して、各々の事項各々の問題を處理するに適するやう出来ては居らぬ、そこで繁文と云ふ弊が起るのである。

且つ又審理の根柢が高等官に依らず、實に行政的材幹の充分信任するに足るべき高等官に依らずして、此點に向つては能力の不十分なる屬官に存する次第であるから、手續上の階段が徒らに繁多にして、然も兎角手抜かりが生じ易く、そこで之



時代の差

を防がうとするときには、高等官と云はず、局長次官等各階級の査閲は多大の時と精力とを費さなければならぬこととなる。そこで、緋禮の弊が亦伴ふ次第である。想ふに我現時の制度は、明治十八年十二月の官制大改革を因襲したものである。が、當時帝國大學の卒業者は當時既に鬼籍に上れるものを併せて僅に八百、内法學士僅に百二十四、文學士四十七、學識材幹ある高等官の數は、到底以て各省若くは樞要なる地方政廳の必要な地を充たすに足らず、そこで止むを得ず屬官の中で稍々材幹あるものをして、始審立案の事に當らしめたのである。ところで今は帝國大學の卒業生だけでも既に一萬一千有餘に達し、素養ある材幹ある人物の行政事務に當つて力餘りあるものが、寧ろ其過多を訴ふる實狀である。明治も既に四十有五年となれる今日、三十年前に比して、時勢が著しく進歩發達して居ると云ふことは、最も注意を要する。

行政單位

我輩の考ふる所に依ると、行政各部局の最低階段に於ける一つの擔當事項毎に一人の高等官を置き、之を行政當事單位とし、必要に應じて雇員の一人、若くは萬已むを得ざるに於て屬官一人を全然此單位に隸屬せしめ、全く此高等官の手足の足

獨斷專行

らざるを補ふものと爲し、即ち純然たる機械的の機關と爲し、繁文緋禮を去りて行政事務を簡捷にし、各行政官の獨斷專行の材幹を活用して、以て行政の機宜を制し、獨り國家機關及び人民の時間に於ける大なる節約を計るのみならず、亦以て政費の著しき節約を計ることが出来る。歐米に於ては右の雇員は多くはタイプライターの技手であるが、我國にては、算筆に達せる速記技手を使用するが最も適切便利であらうと思ふ。是に於て屬官の使用は殆ど不必要となり、唯だ省内の特殊なる難務、例へば文書の往復、或は消耗品の出納と云ふが如き事柄のみに任ずるに至るであらう。

獨斷專行と云ふことは、最も軍紀軍令の嚴正にして秋毫犯さざるを旨とする、又最も階級的仕組の嚴肅なる陸軍海軍に於てすらも、其紀律の嚴肅であればある程、一面に於て獨斷專行が獎勵せらるゝのである。例へば上等兵が一分隊の兵卒を率ゐて或特別任務に従事するときは、尠たる一上等兵一分隊長を以てして、尙ほ且つ必ず獨斷專行の機略を豫期せられつゝある次第である。乃ち最も適當なる材幹を具有するものを行政官に任じ、而して之をして獨斷專行の能力を縦横に發揮せし



む、る、こ、と、が、行、政、の、簡、捷、と、政、務、の、舉、る、こ、と、の、爲、め、に、極、め、て、必、要、と、せ、ね、ば、な、ら、ぬ、  
 屬、僚、政、治、向、ほ、忍、ぶ、べ、し、屬、官、政、治、は、國、運、の、今、日、に、取、つ、て、は、明、白、に、前、代、の、遺、物、で、  
 有、る、而、し、て、冗、官、徒、ら、に、多、き、の、弊、を、致、す、次、第、で、あ、る、此、改、革、を、以、て、國、家、の、支、出、の、上、  
 にも幾分の節約を期待すべきは明白である。

### 第三 行政官の資格は形式的知識よりも 實質的材幹を重んずべき事

行政の學理的區分は、教政、財政、民政及び軍政の四科となる。偕て凡そ行政官の材能には、形式的方面と實質的方面とがある。形式的方面は、右の四科に通じて、法律の知識が即ち是である。實質的方面は、教政には、教育教化の何たるかの知識を要し、民政には、交通、土木、衛生、警察、監獄及び社會問題に關する知識を要し、財政には、經濟、財政、産業に關する知識を要し、而して軍政には、海陸軍事の知識を要する次第である。ところで我國の現今は如何と見ると、唯だ獨り軍政に於てのみ實質的材能が重んせらるゝだけで、其餘の財政部局は皆な偏に形式的材能が重んせられ、單に法律

の知識をさへ具有して居るならば、行政の各部局行くとして不可なる所なしと認められて居る。陸海軍の軍事行政には、殆ど悉く軍人を以て之に充てゝ居るが、其他一般行政官の任用は、所謂高等文官試験なる一種の科擧に依て居る。此科擧は偏に法律の知識を檢定するに止まると、其狀恰も支那の科擧が偏に文事詞藻の末に趨るにも似、若くは我舊幕時代の治者の階級が偏に弓馬刺撃の術を頼んだのと稍々似通ふ所がある。ところで孰れが結構なる成績を持來たすか、軍事的知識及び實行の専門的素養經驗ある人士に依りて成し遂げらるゝ、軍政だけが特に著大なる成績を呈したことを考へたならば、官吏任用に於ける知識上の資格が、形式實質孰れに重きを措くべきかの判斷は、容易に遂げらるべきである。

全體行政に要する法律の知識は、役人となつて數年間忠實に働いて居れば、相當の常識あるものは容易に通じ得る所である。勿論何れの官廳に於ても、時々頗る複雑なる難かしき法律問題は起るものであるが、是等に對しては、各省に於て一人の法律事務官、云はゞ法律技師ともいふべきものを置き、恰も現今の陸海軍兩省の如くにせば充分である次第で、役人が悉く皆な専門的の法律家である。是は、何の必



要も無いのである。

そこで勢ひ民間政治家を行政官に任ずるの適當なるや否やの問題が起つて來る次第である。民間政治家は、行政官の材能の形式的方面を備ふるものは蓋し極めて少いことであらう。其實質的方面に就ては、各人の經驗に於て長短の存する次第であるから概論は出來ないけれども、民政、就中地方民政に關しての實質的材能は、是は随分無いとも限らぬ次第である。要するに實質的材能に於て極めて嚴正なる詮衡を遂げて、それで若し相當の實質的材能の認むべきものがあるならば、民間政治家も、その材能の適する方面に於ける行政官に任用するは、必ずしも妨げなき道理となるのである。要する所は詮衡の嚴正が極めて重大である。今日材能の形式的方面が重んぜらるゝ世の中であるから、民間政治家は悉く不合格となる次第であるが、實質的材能が重んぜらるゝ時となつても、我國の高等教育が今少し普及するに非ざれば、案外之に對して適當なる人は少いことであらうけれども、それでも形式的方面よりも、實質的方面の資格ある者はいくらかはあることであらうと思はれる。地方の府縣會の參事會員、杯が郡長位の仕事をすることは、格別さう難かしい

事でないと思ひ得られやう。

#### 第四 教政官と教育者とを別世界の人たらしめざる事

此箇條は、第三條から引出さるゝ一箇條であるが、特に教政整理に重要な關係があるから一箇條として掲げて置く。

我國現今教政官は、法律家である従つて甚だ教育を知らぬ、又教育に經驗が無い。ところで教育者は各種の専門學科の人か若くは普通學の人である、教育には多少の經驗あるけれども、法律や行政の何たるを知らぬ。そこで教政官と教育者とが全然疎隔睽離し、教政官は會社の重役の如く、大中小學の教育者は勞働者の如く、教政官は命令を續發して、教育者は之に對して面従腹非し、一方又教育者の言論舉動は、往々頗る迂濶にして時勢の大局に副はず、多少器度ある生徒は、教育者に對して物足らなく感ずる、斯の如きは我現今の實勢である。

之を矯正する道は、先づ以て教育者の素養を深く且つ廣くし、其學識に於ては文



過渡方策

に兼ぬるに武を以てし、各種専門學科の外に、苟も教育家と云ふならば、必ず社會教化、法律、經濟及び武科の主要を兼ね學ばしめ、多くある斯る教育者の中から、其材特に行政に適するものを簡拔して、之を以て教官の樞要部を形造る、之が即ち根本的に我國の教政を伸張するの教政整理策である。

併し右の爲めには、先づ教育者の養成から大に設備し又改良して掛らねばならぬ、仍て過度時代の方策としては、文部高等官をして、時々出で、或は中學、或は師範學校、或は高等學校、或は大學、或は各種程度の専門學校、實業學校等の學校長、若くは教官たらしむるに在る、其方法は、恰も陸軍が假令參謀本部の參謀官に適し、若くは陸軍省の軍政官に適する者と雖も、之をして歐洲各國に駐在せしめ、其歸り來るや必ず先づ半年若くは一年の間各地方の聯隊附將校たらしめ、而已ならず若干年間中央の行政政務に參畫せる後に於ては、時々出で、地方の聯隊長若くは旅團長として經驗を積ましむると、同様の方法にするが最も必要であるのである、之が爲には法制局等が餘り杓子定規を振廻はさずして、速に文部高等官の定員を増し、彼等の從來の慣習上から左遷の感を爲すことを防ぐが爲めに、本官は文部省參事官又

は書記官として、相當の官等に於ける、或は群馬縣師範學校長、或は浦和中學校兼任といふ官名の下に、各地方に赴任せしむるの方策を立つるが必要であるのである、今日の實際では、文部高等官は、次官まで上り詰めた後ならば、學校長とはなれぬのである、而して其學校長は即ち大學總長である、故に文部省と教育の場所たる全國の大中小學校との間には、唯だ一の視學官と云ふ聯絡機關があるのみで、其間の融通聯絡は甚だまづく行きつゝある次第である、斯の如きは行政整理に注意を拂ふものゝ、三たび思を致すべき點と信する。

### 第五 教育者の資格は藝能主義を改めて人格主義に依るべき事

此條は亦前條から引出さるゝ所の一つの系である、而して是は現今最も中等教員の選敍に著明である、中等教員の選敍は、唯だ一藝一能に秀でたる者を簡拔任用するを期し、其他を問はぬ、故に、其中等人士の儀、表たるの資格の有無は勿論、全體其中等人士たるの資格すらも亦疑はしき者の、時として其中に入り來るは避くべか

藝能主義



らざる事である、例へば習字の免状と云ふならば、字を少し巧みに書きさへすれば宜いのである、裁縫の免状と云へば、裁縫だけが出来れば宜いと云ふ次第である、斯の如き選抜任用は、之を藝能主義と謂ふべくして、人格主義と謂ふべからざるものである。

抑も中等教員の養成は、從來未だ曾て研究せられ、刷新せられたるを聞かぬ、即ち根本的に刷新と設營とを要する、之に對する吾輩の方策は、即ち教化大學校の新設であるが、之に就ては既に詳に或筋に向つて獻贊せる所があるので、之を江湖諸君に披瀝するは、又他の機會を期せんと欲するのである。

世間で最も驚しいのは、各被教育者の教育を受くるに要する年限の短縮である、希望としては年限短縮に何人も異存のあらう筈はない、併し年限短縮と云ふことは、教育の功率の増大に依て自ら致さるべきである、若も教育の功率が依然として居るならば、それにも拘らず年限を短縮するのは、取りも直さず教育の退歩である、而して教育の功率を大にする最先最要の要件は、教員の改善である、今日まで我國に於て恬然として行はれつゝある所の、藝能主義の教員任用法の如きは、最も國民

教化大學

年限短縮  
論を評す

生活、國運發展の爲めに不經濟至極であると云ふことを、何故天下の人々及び我當局者は夙に覺らぬのであらうか。

### 第六 地方區劃制の地方政廳を廢して事務分掌制の行政地方機關を設くる事

府縣廳は、嘗ては今の臺灣、朝鮮、關東に於ける政廳の如く、其管下に於ける殆ど一切の行政事務を管掌したものであるか、それが次第に變遷して、朝に一事務を減じ夕に一事務を失ひ、即ち稅務は先づ以て府縣廳に寄留せる收稅長に移り、終に全く特別なる役所の稅務管理局に移り、遞信事務は一等郵便局の所管となり、尋で近時遞信管理局に移り、凡そ事務分掌制の行政地方機關の設置と共に、府縣廳の管掌事務は次第に縮小して、今は唯だ内務管下の地方政廳たるに兼ねて文部及び農商務の一部事務を管掌するものたるに過ぎなくなつた、これは我國の如き本來純一なる社會的實質を有し、版圖も小ならず、亦餘り大ならず、且つ軌近交通の著大なる發達を遂げて、自治の迅速なる發展を成遂げたる國情に於て、必至の勢運である、臺灣

府縣廳の  
進化



朝鮮、關東の如き、我國家に對して特別なる關係を有する地域を除くの外、我中央政  
府が直ちに各種分掌事務の中樞となり、地方は此中樞に本支相屬する所の事務分  
掌制に於ける各種の行政機關を有する事が如何にも中央との行政大組織大機關  
に於て、肘の指を使ふが如く事務の簡捷、經費の節約となるべき所以であることは  
極めて明瞭である。地方は其以外に唯だ各地方を以て區劃せる所の地方的自治機  
關を有して以て自治的政務の發達を期する、これが最も政務の簡易と敏捷とを期  
すべき所以である。

右の地方的自治機關は、府縣及び市町村は勿論必須であるが、郡は、其存立の必要  
頗る研究を要する事であらうと思ふ。

### 第七 教政の地方機關を設置する事

頭腦と手  
足

此條は前條の系である。

右の事務分掌制の行政地方機關の中で、行政發達の大勢上、最も先づ設置の急要  
なるものは、教政の地方機關である。是は教政の自存及び發達にも亦極めて必要で

ある。今の實際に就て見ると、文部省が一たび手を地方に於ける經營實現に下さん  
とするや、必ず内務省下の地方機關を通じて之を遂げなければならぬ。蓋し危然た  
る曩時の地方政廳と異にして、今の府縣廳以下は、實に特に内務省の機關として目  
せらるべきものである。されば我現今の教政機關は、恰も頭腦有りて手足無き動物  
の如く、發達どころか、自存すらも殆ど不可能であるのである。教政の實現は、地方自  
治體の協働を待つの外、地方に於ける行政機關として、必ず特設の教政機關に便ら  
なければならぬ。

### 第八 數量的設計を爲すべき事

凡そ數量的設計の荒廢は、我法律的行政に附隨する一大缺點と云はなければな  
らぬ。

數量的設  
計の荒廢

數量的設計とは何であるか、例へば全國に人口が若干ある、それからして學齡兒  
童の數を若干と計算する、それから一定の歩合に於て、實際の就學生徒を若干と計  
算する、それからして一定の制限に於て、之を總て教育すべき小學全體に於ける學



級數若干と計算する、而して之に應すべき小學教員數若干と計算する、それからして實際の統計に照して、又行政の手加減に照して、年々の死亡、退職、轉職者の補充若干、及び人口の自然増加よりする教員數の増加若干、此二つのものの和が若干と計算する、偕て是丈の教員數を年々養成し教育するが爲めには、師範學校の卒業生は年々若干を要すると計算する、そこで是丈の卒業生を養成する爲めには、凡そ全國に於ける師範學校の學級數が若干と計算する、そこで是丈の學級數を拵へる爲めには、學校數は若干を以て最も適當とすると計算する、そこで是丈の學校數が必要とする以上、凡そ師範學校に對する經費が若干と計算する、一寸聞いた所では、極めて單純なる如く見ゆる所の、全國に於ける師範學校の規模設置を策定するにも、右の如く動かすべからざる統計上數理上の根柢より計算し來つて、之に據つて設計を遂げる、是れ即ち數量的設計の最も簡單なる一例で、實に小學教員養成の數量的設計の筋道である、斯の如き數量的設計の必要は、獨り教政事業のみならず、更に汎く一般の行政事業の何れにも存する次第である。

私立學校の濫設

凡そ數量的設計は、我陸海軍に在りては常に實現せられたる所であつた、然るに

中央機關の大任務

一般行政、殊に文部事業に在りては殆ど全然閑却せられて居る、例へば或種の私立學校設立の出願あるときに、其許否を決するには、其學校の設立が社會の總體に如何なる影響を及ぼすかに關して、殆ど何等の考慮を費したらしき實跡が見えぬ、例へば中等教員養成の私立の機關の濫設の如きは、比々として皆な是れではないか、數量的設計なき學事機關の濫設は、其弊恰も泡沫會社の濫興が、産業界を攪亂する弊に勝るとも劣ることはない、凡そ行政整理と云はず、財政整理と云はず、總て整理事業の根柢は實に數量的設計に在る、數量的設計に基かざる整理は、久しからずして必ず破綻を生ずる、苟も數量的設計さへ立つならば、現今の教政及び許多の行政各部に於て、整理すべきの多々なるの事實が直ちに現れ來ることであらう、且つ又數量的設計と云ふ一つの重要事業を除き去るならば、教政の中央機關は其存立の理由の半分を失却する、世俗の整理論として聞ゆる所の、文部省専門學務局の事務は、之を帝國大學に移すを妨げずと云ふ説の如きは、固より杜撰にして採るに足らずと雖も、抑亦文部事業が從來未だ嘗て精密周到なる數量的設計を試みざるに馴れて、數量的設計の重要なること、及び其實に政務の根柢たる所以を忘



れたるに坐する粗漏なる議論と云はねばならぬ。四百八十を生徒定員とせる高等中學校二十五校の設立を案定して、之を樞密院の老人連の前に出し、忽ち高等遊民産出の虞はないかと云ふ批評に踏躰逡巡したと云ふ爲體の如きは、教政に於ける此參謀的至重要なる事業を閑却せるの科と云はねばならぬ。

數量的設計は、經濟的整理、行政功率の増大の根本要義にして、一般に行政整理に於て最も注意を要すべき事であることは、特に一言を添へて置かければならぬ。

### 第九 調査規劃の事業を起すべき事

調査規劃の事業の必要なるは、前條數量的設計の必要と同様の根據に於て、慧敏なる讀者の直ちに領かるゝ所であらうと信する。今一例を教政事業に取つて一言を添へて置かう。

國際競争の根柢は實に教化競争に存する。戦争より國防競争に進み、國防競争より教化競争に進む。戦争若くは國防に於ては、各種要綱の綿密なる調査規劃の必要なることは、夙に明確に認められ、我參謀本部及び海陸軍省が、其最要任務として之

文部省の至大任務

經費

を遂げ成して居ることは人の目撃しつゝある所である。今教化競争に於ける調査規劃の必要は、亦何も之に異なることは無いのである。況や列國の教政に於ける經營施設の汲々營々として、日進月歩の實狀を呈するに對し、之を精密に調査して、一歩たりとも後れんことを慮るが爲めには、毎日毎時起り來る所の庶務を處理する、ことを任務として、繁忙維れ日も足らざる一般行政局課の當り得る所ではない。教政廳たる文部の至大なる任務は、實に國家百年の長計の爲めに對外立國の根本義の爲めに、教政上の調査規劃の重事を遂げ成すに存する。此事は我輩既に數回本誌を藉りて世に公けにせる所であるが、今復た茲に之を言ふことの必要を感ずる。凡そ新設一局に要する經費は、委員會一つを整理すれば、之を供給して十分である。

### 第十 中等教育の振興を期すべき事

此事は特に事教政に關するが、併し殆ど教政整理の中堅とも看做すべき事であるが故に、特に一條を掲げる。

附 錄 行政整理管見



近頃の所謂危険思想とか自然主義とか云ふものは、實に我中等階級の危機を警告する所の社會的病症の症候と云つて宜いところだ。彼の通俗教育とか文藝取締と云ふものを以て之に對するは、一種の膏藥主義に過ぎぬ。一種の塗抹主義に過ぎない。抑、我國には、實に眞面目の意味に於て云ふべき中等教育は未だ存在せぬのである。其教員に於て、其學科組織に於て、其內的訓育に於て、其行政的管理に於て、我國の中等學校は、諸の海外一等國に於ける小學補習教育に伍すべきものたるに過ぎぬ。ところで大學教育が我國に於て尙多少の成績を擧げつゝあるは、唯だ其豫備機關として高等中學校今の所謂高等學校を有するが爲めである。中等教育の荒廢が既に斯の如きことを知らば、何ぞ社會の中堅たるべき中等階級の日に日に衰頹陵夷に赴きつゝあるを之れ怪まうぞ。

中等教育の振興は、實に目下教政の最大急務である。教政の審査を旨とする衆策は、皆な之を補ふこと勿論なりと雖も、特に中等教育局の新設及び教化大學校の設置は最も急務である。

### 第十一 教員俸給金庫を設置する事

小學教員の俸給は、現今實際各町村より之を支出して居る故に、町村が意外の發展を爲すこと無き限り、昇給は即ち轉任を意味する、年功加俸の制はあるけれども、到底姑息を免れぬ。今若し各町村より教員俸給として支出する一定額を醜集して、一府縣若くは全國の小學教員俸給金庫を作り、此大經濟機關からして適宜に按排するときは、總額に於て節減することありとも、尙ほ優遇の實を擧ぐることも數等なることが出来る。然れば經驗あり信用ある教員の轉任の頻繁なるの弊は、之を杜絶することが出来る。

中等教員に對し、右の市町村單位の代りに各府縣を單位として醜集する資金を以て、全國中等教員俸給金庫を作り、之を按排して中等教員優遇の實を擧ぐるの法も亦右に準ずる。  
斯の如き計畫を立て及び之を實行するが爲めにこそ、一つの中央教政の大機關、文部省と云ふものゝ必要は存するのである。



## 第十二 名譽職小學教員を設置する事

二十年來地方自治の發達と共に、名譽職と云ふものが随分出て來て、之が爲めには社會國家の發達に多大の裨益を爲したことは、申すまでもない結構なる事實である。併ながら我諸般の文明事項の如く、政治制度も亦歐洲の模倣である。悲しき名譽職制度の如きも、歐洲の實際行ひつゝある制度以外若くは以上に出で、藍より出て、藍より濃きの進歩發達が、二十餘年の今日尙ほ毫も之を見るに至らざるは、頗る遺憾とすべきである。我輩は茲に名譽職制度の一層進歩せる應用として、取敢へず名譽職小學教員策を提出するのである。

現今町村の經費の最大部分は教育費で、教員俸給は亦其教育費の大部分を占めつゝあるにも拘らず、教員待遇は實に菲薄の感を免れぬ。今各譽職小學教員を設置し、經濟上の報酬を全廢して、酬ゆるに皇室より出づる無上の名譽を以てする事とするならば、其利益は實に種々ある。第一には町村經費は之に依て大に節約せらる

、第二には其節約せる所の幾分を轉用して、有給教員を優遇することは易々たる事となる。第三には町村に於ける上流階級の兎角に陥り易き所の遊民的生活を轉じて、有用にして且つ高尚なる生活に向はしむることが出來る。兎角彼等の落行く先きは、花柳界の大盡か若くは政黨の提燈持に過ぎずして、とゞの詰まりは家名も家産も蕩盡するが關の山であるのを、無報酬の勞苦に服し、殊に極めて高尚なる教育の事に毎日其身を役すると云ふのが、即ち有用高尚なる生活に向はしむると云ふ所以である。第四には又地主の子弟が名譽職教員となつて、多年の間己が小作たる者の子弟を教育する所から、町村の上流と下流との間に子弟の關係が出來上り、教化上の先覺後覺の關係が出來て、依て以て自治體の更新作興を促し進むるに至る。二宮流に飽き、報徳宗に飽きた所の地方人士は、是と同時に地方改良の大切な事業を忘れざらんことが最も必要であるが、斯の如きが即ち二宮尊徳宗以外に、全く鮮かなる旗色の下に於ける地方改良の一大方策である。第五には地方資産家の子弟が、或は政治に狂奔し、或は奢侈逸遊に耽つて、社會上經濟上の秩序を害するの弊が、名譽職教員の設置に依て杜絶せらるゝ。以上は其重なるものを擧げたるに



眞の名譽

過ぎないが、此方策を實行するの利益は、既に右の如きものがあるのである。従來名譽職と謂ふものは、俸給と云ふものを受けないが、手當と云ふものを受け、服務規律の拘束を受くることの極めて小なる府縣町村吏員に名づけたるものに過ぎぬ。併し今謂ふ所の名譽職は、絶対無給にして、眞に名譽のみを以て酬いらる者で、其服務の如きは有給吏員と同一なるを妨げぬものである。抑も我社會而して特に我社會のみに限る所の名譽の淵源は實に皇室に在る、名譽職は宜しく其功勞に應じて皇室より位記を賜ひ、其特別勳勞に應じて勳位を賜ひ、以て社會上名譽の名と實とを全うすべきである。今鞠躬して陛下の赤子の教育に盡瘁すること二十年、然も其間純然たる義勇奉公の精神を以てするの外他の意思なき者は、議政府に列して國政に協賛する代議士と、其功勞に於て毫も優劣する所あるべきではない。然らば則ち斯の如き名譽職の人々の爲めに、代議士と同等の待遇即ち勅奏任官の中間の待遇を以てせらるゝは、恐くは至當とせねばならぬ。故に名譽職小學教員の待遇は、職を本科正教員に奉すること二十年にして、從五位に敘せらるゝくらゐを標準として、其餘尋常科正教員代用教員皆な之を準して等差あるものとすれば宜

我國特有の名譽

いのである。蓋し皇室に淵源する名譽は、實に我國の特色異彩である。一般に名譽職をして、此尊榮なる特色異彩に基くものたらしめ、名譽職を擴張して無報酬の勞苦に服する義勇奉公の美風を奨励するは、一面には國家經濟上の鴻益を持來たし、兼ねて又國民遊惰自棄の惡風を防遏する所以である。

### 第十三 學齡を五歳六ヶ月より始まるものとする事

蓋し誤算

現今學齡は滿六歳から始まる。然るに小學兒童の入學期は毎年一回之あるのみで、二期入學の制度を實施するものは、現在全國僅に十四校に過ぎぬ。故に平均我國小學兒童の就學年齢は六歳六ヶ月に始まるのが事實である。蓋し是は當局者の眞意に非ずして、實は其誤算に出でたるものらしい。平均六歳より始まるが適當と云ふ理窟は立つけれども、如何なる人間も六歳に一日缺けても教育を施してはならぬと云ふ理由は毫も立ち得ぬのである。



延長の事  
實と短縮  
の希望

教育行政研究

八二二

且つ我國は既に近年に於て義務教育年限の延長を漸行し、又中等及び専門教育に向つて年限短縮の希望が随分囂ましく聞えつゝある今日に際して、之を歐洲の文明國民、獨逸、佛蘭西、英吉利、瑞典、諾威、丁抹、芬蘭等、北緯五十度以上に棲息しつゝある民衆に比して、幾分早熟の徴候の著明なる我國民を、六歳六ヶ月まで學に就かしめざるは何等の不經濟であるか、今學齡を五歳六ヶ月に始むるに於て、そこで丁度平均就學開始の年齡が滿六歳となるのである。當局者は宜しく速に其誤算を更正して、年々新たに學齡に入る所の百二十萬の兒童、年々六十萬年の大經濟を漸行すべきである。此事は直接行政整理の一要目ではないけれども、社會經濟の一大要綱として茲に掲ぐる次第である。

#### 第十四 宗教及び神社に關する行政を教政の一部とすべき事

神社行政と宗教行政とは固より區別あるが、併ながら兩つながら本來教化の一要部として教育と相並ぶべきもの、之を土木、衛生、警察、監獄等と一列に視るべきも

奇なる道  
連れる

誤解する  
なけれ

のでなくして内務省に屬するよりも、文部省を教化行政の一省と爲して其一部を成すべきものである。

尤も教化の一要部として學校教育と宗教神社と相並ぶと云ふことは、學校教育と宗教との結合と云ふ意味ではないのである。亞細亞人として日本人支那人暹羅人が並ぶと云ふことは、日本人と支那人と暹羅人とは、漸次一つにならなければならぬと云ふ意味とは違ふ。近頃大分宗教行政上の問題が、歐米に於けるそれとは正反對なる方面に向つて囂ましくなりつゝあることであるが、故に一言蛇足を添へて置く。

#### 第十五 委員會を整理する事

數多き委員會の中で、各省より獨立し、且つ臨時の性質を有するものは、多くは避け難き必要あるものであるが、併し文部省に於ける衆個の委員會の如きは、或は當然常設行政機關の一部に於て爲さるべき政務に當り、或は全然廢止を妨げざる不急の事業に當り、何等委員會として存續する必要無きものが多いのである。

不要なる  
委員會

附 錄 行政整理管見

八一三



抑々委員會は之を常設機關の一部局に比して種々の短所弊所を有して居る。第一には極めて不經濟である。名づけて委員會と云ふだけで、多くは直接に何等身體は勿論精神をも役せざる無用の會員を多く包含する所から、甚だしく不經濟なるの不利益があることは、凡そ委員會に伴ふ所の弊である。

第二に職責判明を缺くの弊がある。或委員會に於て或事柄の議事るときに、有力なる一委員が缺席した、而して他日不幸にして丁度其問題が世間の大問題となつた時分に、此委員は、予は當時缺席せりと云ふ理由の下に、口を極め態度を極めて當該委員會の所屬の省の方針に反對運動を試みた、抑々委員は機關として頗る曖昧なる地位に立つものである、即ち職責の判明を缺く所から、德義問題として右の人物の舉動を評論するは別として、斯の如きは若も判明なる常設機關の一部吏員であつたとするならば、斷じて容すべからざる態度であつたのである。斯の如き制度の餘弊として、飼犬とも野犬とも付かぬものから手を噛まるゝことは、往々委員會制度に伴ふ手痛き經驗であるのである。

第三の事務の滯滞を招ぐの弊がある。委員會の委員は官吏でない、又頭數が揃ふ

か揃はぬかも必定解らぬとか、今日は出席過半數に充たざるが故に流會になる、若くは委員中の某々と相談なしには決する譯には行かぬと云ふやうな都合上から、委員會の仕事は實に敏活を缺くことの著しきものである。事務滯滞と云ふ行政上の最大禁物の弊害は、殆ど必ず委員會制度には伴ふものである。されば委員會の濫設は、判明なる行政機關の尤大よりも、更に行政の綱紀の弛廢を證明するものである。

夫れ當然常設行政機關の一部局に於て爲されなければならぬ所の政務が、必ず部外若くは半部外の諸々の委員より成立する所の委員會を待ちて爲さるゝを要するならば、是れ既に明かに當該常設行政機關の組織及び人員の簡選が、其本來の任務目的に副はざるものあるを證するものである。我文部省が委員會の新設に、日も亦足らざるの觀あるは實に悲むべきである。陸海軍にして若も一たび選敍任用其法を誤り、軍事の實質的材能無き者を以て其要部を充たすことありとせんか、國防調査委員會も必要となり、兵器調査委員會も必要となり、大演習調査委員會も亦直ちに存立の必要を訴へ來るであらう。



整理すべき委員會

文部省の委員會にして材能ある少數の常設官吏に移さるべきものは教科書委員會あり、全然廢止するも亦甚だ妨げなきものは文藝及び通俗教育委員會あり、教員檢定委員會は中等教育問題の解決を待ちて廢止せらるべく、醫術開業試驗委員會は勿論同様の運命に在り、國語調査は之を大學に移し、其行政に關する事項だけ文部が之に當るべきである、測地學の如き之を廢すべきでなく、且つ之を存するも何等教政機關としての文部の體面を傷くること無きものである、餘は皆な之に準じて商量し整理し、凡そ文部省たるものは、教政機關として當然且つ必然の重要政務に全力を注ぐを急要必要とする。

漫然たる新設

尙ほ茲に一つ添へて言ふことが、國民及び行政整理に志ある識者の參考とならうと思はるゝのは、判明なる行政機關と違つて委員會を新設することは、兎角當局者も漫然と之を計畫し、議會も亦漫然と之に協賛を與ふるの實例を我輩は有することを悲しむのである、何等の研究もせず調査もせず漫然其名目を掲げて議會の協賛を贏ち得、官制發布のときに際して始めて急遽其事業の項目を詮議し、往々之を部外に諮り、集むる所の數十の委員も亦何等特別の經驗も無き素養も無き研究

も無き鳥合の衆に過ぎずして、世をして或は單に微力にして自信なき行政省の人氣取の一小策に過ぎざるなきかの疑を挟ましむる如きことは、判明なる行政機關の一部局を創設する場合と異にして、委員會の新設の場合に往々實見する所の事柄である、之を計畫せる政府も、之を協賛せる議會も、國家に對する責任と識者、陸海軍當事者の批評を如何にせんとするか、由來政府者の威信は、多く此類の輕舉を以て失墜し來るものである、斯の如きは行政整理に於て、將來斷じて其過ちを再びせざる道を講じなければならぬ。

### 第十六 文部省の局課を整理する事

行政整理の一例として内閣に於ける一省、其中文部省を例にとつて、局課整理の標本を掲げて見やう。

- 一、専門學務局は之を専門教育局と改稱し、大學、専門學校、低度専門學校に關する行政を管掌す。
- 二、中等教育局を新設し、中等教育に關する行政を管掌す。

一標本



- 三、普通教育局を新設し、小學校、補習教育機關、特殊教育機關に關する行政を管掌す。
- 四、普通學務局、實業學務局は之を廢止す。從來の普通學務局の管掌は新設の中等教育局及び普通教育局に移る。實業學務局の管掌は、專門教育局及び普通教育局に移る。
- 五、調査局を新設して調査規劃の事業を振興す。
- 六、圖書局は從來の管掌事項の外、教科書及び民育圖書の監査及び編輯の事に任す。教科書委員會は之を廢止す。
- 七、禮度局を新設し、神社、宗教、及び禮儀に關する行政を管掌す。内務省の神社局及宗教局は之を廢止す。
- 八、民育局を新設し、國語、美術、文藝、博物館及び所謂通俗教育、即ち圖書館、講談會、演藝に關する行政を管掌す。國語調査委員會、通俗教育委員會、文藝委員會、美術審查委員會は之を廢止す。但し國語調査事業は之を大學に移し、文藝推獎は適當の時機に於て帝國學士院の一事業として之を成す。

九、教員檢定員會は適當の時機に於て之を廢止す。

十、維新史料編纂局は之を廢止し、其事業は之を大學の史料編纂係に移す。

### 結 語

以上行政整理、殊に其一例として教政整理に關して我輩の述べたる所は、或は之を歐米二十有餘國の實例に照し、斟酌を我國情に加へたるあり、或は我國特有の事情實勢に鑑みて急要の更革を提議せるあり、論じて詳ならず、説いて精からざるの遺憾はあるけれども、幸に今日一大決心を以て、我新西園寺内閣が行政整理の大事業に向つて、歐米第一流の政治家、印度太守カルゾン卿の如き人、其人と比肩すべき英斷を實行せんとするの美譽あるに際して、平素國家の爲め宗廟の爲めに竊に苦心焦慮する一端を述べて、右當局者の參考に供し、次には亦以て忠愛なる國民諸君、行政整理に志ある識者諸君子の參考に供した次第である。一部の有司は我輩の提言を以て、頗ぶる口に苦きの良樂として聽く者あるかも知れぬ、野人禮節に嫻はざるの責は十分に引く所であるが、願くは行政整理の大事業をして、羊頭を掲げて狗

此に予を當るに  
特言を當るに  
此言を當るに  
特言を當るに  
此言を當るに  
特言を當るに



肉を賣るに了らざらしめ、願くは空論といふ冷語の下に志士の熱誠を束閣せざるべく、十二分の誠意を以て宗廟社稷の爲めに此事業に當ることを、當局有司の末の末まで心掛けられたいと云ふことを更に一言添へて置く。(明治四十五年三月太陽)

## 五 外政の新局面

一篇の大主旨——一、露國形勢の變移——二、英國の覺醒と外政——三、獨逸の飛躍——四、米國と東洋——結論、外政視線一轉の時機

### 一篇の大主旨

一昨年八月より昨年八月に至る、第二回の世界漫遊に於ける我輩の使命は、一つには世界平和の可能なるや否やの問題の解決、二つには教政の根本問題の調査、三つには民政事項の研究、此三面に於て存したのである。而して其第一の問題に關する我輩の研究調査の一斑を今本誌を藉りて『外政の新局面』と云ふ題目の下に聊か江湖國を愛する諸君子の前に述べんと欲するのである。

固より我輩の研究調査事項の範圍は、斯の如く頗る廣きものであるに拘らず、之に比して年月は餘り長くなかつた故に、調査の精細を期することは不可能であつたが、併し結論は年來の研究と相合して、大體に於て誤なきを信ずる次第である。我輩が此一篇に於て江湖に提出せんとする所の結論は、我國の外政家が、東洋を

此十篇は四年に著すなり

本書の執筆の起るに對して、我輩の意を以て、終る所を存す



料理するに、東洋に於てすることなく、其著眼を遙に波斯灣及び南米に向けること  
 の必要ありと云ふに存する。抑も東洋は、世界禍機の本源と認められたること日既  
 に久しい、縦令全世界外交舞臺の中心とならぬまでも、せめて東洋の形勢を料理す  
 ることだけは、我頭上に懸る所の事ではあるまいか、併ながら外政の事たる、否な世  
 界の形勢たるや、一波動いて萬波動く、是れ必然の勢であるが故に、東洋の形勢を談  
 するに、東洋にのみ目を局するは、甚だ輕卒なる政策と云はねばならぬ、東洋を料理  
 せんと欲せば、必ずや更に遠い所に目を著けて、勢を以て東洋の形勢を控制するこ  
 とを必要とする、即ち世界全體の形勢を達觀して、是に於て乗すべきに乘じ、是に於  
 て制すべきは制し、以て東洋の形勢を作出すことをせねばならぬ、然らざる限り獨  
 り我國の世界に於ける外交の常に受身的となるのみならず、東洋に於ける我國の  
 地位も、亦常に受身的になることを免れぬ。

世界の形勢の中で特に最も注意すべきは、露西亞獨逸、英國及び米國此四ヶ國の  
 活動にして、其注目を要する地域は、東亞、波斯灣、南米、太平洋、附たり比律賓及び布哇  
 に在るのである。

今此論を述ぶるが爲めに、暫く次の五段に分けて御話をしやうと思ふのである。  
 一に露國形勢の變移、二に英國の覺醒と外政、三に獨逸の飛躍、四に米國と東洋、五に  
 結論、即ち此順序で以下述べて見やう、勿論各國の社會及び其運命の狀態は、復た別  
 に述ぶる機會はあらうと思ふので、此所では唯だ我外政に關係する範圍に於て聊  
 か述ぶるつもりである。

### 一 露國形勢の變移

日本を發して西比利亞鐵道に依て歐羅巴に旅行する者は、先づ哈爾濱附近に於  
 て極めて雄大廣濶なる地勢を見ることである。哈爾濱の停車場は千九百三年の新  
 築で、露國が東方を計略せる當時の雄志は、之に於ても髣髴せられるのである。併な  
 がら彼れの壯圖は、日露戰役に依りて一たび大なる頓挫を受けたことであるが、そ  
 れにも拘らず西比利亞鐵道の複線工事の著々として進捗しつゝあることは最も  
 注意を要する。西比利亞の地は、廣濶なる地勢とは云ひながら、バイカル附近は實に  
 天然の要害で、此所に露西亞は確に東部と中部との區劃を存する、而して露西亞の



中部と西部とを界するものは實に烏拉山脈である。全體亞細亞歐羅巴と云ふ地勢上の界は不自然なる境界で、佛國の露西亞研究の泰斗アナトール・ルロアボオリウも言つた通り、露西亞は實に亞細亞と歐羅巴との中間的國家である。露西亞の少くとも地理上の大部分は亞細亞に存する所から、既に露西亞は寧ろ亞細亞の露西亞であると謂ふべきのみならず、地勢は東浦蘆斯德、沿海州よりして、西、ビストラ川、カルバシャン山脈、及びブルト川に依て南北に劃せられたる一線に至るまで、廣濶平坦なる世界第一の大陸的地勢が連続するのである。即ち適當に歐羅巴と稱すべきは、普通に謂ふ所の中及び西、南歐羅巴に於て存するので、歐羅巴露西亞は正に西北利亞に連續して見られなければならぬ。此大なる露西亞が、自然にバイカル湖及び烏拉山脈に依て東中西の三部に分たる、次第である。此地勢觀は少しく斬新を街ふの傾があるけれども、歐羅巴に國するものは、兎角歐羅巴の事が微細に目に入り過ぎる。是故に西に寄つて東まで見透す見方と、東よりして西まで見透す見方とは勢ひ餘程違つて來る。而して從來の露西亞地勢觀、歐羅巴地勢觀は、即ち歐羅巴人の見方で、之を一層大なる東方の眼より見れば、是非とも右の如く言はなければならぬのである。

素朴なる文明

斯○る○雄○大○な○る○地○勢○に○國○す○る○所○の○露○西○亞○民○族○が○今○尙○は○頗○る○幼○稚○素○朴○な○る○文○明○を○有○す○る○こ○と○は、恐○く○は○世○人○の○想○像○以○外○で○あ○ら○う○と○思○ふ○。嘗○に○其○人○種○の○雜○多○に○し○て○未○だ○融○合○調○和○の○域○に○達○せ○ざ○る○の○み○な○ら○ず、其○社○會○生○活○が、或○は○美○術○に○於○て○も、或○は○言○語○に○於○て○も、頗○る○發○達○渾○成○の○域○に○遠○き、是○等○は○皆○な○露○西○亞○人○の○幼○稚○な○る○語○を○換○へ○て○言○へ○ば○將○來○あ○る○民○族○な○る○こ○と○の○證○明○で○あ○る。露○西○亞○の○言○語○は○頗○る○子○音○に○富○み、隨○つ○て○其○字○母○に○於○て○も、羅○馬○字○な○ら○ば○七○字○を○要○す○る○ほ○ど○の○複○雜○な○る○字○母○す○ら○も○あ○る。例○へ○ば○シ○チ○ア○と○云○ふ○字○母○の○如○き○は○そ○れ○で○あ○る。是○故○に○露○西○亞○が○今○尙○は○羅○馬○字○を○採○用○せ○ず○し○て、特○別○な○る○字○母○を○有○し○て○居○る○の○は、露○西○亞○と○し○て○は○當○然○の○事○と○云○は○な○け○れ○ば○な○らぬ。浦○潮○斯○德○に○上○陸○せ○る○者○は、必○ず○や○先○づ○其○肉○料○理○と○も○付○か○ず、將○た○ス○ウ○ブ○と○も○付○か○ざ○る○一○種○の○馳○走○に○辟○易○せ○ざ○る○者○は、無○か○ら○う、併○な○が○ら○此○ス○ウ○ブ○は○實○に○露○西○亞○の○今○日○及○び○將○來○を○語○る○の○關○鍵○で○あ○る。露○西○亞○人○は○ス○ウ○ブ○を○食○ふ○に○當○り○て、必○ず○や○匙○の○外○に○フ○オ○オ○ク○及○び○ナイフ○を○も○併○せ○用○ゐ○る。何○と○な○れ○ば○其○ス○ウ○ブ○に○は○巨○大○な○る○肉○片○が○入○つ○て○居○る、即○ち○露○西○亞○人○は○肉○を○煮○て○ス○ウ○ブ○を○造○り、而○し○て○ス○ウ○ブ○と○其○肉○片○と



を併せ食ふ所の民族である。之を極めて軽く極めて上品なる巴里風の料理と較べると、民族の幼稚なると發達せると、文明の素朴なると浮華なるとの對照が極めて明白に知れる次第で、之を手近く申すならば、萬葉集の文學と新古今集の和歌神代の風俗と平安時代の風俗との對照よりも更に甚しきものがある。と云はねばならぬ。

露西亞人の神經の遲鈍なることは亦著しき點である。寺が鐘を打つの響は、幽玄なる鐘聲には非ずして、我東京人士がニコライ會堂の鐘に於て聞くが如き、殆ど警鐘の亂打に類する。而して東京では唯だ一のニコライあるのみであるが、莫斯科ベテルスブルグに於ては、所謂南朝四百八十寺と云ふが如く、實に數百の寺鐘が時を定めて亂打せられるのである。露西亞の大なる都會に於ては、毎日毎時火事騒ぎの如き鐘聲を聞かなければならぬ。獨り耳に訴ふるものが斯の如くしちくどきのみならず、目に訴ふる美術の彩色も、亦之に準じて極めてしちくどきものである。獨り色彩のみならず、形に於て現はさるゝものも彫刻のくどくしきに於て明瞭に映ずる。

露西亞民族の幼稚ながら素朴簡易にして、如何にも我國民の生活の古代を髣髴せしむるが如き一の事項は、其稱呼の簡單なることに於ても見ゆる。露西亞人はくどくしく姓名を呼ぶことをせぬ、我大使館參事官落合君の如きも、露西亞の宮廷に於ては、イワン・ペトロウイチと云ふ特別の名前を頂戴して居らるゝさうである。イワンは即ち個人名で、ペトロウイチは彼得の息子と云ふ意味で、露西亞人は苗字杯を四角張つて云はずに、彼得の息子のイワンと云ふやうな名稱を以て常に呼んで居るのである。我國の田舎でも三吉と云ふ兒童は、朋輩からも教師からも三吉と呼ばれて居るが、都會の師範學校附屬小學校杯では、くどくしく佐藤さんとか齋藤さんとか苗字を呼ばるゝ、此田舎生活と都會生活とは、業に既に文明の幼稚と發達とを表すると同時に、都會生活は既に盛りを過ぎたる文明にして、田舎こそは眞に生氣充滿せる將來ある文明を表する次第である。之を一括して露西亞の民族を謂ふならば、實に親しむべき國民將來に富める國民と謂ふべきである。

露西亞の將來を達觀せんとするものは、必ずや又皇室及び宗教に就て深く察する所がなければならぬ。ベテルスブルグの中央を貫流するネバ川の北岸に、今は市



の真中であるが、彼得大帝の家と云ふものがある、是は三間に六間許りの小さな木造の家である、實に彼得大帝が新たに波羅的海岸に此ベテルスブルグの大都會を經營せんが爲めに、此所に假小屋を設けて計畫し差圖を定められたる所である、是が今日鄭重に保存せられ、其近傍は小公園となつて居る次第で、之に對する露西亞人民の渴仰心は偉大なるものである。

我輩は露國滞在中、ベテルスブルグの最大劇場なるマリンスキイ座に丁度舞臺開きの劇を見た、是は「ジズヌ・ザ・ツァリヤ」と云ふ劇で、其筋は波蘭が尙ほ國勢強大なりし頃露西亞と戦ひ、露西亞軍は稍々敗北の状態に在つたときに、皇帝——當時は國王——が、苦戦して落行く先を波蘭人が追躡して、一老翁に王の行衛を鞫問した、然るに翁はあらぬ方に波蘭人を導いて、爲に王は身を以て免れ、而して越王勾踐の吳王夫差に對するが如くに、會稽の恥を雪ぐに至つたと云ふ大體の筋で、其間に田舎娘の清らかなる戀を點綴し、以て一篇の歌劇とせるものである、聞く所に依ると年々舞臺開きの祝興行には、必ず此劇が演奏せられ、而して此翁の子孫は、今日に至るまで全く一切の租税を免せられて、皇室より優遇されて居ると云ふことである。

皇室と人

官僚と皇

斯の如きは、美術としては頗る素朴ながらも、之を以ても亦露國皇室が人民に對する徳望を養成するに於て、如何に心を用ひて居らるか、仄見ゆる次第である。併ながら皇室對人民の感情は、今や幾分變遷を來しつゝあるやうに見ゆる、就中露國官僚の腐敗は、日露戦役の際に於て、我軍の旅順占領に於ても頗る見えたと通り、獨逸の信憑すべき記者著述家の書いたもの杯を見ても、頗る甚しいものがあるやうである、而して官僚は即ち皇室に最も直接するものであるが故に、官僚の失態は累を皇室に及ぼす、皇室對人民の感情の斯る變遷に對する調和策として、近頃又皇室が頗る力を入れて居らるゝものが種々見ゆるのである、例へば人民の矯風を兼ねて大なる娛樂を興ふる所の人民館、一兒毎に一人の嫗母を附けて養育する所の千五百兒を收容する大育兒院、各種の盲啞教育、二千の生徒を收容する歴山二世小學校及び宮城並に離宮をば、半公園の如く開放して、此尊嚴なる露西亞帝室にも拘らず、人民の縦覧を許すこと、恰も文王の囿方七十里、民と共に之を楽しむと云ふ趣がある、斯の如きは皆な時代の勢で多少變遷を來しつゝある所の、皇室對人民の感情を温に保つ所以の方策に非ざるはない。



併ながら露國皇室の尊嚴の根柢は、本來宗教に在つたものが、今や漸く變じて政治的になりつゝあるのである。侵略主義に於ける宗教の効力が減じて、政治及び軍事の効力が増すに随つて、露國の國是に對する皇室の力は次第に薄らぎつゝある事實である。從來露國の歴史を顧みると、露國ほど軍事的勝利に乏しき歴史を有するものは無い。彼得大帝が瑞典のカアル十二世と對抗せるや、恰も漢の高祖と楚の項羽との如く、大小百戰、唯だ其最後に於て、彼得大帝は勝利を收めたと云つて宜いのである。支那の康熙帝と對抗して、露國が遂にネルチンスクの條約を結ぶに至つたのは、獨り軍事的勝利に非ざるのみならず、亦外交上の失敗と云はなければならぬ。歴山一世が普魯西に對し佛蘭西に對する外交の如きは、全く弱者が唯だ狐の如き狡猾を以て爲せる所の外交上の成功と云ふに外ならないのである。クリム戦争に於て、セバストポオルに於ける露西亞の敗北の如きは、近世の殊に著明なるものである。ブレヅナに於て土耳其のオスマンバシヤを降服せしめたるも、武略上からは最も恥づべき敵國の援兵を買收せることに依て、纔に之を遂げたのである。其他、北清に於て露西亞が滿洲占領の形を成したのも、例の北清事件の時に於ける火

事泥的行爲の結果に過ぎぬのである。日露戰役に於ては、近く世界の記憶に新たなるが如く、露西亞は負け續けて居つたのである。嘗て我對馬を安政年間に占領した、これ杯は無論軍事的勝利の結果ではない。樺太千島の交換を爲して樺太を其手に收めたのも、何等赫々たる武勳を伴うたことでは無いのである。之を一言にしていふならば、露西亞の外交は、常に女性的であつたと言つて宜いのである。此女性的外交には、亦女性的なる宗教が伴うて甚だ都合なるものである。然るに今日世界の大勢は、女性的宗教の權威漸く衰ふるに至つたので、國家の首長たると同時に、一面宗教の首長たる露國皇室は、此勢の浪に打たれて、其尊嚴を減ずるの止むを得ざるに至りつゝある。是は露西亞の將來を考察する者の見通すべからざる一個の大なる事實である。露西亞を理解せんと欲する者は、又最も露西亞の農村を観ることを要する。兎角世間の社會觀察者は、國家の渾一的行動の發源地として、其國の首府及び其都會的社會生活を觀察するを以て、能事了れりと爲すの弊があるが、如何にも直接に國家の行動は其首府より出づるが故に、之を見残すことの不可なるは言ふまでもない。併ながら英國を除くの外は、如何なる文明國と雖も、其國民の大多數は



農村の最大産物

農村住民である露西亞に於て我日本に於て殊に然り。夫れ農村の最大産物は農産物に非ずして實に人物に在る。是は動かすべからざる一個の社會的鐵案であるが、露西亞の將來を斷定せんが爲めには、必ずや其農村に立入つて觀察することを要する。

農村の疲弊

之を一、言にしていふならば、露西亞の農村は、殆ど疲弊を極めて居ると言つて宜い。露國の人口一億四千二百萬の中、農村住民は實に一億千五百萬である、千七百八十九年の佛蘭西革命前、佛國の人口二千六百萬の中、二千百萬は實に村落人口であつたが、露西亞の今日は、恰も當時の佛國の如き割合に於て在ると云はねばならぬ。其農村に立入つて觀察すると、其道路は細く且つ曲り紆つて汚く、其農耕の方法は多く三分耕作で、人が少くして土地餘あり、然も其土地は未だ充分の改良を施してない者であるから、幼稚なる瘠地である、幼稚なる瘠地とは、之に土地改良を施せば將來化して美田となるの望のあるのを、農業の幼稚なるが爲に、割合に收穫の少いことを意味するのである、大方は共田制で十二ヶ年毎に地割替を爲す、農村の家屋の矮小なるは殆ど想像の外で、其風呂場の如きは甚で不潔であり、飲食は殆ど馬糧

偉大なる將來

と擇む所ない、従つて疫病が非常に多く流行する、農村の住民は概して奴隸的に無教育なるが故に、僅に甲乙兩地方の間を渡つて歩くに過ぎざる鐵道員ですらも、社會黨杯と共に、頗る蒙昧なる農村住民を煽動する危険があるのである、露西亞の土地を一通り改良しやうと云ふには、どうしても五百億圓の資本を要すると云ふ計算になつて居る、斯の如き状態であるから、露國の農村には、案外社會主義と云ふものが蔓延つて居るのである。

併ながら露國農業の將來は實に偉大なるものである。露西亞の中部及び歐羅巴露西亞に於いて、その田野の廣漠たるは更にも言はず、其廣漠たる田野に對しての耕作の方法は實に大仕掛である、ベテルスブルグの農産博物館に就て研究すると、一日に二十町歩の馬鈴薯を收穫し、麥を收穫し、麥ならば刈つた後から、刈るに従つて之れを束ねる所の機械がある、人間一人に馬三頭を以て一日に是れだけの仕事をするのである、今や露西亞が力を竭して戰爭以後從事しつゝある所の普通教育の進歩と云ふ一の藥劑をさへ投せば、農村の將來は實に大なる力を有するものと云はなければならぬ、即ち富に於て大なる力となり、人に於て大なる力となるに相



世界に對する露國

波蘭の形勢

違ふないのである。西比利亞鐵道一たびエルクウツク驛を發して西に向ふと、半里にして一驛、一里にして一村、實に西比利亞人口の稀少なるに對して、想像以外に著々村落が發達して居るのである。即ち露國の農村は、人の供給所として、併せて又富の供給所として、頗る偉大なる將來を有するものと云はねばならぬ。

斯の如き露國が、今日世界に對して如何なる關係に於て在るか、は、最も我々が注意を以て攻究せねばならぬ事柄である。今大體之を左に列擧して見やう。

(一) 波蘭に就ては、世の中でよく見る所の憂國の志士と云ふ種類の人士は今尙ほ或は革命反亂の起るべきことを期待する者もあるけれども、是れは今日全く何等の顧慮を要せざるまでに進んで居るのである。露西亞と獨逸とは少しく剛に過ぎ、波蘭を治むるの寬嚴宜しきを得て居るのは、埃太利であるが、併ながら波蘭亡びて既に百五十年、今日波蘭の獨立を夢想するは、殆ど印度の獨立を夢想するの類と云はねばならぬ。言ふまでもなく波蘭問題と云ふものは、今日と雖も露國の政治家の頭の中に多少あるけれども、是は單に一種の内治問題一種の國語問題、教育問題乃至宗教問題に過ぎぬのである。

芬蘭統治

(二) 芬蘭は千八百九年を以て全く瑞典の手を離れて露西亞に屬し、爾來露西亞は外交上の樞機を握つて、内治上の事は總て芬蘭人の自治に一任して居つたのであるが、一昨千九百九年我輩が露西亞より芬蘭に遊び、芬蘭を去つて後、未だ一ヶ月ならざるに、十月十四日を以て露西亞は芬蘭に對して、高壓手段に出でんと試みたのである。即ち芬蘭の東、露西亞に接するウイポールグの一縣を、露西亞に併合せんと試みたのである。一時露西亞は其手を收めたけれども、是は芬蘭及び諸外國の顔色を窺ふに過ぎぬので、斯の如きは固より早晩到るべき運命と見なければならぬ。是より先千九百一年に、露西亞は芬蘭人の兵役の權利及び義務を剝奪し、芬蘭人は之に對して、年々一十萬マアク即ち四百萬圓の兵役税を拂ふ。芬蘭の警察は退役軍人が之に當ることとなつて居るが、其規則を改正せざる限り、遠からず芬蘭人にして退役軍人たる者が無くなる故に、警察も亦期せずして露國の掌中に轉げ込む。千九百四年には露西亞は芬蘭に銃砲の輸入を禁じた。即ち今日に於て、事實上芬蘭人は全く無腰の國民である。芬蘭は其教育の隆昌を以て、其女權の擴張を以て、其國會に於ふる二十有三人の巾幗代議士を以て、其酒を飲むことを慎める、生真面目なる、



品行方正なる風俗を以て、而して國家とし國民としての存在は、年々其基礎を薄うしつゝあるのである。斯の如きは芬蘭を統治するの露西亞に取りて、一大成功と云はねばならぬ。

猶太人排斥

(三) 露國の猶太人排斥は實に系統的である、誠に何から何まで一貫せる政策は、行届いて排斥方法を執つて居るのである。先づ猶太人の居住を制限する、即ち或市に限つて猶太人の居住を許し、其市に於ても恰も遊廓を設定するが如く、或町に限つて居住を許す。次に猶太人の爲し得る職業は、床屋若くは藥店、若くは一等商人と云ふことに限られる。猶太人が旅行して宿泊する場合には、其期限に一定の長さがあふ。ベテルスブルグは六ヶ月、莫斯科は一ヶ月と云ふやうな次第。猶太人の教育は、大學入學は特許を以て許さるゝが、普通の教育は、皆な露西亞人とは別校舎に於てする。斯の如くにして他の文明國、例へば獨逸、埃太利等が、猶太人問題として頗る困難をしつゝあるにも拘らず、露西亞人は、斷然たる斯の如き行届いたる方策を以て、餘り多く猶太人問題には、苦まぬ次第である。

(四) 以上の三つは、露西亞の對内關係として見るべきであるが、次に次第に對外的

西比利亞經營

なる關係として見るべき事を列挙するならば、先づ露西亞の西比利亞經營は、日露戰役以來大打撃を蒙つて居るけれども、それにも拘らず著々として其經營の歩を進め、浦潮斯德の如きは、戰役後に於て何等衰頹の狀を呈せぬ次第である。併ながら戰役前に於ては、西比利亞こそ露西亞の力を注げる主たる目的物であつたのが、今日は主たる位置を失うた。これは、明白に茲に掲げねばならぬ。露西亞當初の西比利亞經營が、西比利亞よりして滿洲に向ひ、日本海に向ふの經營としてよりも、今は寧ろ稍々西の方に向ひつゝあることは、極めて重要な變遷と云はねばならぬ。

滿洲經營

(五) 即ち滿洲經營は、今は寧ろ靜止狀態に在ると云つて宜い、南滿鐵道を日本に割譲し、日本の南滿鐵道經營の著々として進捗するは、或は露西亞も意外とする所であつたかも知れぬが、斯る狀態の下に於て、更に極めて大なる活動の舞臺を有する所の露西亞は、必ずしも滿洲に執著せず、恰もネルチンスク條約以後百七十年間清國に對して雌伏の狀態を執つたと同様、兎も角現在露西亞の滿洲政策は靜止的である。

(六) 之に反して露國の蒙古に對する、近來頗る刮目すべきを覺ゆる次第である、全

蒙古經營



體露國がブリアアド族を取扱うたことは頗る巧妙なる政策で、本來喇嘛僧は妻帯したものであつたが、近世は喇嘛は妻帯を禁せらるゝ、喇嘛は如何に顯要の地に立つても、如何に權力を得ても一代限りである、そこを利用して露西亞は喇嘛には有ゆる優遇を與へ、一般蒙古人をば虐待するが故に、少しく氣骨ある蒙古人は皆な喇嘛となる、喇嘛となれば充分に花が咲いて、一代限りで枯れてしまふ、即ち是は人爲的に蒙古人の種族を次第に下落せしめる所の方策である、近時露國の蒙古活動は、大に鐵道政策に向いて來たのであるが、併し此鐵道が經濟上極めて重要であるかと云ふと、張家口、恰克圖で、茶の荷が一箱三布入の運賃六留であるのが、鐵道に依て遞減すること二留乃至五留に過ぎないからして、經濟上からは、蒙古鐵道は左程價値あるものとは云へぬのである、然るに露國は此方面に甚だ力を注いで居るのを見て、露國の蒙古政策の那邊に存するかは明かである、昨今伊犁方面の活動も、此と連關せる常山の蛇に外ならぬ。

(七) 併ながら更に大に注意すべきは、露國の中央亞細亞に對する政策である、全體露國には、中央亞細亞に向ふ三つの徑路があるのである、先づ大體に於ては左(東)の

中央亞細亞政策

道及び右(西)の道であるが、露國が中央亞細亞より左の道を取れば直ちに阿富汗を突き、此阿富汗よりして更に道が二つに岐れて、左を取れば印度を突き、右を取れば卑路坦に向ふのである、それから中央亞細亞より右に向へば、即ち波斯に進む次第である、そこで西比利亞鐵道のペトロバプロフスクよりタシケントに向ふ鐵道、是はまだ未成線である、オオレンブルグ、タシケント線は既に出來て居り、バクウから裏海を越えてクラスノウオドスク、サマルカンド、タシケントに行くのが一の線、クラスノウオドスクから更に岐れて、メルブよりクシクに至る線路あり、而してタシケントよりは更にアンヂジャンに延長せられて居るのである、是れ皆な露國が中央亞細亞より阿富汗、印度、卑路坦に向ふ所の、勢力の集中する線路である、波斯方面の經營に就ては、昨年十二月の初に英吉利と露西亞との間に、波斯鐵道の協商が出來た、斯の如きは恐らく波斯分割の端緒に向つて、更に一步を進めたものと云つて宜からうと考へる。

(八) 次には更に西して、高加索地方からの露國の南下の策であるが、此方面より向ふのは又左右の二つの方向があるので、左は即ち波斯に向ふ、露國は波斯に向つて

高加索方面の形勢

果然今日あり本書を巻頭の叙



對土耳其  
政策

アラスカ  
及千島

は、中央亞細亞よりすると、及び高加索方面よりすると二つの方策を立ててあるのである。高加索方面より西に向へば、即ち土耳其に向ふ次第である。

(九) 更に西しては土耳其に向ふ露國の土耳其に向ふ政策は、過去數百年間辛辣を極めた次第であるが、今日は併ながら土耳其に對する外強の勢力は、單に露西亞のみならず、獨逸兩國即ち獨逸民族の偉大なる勢力を振ふに至つたことであるから、此觀察は頗る複雑となつて來て居る次第である。

(十) 最後に尙ほ一言しなければならぬのは、露國のアラスカ及び千島に對する方策である。アラスカは亞米利加に全く之を讓渡し、千島は明治八年樺太と交換し、其樺太の一部は、日露戰役の結果日本に行つたやうな次第で、露國の版圖の東の端は、今や大男總身に智恵が廻り兼ねる状態がある、併ながら露國外交の弾力性に富んで居る事は、最も露國を談せんとする者の等閑にすべからざる事である。例へば支那の康熙二十八年、西曆千六百八十九年が即ちネルチンスクの條約であるが、實にそれから千八百六十年浦潮斯德を取るに至るまで、百七十年間露國は雌伏の状態を執つて居つたのである。斯の如き弾力性のある外交は、殆ど露國の特色と云つて

露國外政  
の變遷

宜いのである。露國に就て注目すべき尙ほ一つの小さな事は、北米に對する移民であるが、其數は實に尠からざること、之が北米社會に及ぼす影響も亦頗る大である。

以上露國の對内外關係を十項に分けて觀察し來つたのであるが、之に於て大體の傾向が明瞭であらうと思ふ、即ち日露戰役に至るまで露國の外交政策の最も主力を集中せる所は日本海に在つた次第で、隨つて朝鮮及び滿洲は、露國が當時明けても暮れても忘るゝ能はざりし所であつたのである。然るに今日は丁度其時期の以前の政策に立返つて、全く西に向ひ來つた次第である。露國の外交線の極右翼は、即ち土耳其であるが、此所には新たに獨逸及び奧地利が勢力を伸ばし來つて居ることである。露國の外交線の極右翼は、即ち土耳其であるが、此所には新たに獨逸及び奧地利が勢力を伸ばし來つて居る。所謂波斯及び阿富汗、此方面が露國の今や最も力を用ひつゝある所となつて居るのである。露國の外交線の極右翼は、即ち土耳其であるが、此所には新たに獨逸及び奧地利が勢力を伸ばし來つて居る。更に翼を南方波斯灣及び亞刺比亞海に張らんとしつゝ、あると云ふことは、極めて重大なる事柄であるのである。



尙ほ露國の將來を語らんが爲めに、露國最近の變遷を一瞥するならば、日露戦役の最中に、露西亞は我輩が戦役前に豫言せるが如く、果して内訌の破裂を見た、露西亞の千五百の大學教授が聯合して大學革命を企て、其事の落著せるのは千九百五年八月二十七日で、正にポウツマウス條約調印の三日前であつたのである。我輩の豫言せるが如く、露西亞は戦役最中に於て、既に國會を開くべく餘儀なくされたのである。露西亞は國會を有するも、然も國會に適する人民を有せざるが故に、國會の開けたことから、未だ何等直接に文明的政治を享有するに至らぬのであるが、日露戦役の結果を以て、陸軍の敗北に非ず、海軍の敗北に非ず、教育の敗北と認めたる露西亞は、著々として國會的人民を養成せんことに腐心しつゝあるのである。其普通教育の進歩の偉大なるは、我輩が昨年十一月の拙論に於て述べたる通りである。之を一括して露西亞の將來を斷すれば、

(一) 露西亞は實に世界の將來ある強國である。

(二) 文明の進歩に依りて、露西亞が世界の禍源であると云ふ危険の程度は、次第に減ずることであらう。

(三) 露西亞は日本海支那海に出づるよりも、波斯灣亞刺比亞海に出づることが容易なることを、今や知り始めつゝあるのである。而して此點に於て、彼が他日必ず成功するの機會あることを疑ふべからざる次第である。地中海は彼に取つて殆ど空望である。と斷せねばならぬ。

(四) 西半球の大勢には、露西亞は無關係に了るであらう。

(五) 更に遠き將來に進んだならば、恐くは歐羅巴及び亞細亞の北部に、バイカル及びウラルを界とする三大強國を生ずるであらう。其中の最も強大なる國は、東はバイカルに至り、西はウラルを界とし、北北氷洋より、南亞刺比亞海に至る所の今の中央露西亞の地なるべく、而して東方の國、即ちオコク海よりバイカルに至る國は、稍々偏小にして、東方に若し一大強國が現るゝとするならば、其強國の勢力は、之に及ぶこと容易であらうと斷すべきである。

## 二 英國の覺醒と外政

第二段に考察すべきは英國と東洋との關係である。英國は往々稍々盛りを過ぎ



たる國であるかの如くに認められた併ながら其英國が第二十世紀に於て新たに覺醒し來つたことは最も刮目を價する。

英國の覺醒の第一の兆候は英國に於ける官僚政治の面目を新たにせることである。從來英國は自由を重んじ、自治を標榜して、餘り多く國家と云ふ絶大なる有機體の機關の發達に重きを措かなかつたのである。生物體は、其成分たる細胞が元氣よくなければ健全なる生物體を成さぬ、血液中の赤血球白血球の元氣が衰へると、其人は所謂血色の悪き人間になる。英國は此細胞の健全をのみ注意して、而して機關の健全と云ふことには餘り注意しなかつた弊があつた。然るに最近英國の覺醒の第一著手として機關及び其組織を完全にするにあらざれば、單に細胞の健全のみを呼號したところが、有機體としての國家社會は、充分なる發達を遂げて、列國と競争角逐することの出來ぬと云ふ點に氣付いたのである。英國各省の要路に立つ人物の選拔法等を見れば思ひ半に過ぐる次第であるが、斯の如きは我輩之を本年一月の拙論に於て述べてあるからして、今茲に繰返さぬ。

英國覺醒の第二の兆候は、其教育の刷新である。從來英國の教育は矢張自治に委

されて、系統的なる大なる研究の結果を實現することは無かつたのである。其教育も唯々人格の修養にのみ重きを置いた、固より之にも大なる長所はあるけれども、今日列國が競うて大綱細目悉く舉がる所の教育を遂げんとしつゝある際には、動もすれば英國教育は、後れを取るの弊があつたのである。然るに千九百一年に倫敦大學なるものを創立して、從來の試験機關であつた所の倫敦大學を改めて大陸主義の學問研究所たる倫敦大學と爲したのである。是等を首めとして英國の教育及び學問は、次第々々に大陸が長所を有する方面に向つても、大陸と競争することに向つて進みつゝあるのである。

英國覺醒の第三點は日英同盟である。此事は流石に肚の廣い識量の大なる英國民にして、始めて善くすべき事で、世界各國が有色人種を第二等以下の劣等國民として取扱ひつゝありし間に、又我日本が、未だ日露戦役と云ふ後期の試験を経過せざりし時に於て、早くも日英同盟を斷行したのである。彼れが所謂光榮ある孤立の外交政策を捨て、同盟政策に出でたと云ふことが、既に一大英斷であるのに、其同盟の對手を有色人種、第二流人種と認められて居るものに求めたと云ふが如きは、實



英露協約

に英國覺醒の著明なる例としなければならぬ。此英斷に依て英國が利益を得たことは幾何であるか、今之を擧ぐるまでもないのである。

英國覺醒の第四兆候は英露協約である。英國が露西亞との間に斯の如く立入つたる所の協約を結んで、以て外交上の利益を收め地歩を擴むると云ふことは、是亦一大英斷としなければならぬ。之を要するにエドワード七世陛下は實に覺醒時代の賢主として宜いので、今日に於て英國を以て、老帝國若くは老朽國と云ふが如く認めやうとするものは、世界の實勢に通せざるものと云はなければならぬ。

併ながら英國の現今に就て我々が最も知らなければならぬのは、其所謂大帝國主義が果して實現せらるゝのであらうか否やに在る。大帝國主義は秩序に傾き、植民地の發展自立は進歩に傾く、而して英國の植民人は實は少しく進歩し過ぎて居る、即ち植民地の發展自立の勢が秩序を以て遂げらるべき大帝國主義の實現よりも、較ぶ有望であると云はねるならぬ。併ながら各植民地は、其母國を一つにし、其國語人種を一つにし、又頗る其利害を一つにすると云ふことは争ふべからざる事實であるが故に、英國の廣大なる世界各地に散在する、諸々の植民地の間の聯合關係は

大帝國主義の如何の狀

各植民地の重量

成立するに容易すいのである。

偕て斯る世界に汎く散ばつて居る所の英國の大なる植民地、多數の植民地の中で、孰れが將來の世界外政の舞臺に大關係を及ぼすであらうかと云ふと、

(一) 加奈陀及び南亞弗利加は、自立の傾向が頗る大にして、而して英國の將來、隨つて世界外政の將來に對する關係は餘り重大であるとは云へぬのである。

(二) 濠洲は、是亦自立の傾向が頗る大である、而して是は太平洋に直接大關係ある次第で、我國の外政を料理するに於ても、極めて重大なる注意を拂はなければならぬ。

(三) 埃及は、我輩も今回更に之を旅行の一部に加へて、親しく觀察して來た次第であるが、是亦露國に對する波蘭の如く、埃及の變亂革命を思ふと云ふが如きは、最早今日に於て餘り多く期すべからざる事柄となつて居るので、埃及の事態は、最早確立せるものと云つて宜いのである。隨つて英國の埃及に於ける足場は、頗る堅いもので、此重要な形勢を利用して、此所に強大なる足場を有する所の英國は、此所を一つの策源地根據地として、其近傍に力を伸すことの容易なるは言ふまでもない。



のである。即ち英國が埃及に於て確なる根據を有すると云ふことは、亞細亞、土耳其、隨つて波斯灣の外交形勢に大なる關係勢力を英國が有することの、一つの理由となるのである。

(四) 印度は英帝國の最も重大なる一部であるが、此所は實は英吉利に取つても、頗る統治に困難なる所である。併ながら印度が總體として一つの印度と云ふものになつて、獨立騒ぎでもしやうと想像するならば、それは非常の間違で、印度と云ふのは、歐羅巴と云ふよりも大なるものである。(勿論歐羅巴は露西亞を除いた残りであるから)實に其人口に於ても、其人種に於ても、其宗教に於ても、其民族氣風の種々なるに於ても、印度と云ふは歐羅巴と云ふよりも、更に複雑なる觀念を、單純なる名稱の下に強て概括せるの弊を免れぬのである。我國の空想者流は、往々印度の獨立杯といふことを言ふことであるが、餘りに是は事實と縁遠い考と云はねばならぬ。故に印度は、統治の困難はあらうとも、富に於ける有力なる根據地として、埃及と相俟つて、波斯灣に對して、英吉利が重大なる勢力を有する一大要素なることは言ふまでもない次第である。

波斯灣に  
注目す

(五) 英國の東洋に於ける勢力如何と顧みると、是は嘗に日露戰役以後のみならず、實は少しく膨脹に過ぎて、手薄となつて居るの弊がある。英國の東洋に於ける勢力は、少くとも積極的ならずと云ふことが言へるのである。進取的よりも、寧ろ守成的であると云はねばならぬ。

是に於て之を綜合して考へると、英吉利は最も重要な、嘗に植民地の利害問題としてののみならず、延て本國の死活問題ともなり兼ねぬ、重大なる利害關係の地點として、波斯灣方面に最も深き注意を拂ふことは、其必然の勢である。

斯の如く述べ來りたる結果として我々の到著する所は、英國亦世界の何れの方面よりも、波斯灣を以て最も重大なる英國外政の著目點とするに至りつゝあると云ふのは、一大事實である。東に於ては日英同盟を以て無事を圖り、而して新たに英露協約を以て著々波斯灣方面の問題の平和的解決を企て、且つ實行しつゝあると云ふことは、英國外政の著々たる成功と認めなければならぬのである。

### 三 獨逸の飛躍



更に近頃に於ける獨逸の飛躍は最も注目を値する。獨逸は千八百七十一年以來一個の大なる國是を立て、分立せる諸々の小國を聯合して獨逸聯邦と爲し、普魯西は此聯邦を率ゐて一個の獨逸帝國を造り、此獨逸帝國を以て覇を歐羅巴の中原に稱し、此覇權を以て更に世界的大帝國を造らんとするの大理想を懐くに至りつゝ、ある次第である。其状態たるや、恰も頼朝が其初念一隅に割據し、伊豆一國を得て以て伊東氏に報いんとするに過ぎざりしものが、既にして關東を夷け、尋で六十六國の總追捕使となつたと頗る相似たる所の史實である。

今少しく獨逸最近の政策を一瞥して見やう。フリードリッヒ大王の時に、土耳其のムスタファ三世は、埃太利及び露西亞に敵對して普魯西に結んだが、今は獨逸のカイゼル、ウキルヘルム二世陛下は、耶蘇教國に對抗して土耳其王アブダルハミット陛下と結んだ次第である。千八百九十八年の十月、獨逸皇帝ウキルヘルム二世陛下は、其天を衝くの髯を逆だて、然も殊勝氣にパレスチナなる基督の墓に詣で、合掌禮拜して珠數を爪繰つた。其旅行の歸途に、珠數を爪繰れる其手を齧りて震天動地の外交的大經綸を實行されたのである。我輩は昨年三月中旬土耳其の君斯

手を離れ  
たる藝當れ

坦丁堡に遊び、其の市のスルタン・アマッド寺の前に据付けたる、獨逸皇帝よりその當時寄附になつた所の大なる水盤を見て、實に獨逸皇帝の活殺自在なる外交的襟度を欽羨措く能はざりし次第である。水盤は回教徒に取つて極めて神聖なるものである。斯の如くにして獨逸皇帝は、全く耶蘇教國に對抗するの價を拂つて土耳其の君民の歡心を得、而してバクダッド鐵道敷設の權利を獲得するの第一石を下した。次第である。果せる哉、千八百九十九年十一月二十七日、土耳其政府と、前獨逸銀行總裁、アナトリア鐵道會社社長、シイメン博士との間に協約は成立し、千九百二年一月十六日を以て敷設實行協約は成立したのである。然るに此君にして此臣ありて、千九百三年にビュウロフ首相は國會に於て演説して、我獨逸の政策は決して自働的に非ず進取的に非ずと言つて居るのである。其白々しさ加減は、如何にも政治的演劇の上乗なるものと云はねばならぬ。況や千九百年佛國巴里に於ける世界大博覽會の獨逸工藝館の門に掲げられたる額には、獨逸皇帝の有名なる句「吾人の將來は海上に在り」、如何にも獨逸皇帝の兩刀遣ひの達人たる、宗教と外交、海上と云ふ額を掲げて、バクダッド鐵道と云ふ陸上の大成功をする杯は、實に手を離れたる藝



パグダ  
ド鐵道

當と云はねのならぬのである。  
茲に少しくパグダド鐵道の何物なるかに就て諸君に御話しやう。抑々パグダド鐵道は、北海上に於ける一大商港漢堡より君斯坦丁堡を経て直ちに波斯灣に至る所の其大鐵道幹線の亞細亞方面の全部を形造るもので、その長さ三千五百キロメートル以上、價格にして一億六千萬圓以上を要すべき、世界の大きな幹線鐵道の一つである。抑々其過ぐる所の地域は、現今世界文明の大動脈ともいふべき漢堡、伯林、ドレスデン、ブライアグ、維也納、ブダベスト、君斯坦丁堡を北より南に縦貫し來り、實に數千年來眠れる世界、古代文明の地域に向うて進み入るので、此地域に向うて有形無形西洋文明の血液と精華とを以て復活の活を入れるものが即ち此パグダド鐵道である。地學者ジョオジスミスは、古バビロニア王國の榮えた時分のバビロン一市だけの人口を八百萬と算當して居るのである。所謂チグリス川エウフレエト川の世界最古の繁榮なる文明國家のあつた地域を此大鐵道は過ぐる次第で、今日に於ても之が適當なる經營を経るならば、忽ちにして繁榮なる商工區域と化すべきは疑ふべからざる次第である。且つ此線路は印度に向つて歐羅巴からの、新

歴山大王  
の再生

しき而して最も短き道である。但し昨年十二月の初に英露の間に協約せられたる所の波斯鐵道は、幾分之に影響を及ぼすが、併ながら其影響は好き影響と云ふの外はないのである。パグダド鐵道の經過する地域は、一言にしていふならば、其昔歴山大王が東方經路を試みたる其道を、再び開くものと云つて宜いのである。パグダド鐵道の政治的、經濟的及び文明的意味の重要なことは、是にても略々明かであらうと思ふ。

偕て此大鐵道は、其經營上から見ると云ふと、之に關係ある線路が總て四類ある。即ち純然たる獨逸の勢力の下に、獨逸人の事業としての會社の線路が四千四十キロメートル、それから獨逸の管理の下に在る會社の線路が二千五十七キロメートル、獨逸の勢力の下に立ち得る諸々の線路が二千三百五十八キロメートル、而して全く獨逸人の勢力以外の會社の線路は、僅に五百五十一キロメートルに過ぎないのである。更に之を精細に表として掲げて見やう。

第一類 純獨逸會社

サロニキ—モナスチイル

附 錄 外政の新局面

二二〇

八五三



アナトリイ會社線

内  
 ハイダル、バシヤ——イスマミット  
 イスマミット——アンゴラ  
 エスキイ、ケヒイル——コニア  
 コニア——波斯灣(コウエエト)

第二類 獨逸管理會社

オリエンタル諸線  
 メルシナ——アダナ  
 スミルナ——カツサバ及延長  
 スミルナ——アイヂン

第三類 獨逸勢力の下に立ち得る諸線

ヘヂヤツ線  
 バイロイト——ダマス  
 ダマス——ムセリツブ

一〇二〇

九一

四八五

四四四

二八〇〇

四〇四〇

九五八

六七

五一六

五一六

二〇五七

一六〇〇

一五五

一〇三二三八五

ラヤク——ハマヤ

サンジヤダクル——ダマス

ジヤファ——エルサレム

一八八

二五三

八六

第四類 非獨逸會社

サロニキ——君斯坦丁堡

ムダニア——プロツス

五一〇

四一

五五一

かくて北の方漢堡から蜿蜒として長蛇の蟠るが如くに、歐羅巴の中原を貫いて直に亞細亞の西部を貫通して南の方波斯灣のコウエエトに至るパクダッド鐵道は、その中間過ぐる處の都會に、亦世界に尤も大なる響きのある名邑を含んで居る。

漢堡

伯林

維也納

ブダペスト

君斯坦丁堡

二八二

七六一

二七八

一四一九

歐羅巴

六三二〇



ハイダル、パシヤ  
 エスキイ、ケヒイル  
 コニア  
 コウエエト

三三六  
 四四四  
 三五八  
 二八〇

漢堡若くは伯林より波斯灣頭に達するに、其距離は恰も北米横断に匹敵する、將來三晝夜にして達するは、さまで困難ではないのである、猶獨逸民族の經營による所の線路にして茲に洩らすべからざるは

ニス(セルヴィア)——サロニカ  
 維也納——トリエスト

三六〇  
 三四〇

の二線である、是等は歐洲の中原に國するものが地中海の東部、多島海を制馭する所以の要具である。

之を要するにバクダッド鐵道は、實に波斯灣の覇權を握る所の最も重大なる勢力である、東半球の中央を貫通する所の一大勢力である、東半球の中央に於て、將來若し大帝國が起り得るならば、此大帝國の大動脈となるべきものは即ち此バクダ

波斯灣の覇權

南米經營

ッド鐵道である、其意義の重要なことは實に測り知るべからざる程である、併ながら獨逸最近の活躍は、唯だ一つのバクダッド鐵道に止まらずして、尙ほ一つ極めて重要なものがあるのである、それは即ち獨逸の南亞米利加經營である、獨逸の南米經營の目的は、政治的及び商業的の二點に在るが、併ながら此二點は畢竟一に歸する次第で、決して相予盾せぬ、此目的を達するが爲に獨逸が執つた手段事業は、普通に見る所の殖民に非ずして、左の五つの事柄に存する、一つは大西洋の航路開始、事實上に於て大西洋の海上事業は、殆ど獨逸を以て最大有力者とせねばならぬ、殊に南亞米利加に向ふ所の大なる航路は、實に獨逸の掌中に存する、二つには銀行業の經營、三つは電車、電燈、水道其他の種々の工務經營、四つは投資事業、五つには各種の商業的發展、此五種の事業手段に於て獨逸人の南米經營は、今や堅確に進行しつつある次第である。

獨逸の南米經營に對する前途の妨障となるべきものは、實に北米合衆國である、實に南米に於て北米合衆國は獨逸を煙く思ひ、獨逸は亦北米合衆國を以て、最も有力なる競争の敵としつゝある、次に又亞米利加の大陸に於ては、凡米主義、パンアメ

前途の妨障



リカニズム」と云ふ一種の主義が行はれて居る、即ち亞米利加總體の聯合と云ふ主義である、是亦尠からず獨逸の南米經營に向つて前途の妨障と爲すべきものである。凡米主義の外に、凡イベリヤ主義、パンイベリヤニズム」と云ふのがある、是は西班牙葡萄牙人を以て主腦と爲し、亞米利加、少くとも南亞米利加は、イベリヤ半島からの植民人の子孫、即ち西班牙人、葡萄牙人の南亞米利加とすべしとの主義であるけれども、獨逸の眼中には此主義は無いのである。斯る多少の妨障のあるにも拘らず、獨逸人は、著々として、南米經營の事業を進行しつゝある、現今に於ては南米に於ける獨逸人は、ブラジルの南部に四十萬あり、其他は多少各地に散在し、今尙ほ孤立の状態に居る、而してブラジル南部の獨逸人は、其増殖の數が實に著大なる率を呈して居る、數から云ふと、以太利人の南米に殖民せる數は既に二百萬に達して居る、以太利の識者、例へば我輩の友人フェルリ君の如きは、非常に樂觀を有し、一昨年の六月九日、以太利の議會に於て、以太利の南米經營の忽せにすべからざることを論じ、以太利の社會黨をば、國民的國家的社會黨と變形せしむるまでに至つた次第であるが、併ながら要するに、以太利の將來に取つては重大なる關係があるけれども、若

功獨逸の成

手を握る

誤解せらるる米

し夫れ南米其者を主體として考察するならば、獨逸人の以太利人よりも遙に重要なことは言ふまでもないのである、日本人の南米に於けるは如何の状態であるか、之に關する情報は種々である、又之に關する意見も種々であるが、是は慎重なる調査研究を待つて、而して後に斷すべき事と確信する。

然るに斯の如く南米に於ける獨逸人の勢力が隆々たるに對して、其實競争者として立つの止むべからざるの勢であるに拘らず、炯眼なる北米合衆國人は、既に日本に先だちて、獨逸の心を得ることの必要に著目して居る次第である、南米に向つて事を爲さうと思ふものは、獨逸と手を握ることが極めて必要である、我國の外交料理家は、是等の點に就て果して如何なる考を蓄へて居るのであるか。

#### 四 米國と東洋

第四段に我々が考察しやうと思ふのは、即ち米國である、此米國に就て殊に一言を敢てすべきは、我國の米國を誤解せるや、日甚だ久しい、故に我輩は米國の真相を諸君に詳細に紹介することの、極めて大切なるを感ずる、然れども今は唯と外政



上の我輩の結論の證明に必要なだけの程度に止めて置かうと思ふのである、米國の社會の實質が近時大なる變遷を遂げて居ることに就ては、我輩昨年十一月の本誌にも既に多少之を説いた。ベンジャミン、フランクリンの時代には、米國人の家族は少くも八人より成立することが普通であつたが、今は二人より成立する家族が殆ど普通となつて居る、其大家族の時代は既に過ぎて、今や滔々として皆な小家族となりつゝある。即ち米國の家族に於て、子供は厄介物と視らるゝの傾向が極めて進みつゝある次第である。是に於て乎卓拔爛眼なるロオズヴェルト君は、米國民に一大警告を與へて、米國民は今や正に「人種的自殺」を犯しつゝあると論じて居る。是は米國社會實質の變遷の第一點である。

米國に植民し來りたる民族の重なるものは、言ふまでもなく當初英國人であつた。就中英國に於ても、當時の歐洲に率先せる文明の進度を有せる英國に在りて、更に高尚に過ぎる程の理想を有せるピウリタン、グエユカア等の宗徒であつたのであるが、爾來第十九世紀の終りに近づくに隨つて、歐羅巴より來る所の植民人は、次第々々に獨逸人以下が多數となり來つた次第である。第十九世紀の終りに於ける

市俄古二百萬の人口の中獨逸人は四十萬之に亞ぐは愛蘭人にして三十萬之に亞ぐは以太利人にして二十五萬と云ふが如き大なる數を示すに至つた次第である、當時の獨逸人愛蘭人、以太利人は、英人に比して、如何にするも文明の程度の劣つた民族であつたことは言ふまでもない。然るに僅に十年以後の昨年米國へ行つて見ると、最早歐洲よりの植民人が、是等の三民族であつた時代すらも既に過去つて、十九世紀の終りまでは年々二十五萬以上の移住民を算へた所の獨逸人は、此二三年來俄然として五萬臺に減つたのである。而して最も多い移住民を送る所の歐羅巴國民は、實に露西亞人、アルメニヤ人及び匈牙利人であるのである。是は米國社會實質の變遷に就て注目すべき第二點である。

然るに黒人の増殖は又非常なるもので、亞米利加八千餘萬の人口の中、今は既に一千萬餘の解放せられたる黒人がある、其増殖率は實に一萬に對して百二十人に達するので、疑々として其數の進むことは驚くべきであるのである。是は第三點である。

然るに白人は例の小家族主義よりして、土著の白人の減退するのみならず、甚だ



白人の減退

奇妙なる現象は、一たび歐羅巴より米國に移住すると、皆な此米國病に罹つて、其人口増殖は、彼等の本國に於けると甚しき違ひを呈する次第である、即ち黒人の増殖に對して、白人の減退は、極めて注目すべき第四點である。

移民的社會都會國

之を綜合して米國の社會を實質上より觀察すると、米國は要するに何時まで經つても移民的社會を免れぬのである、即ち其土地に於て永く住し、代を重ね、歴史ある鏑のある所の國民社會と云ふものは、亞米利加に於ては却々之を待設くべき望みは無いのである、加之移民の種は斯の如く次第々々に悪くなる、之を譬ふれば、一の湖水に於て、湧くべき所の泉は既に涸れて、而して注込む所の濁水は、滔々として其濁を重ねつゝあると云ふ状態である、且つ米國は、如何にするも都會國たるの狀態を免れない、自治體に村落と都會がある如く、國にも村落國と都會國とある、米國の如く、人口が自然増加に依て増さずして移住に依てのみ増し、經濟上の變動が激烈で、人間は一代に於て活動するのみで、活動の成績は不足でも長く細く活動する、と云ふことが乏しく、總體に於て其社會生活の調子が都會的であると云ふことは、實に米國を以て著しとする、凡そ金儲をしやうと思ふ者は米國に行く、米國は實に

米國の教育

金が廉くして物の高い所である、米國の物を悉く高くすると云ふことは、即ち金を廉くする所以である、故に書物の如きにまでも、米國は二割五分の關稅を課けて居る、是れ米國は金の廉い所なりと云ふ其特徴を保たんが爲めである、蘿蔔の廉い市場に向つて蘿蔔を買ふものが蟻集する如くに、金の廉い國に向つて金を買ふ人間其の寄集まるのは當然である、即ち米國は金儲の市場である、此點に於ても米國は村落國に非ずして、都會國の最大標本であると謂ふべき理由がある、斯の如く米國の社會は實質的に大なる變遷を遂げて居るので、隨つて其教育の傾向の如きも之に依て理解することが出来るのである、我が北海道に旅行する觀察者は、北海道の父兄が己れの無筆無學と云ふことに懲りて、子弟に向つて教育を授け、教育費の爲めに大なる資本を投ずることに於て、他の七道人士が夢想せざる程教育に熱心なることに注目するが、米國人が教育に熱心し、教育に巨額の資金を投ずることも、亦此に依て思半に過ぎる次第である、實に北海道は我國内の米國である、社會觀察者は、北海道を研究すれば、米國研究の既に大體を卒業せるものと云つて宜いのである、米國人が教育を重んずると云ふことを、原因に於ても結果に於



愛國教育の裏面

米國の教育を觀察せる者は、近頃又愛國教育の盛んなることを説くも、併ながら是亦其裏面を洞察するの必要がある。ロオズヴェルト君は近頃新國民主義を唱へて居るが、實に米國は國民の地方的感情の強くして、一個の北米合衆國と云ふ大國家に對する統一的愛國心の乏しいことは殆ど豫想外である。日本人は到底之を夢想することも出来ない次第である。此場合に於て餘程厳しき愛國教育を主張しなければ、到底尋常一様の國家社會すらも出来ぬことである。それを米國の教育者が、近頃大に愛國教育を授ける、愛國教育の手本は米國に之を求むべしと云ふならば、非常の愚論と云はねばならぬ。

米國の女子教育は亦頗る奇體なる成績を呈して居る次第で、嘗て我國の女子大學校の手本ともせられ兼ねぬ所のプリンモオル女子大學校で統計を取つたところが、二十六人から成立する一つの級で、婚姻せる者が十人、而して十七年間に、子供が其總體の中から、僅に一人さへ生れなかつたと云ふ實例もあると云ふやうな次

女子教育と民族的自殺

第で、是は勿論取除の例であらうが、何しろ米國に於ける所謂女子高等教育と、ロオズヴェルト君が疾聲大呼して、國民に猛然たる反省を促しつゝある所の、人種的自殺との間に一種の關係のあることは、略々想定せらるる次第である。是に於て流石に米國女子教育者も此實勢に省みて、幾分賢母良妻主義を加味することの必要を感じて來た、それを又皮想なる觀察者が誤つて、賢母良妻主義の本家本元は米國であると言ふのは、如何にも片腹痛き次第である。

最後に又一つの例として掲げるならば、意志教育が米國では非常に盛んだと言ふ、是は併ながら其民族の出所を顧みると、必至的傾向と云はねばならぬ。大西洋を旅行する旅客は、其汽船の三等室若くは四等室に於て、殆ど歐羅巴の乞食とも見られる所の下等人種が、累々として二千或は三千と云ふ大なる數に於て、一船毎に西に向つて航海することを認むることである。豈に料らんや此乞食以下の歐洲の貧民が、實に一代經たざる中に亞米利加に於て立派なる米國國民となり、立派なる米國の資産家となる次第である。斯る歐洲の下層人民は、唯だ一つの點に於て歐洲の乞食と違ふのである、それは即ち意志の鞏固と云ふ點に在る、品位なく、教育なく、勿

意志教育



經濟的大變遷

論資産無き其日の活計にも困る所の連中の中で、意志の弱い者は本國に留つて乞食となり、意志の強い者は大西洋を渡つて米國で稼いで、我皮想なる米國觀察者流が神様の如くに仰ぐ所の米國の公民、米國の有力者、米國の富豪となる次第である。然らば斯の如き連中の子弟たるものが、意志の點に於て特に其強きを表すと云ふことは、其必然の傾向と云はねばならぬ。

併ながら米國は、斯る社會實質の變遷と同時に、又經濟的大變遷を経験しつゝある次第で、随つて政治上に於ける政策主義の變遷を餘義なくされつゝある次第である。米國は斯の如くにして馬車馬的の稼人の集中せる舞臺である、隨て其經濟的活動は實に偉大なるもので、殆ど瞬く間に其生産は過多生産の必然の結果に至りつゝある、獨逸が既に晩近の教育の結果として、動もすれば經濟上の過多生産に陥らんとしつゝあるのであるが、米國は尙更其状態がある、米國の生産事業は實に大仕掛である、是に於て獨逸すらも大に爲しつゝある所の市場競争と云ふことに向つて、米國が餓えたる者の食に馳るよりも更に猛烈なる勢を以て突進することは必然の勢である、而して斯る市場は世界何れの處に之を求むるか、と云ふに、歐洲は

凡米主義帝國主義

大體に於て少からざる生産の發達を成遂げつゝある所であるから、米國に向つて好き市場を得んことは出來ぬ、是に於て東洋に向ふことは當然である、成程亞弗利加や其他の野蠻國に於ても、生産は起らぬことはないけれども、人智の蒙昧なるが爲め、人口の稀少なるが爲め、決して好き市場となることは出來ぬ、即ち斯る經濟的活動の結果、突進するが東洋に向ふのは止むを得ぬ次第である、是に於て此經濟状態より來る所の政策の變動も、亦當に相伴うて進むは止むを得ぬ次第である。

初め亞米利加は亞米利加人の亞米利加なりと云ふ、モンロオ主義が長らく米國の對外政策の綱領となつて居つた次第であるが、既にして十九世紀の終りよりして、右の經濟的原因に主として基く所の政策上の變遷は、茲に新たに凡米主義を生じ來つた、千九百一年に於て、米國バッファロオ市に開催せられたる凡米大博覽會の如きは、其一つの示威運動である、然るに凡米主義一轉して直ちに帝國主義となり、即ち亞米利加は、管に亞米利加に向つて歐洲其他列國が一指を指すことを許さざるのみならず、南北亞米利加を以て凡米主義の名稱の下に、北米合衆國の勢力の下に置かんとするに止まらず、外國就中東洋に向つても、米國の發展の膨脹的勢



力を波及せんと期するに至つた。是が即ち現代の米國の上下に漲る所の帝國主義の時代となつた次第である。

排支那人  
政策

此時代に於て米國は、嘗ては人種的僻見として、赤色人、黒色人を排斥し、壓迫せるより一轉して、更に黄色人排斥壓迫の時代と進み來つた。是正に對外政策よりせる帝國主義の時代、即ち對東洋主義の時代が、社會上にも現れ來つたる一の現象と見なければならぬ。此對東洋的政治主義、及び對東洋的人種的僻見の第一著は排支那政策であつた。第十九世紀に於ける米國の對東洋政策の人種的僻見に於ける現れは、支那人排斥であつたが、今世紀に於ては純然たる日本人排斥、即ち排日主義となつた次第である。其此に至つた所の道行を察するに、明治三十二年即ち千八百九十九年に米國は布哇を略取し、第十九世紀の終り西米戰爭の結果、千九百一年に比律賓を略取し、尋て日露戰役以來滿洲に著目することが盛んになり、而して昨年即ち千九百十年二月には、大膽にも我が南滿鐵道を放棄せんことを我國に向つて要求し來つたやうな次第である。斯の如くにして米國が東洋に切込み、其勢力を東洋に及ぼすに於て、殆ど無謀に近いほど遠慮會釋もない状態になつて來たといふのは、

排日主義

日米戰爭  
論

脈々として歴史上の徑路の辿るべきものがあるのである。

斯の如き時機に於て、米國一部の無識者流の間に、日米戰爭論の現るゝも無理ならぬ次第である。我輩は昨年七月七日にボストンへ著したのであるが、ホテルの一隅に於ける新聞小僧が、黄色新聞は要りませぬかと言ふ、それを買つて見たところ、其日のボストン、アメリカンと云ふ新聞で、例のハアスト一流の最も急激なる俗に媚びる所の排日的煽動的の新聞であるが、其劈頭に、日本は戰爭の準備最中である」と一寸五分大の大活字を以て書いてある、中を讀んで見ると、日露協商が成立つたと云ふだけの三行許りの電文で、あとはハアスト氏曰くと云ふ文句を書いて二段も埋めて居るに過ぎぬのである。各地の停車場に於ける新聞雜誌、小冊子の見世には、日米戰爭杯を仕組んだ種々の小説がある、例へばフィッツジェラルドと云ふ小説家の『日米戰爭未來の夢』と云ふ小説杯は中々巧く書いてある、然るに斯る小説や煽動的黄色新聞に止らずして、ホオマアライと云ふ大佐が『知らぬもの佛』と云ふ題の著述をして居る。是は題號は如何にもやかましいけれども、兎も角も形だけは専門の戰略家の著述として書いてあるのである、それを繙いて見ると、果して著



者が眞に戰略學に於ける造詣のある人であるかどうか疑はしい、或は矢張俗に媚  
 びる所の煽動家が、形を戰略に藉りて、日米戰爭を鼓吹せるに過ぎないと思ふが、兎  
 も角も左様の著書すらも出て居るのである。何れも兎もあれ、斯る議論が盛に米國で  
 聞ゆると云ふことだけは、一の明確なる事實である。併ながら彼等の言ふが如き日  
 米戰爭杯が、今日行はるべき筈のものではない、是は戰略上から批判して事實殆ど  
 不可能である。米國が比律賓を取つたと云ふことは、既に戰略上からすると、長鞭馬  
 腹に及ぼすの歎があるのに、日本豈に此愚に倣はんやである。  
 併ながら日米の關係は、一日と迫りつゝあることは事實である。千九百十五年  
 の一月までには、パナマ運河の完成は今や疑ふべからざる事實である。而して米國  
 は近くパナマ運河に向つて要塞を築き、防禦の責に任じやうとしつゝあるのでは  
 之を要するに日本と米國との間に於ける利害の衝突は、到底避くべきではない  
 のである。米國が其社會の民族の實質に於て、今とは大變遷を爲さざる限り、米國に  
 於ける經濟上の大勢は變ることなく、米國の經濟上の大勢の變らざる限り、米國に  
 向つて市場競争の政策は避くべからず、市場競争の政策の避くべからざる限り、米

パナマ運河

利害の衝突とは別

國の、東洋に、著目することを止み難く、米國が東洋に著目する限り、而して日本が東  
 洋に國することゝを止め、せざる限り、日米間の利害の衝突は、到底避くべきもので  
 ない。  
 併ながら茲に我輩は明白に御断りをしなければならぬのは、利害の衝突は、避く  
 べからずと云ふことは、断じて戰爭の避くべからずと云ふ意味ではないのである。  
 此誤解は、獨り我國及び米國の一般者流に於てあるのみならず、政治家も亦或はそ  
 れに陥りはせぬか。利害が衝突して居ることがあればこそ、外交の必要があるので  
 ある。即ち利害の衝突を、平和の間に處理して行くことと云ふことが、それが外交の重大  
 なる任務であるので、關係兩國の外交家が、或は其技倆が無く、或は其注意を怠るこ  
 とがある、終には外交で處理の出來た所の衝突が、戰爭を以てするに非ざれば、解  
 決する能はざるが如きに立至るのである。外交を以て、一つの事件の起る毎に片端  
 から之を處理して行くならば、何時まで経つても、利害の衝突する關係兩國の間に、  
 戰爭の必要は断じて生ずる氣遣の無いものである。而して外交を以て平和の間に  
 事を處理するの根柢は、言ふまでもなく、兩國が相互に理解することに於て存する、



兩國が相互の關係、相互の地位を自覺するに於て存するのである。我輩は嘗ても世人に語つたことであるが、外交と云ふものゝ懸が溜まると、戦争と云ふ月末勘定が止むを得ぬことになるのである。我輩の利害衝突論を以て戦争論と誤認し、衝突不可避論を以て日米開戦論と誤解することを世人がされないやうに、充分に是は辯明して置く次第である。我輩は彼我外交當局者の力量と識見とに信頼するものであるが、故に、日米の間に於て、永來永劫斷じて開戦の如き不祥事の起らざることを確信しやうと思ふものである。故に衝突論と平和主義とは、何等矛盾するものではないのである。

來米危機  
の多き  
將き

米國は我國の米國崇拜者流杯が動もすれば文明國の眞先に進めるものと見る所であるが、米國の將來は實に露國の將來に較べて甚だ危機の多いものと云はなければならぬ。米國が將來に於て、其社會國家の健全なる發達を遂げんが爲めに、必ず經過せざるべからざる難關は、

- (一) 人種の融合如何と云ふ社會的問題
- (二) 各州の渾一如何と云ふ内政的問題

(三) 東洋南洋殖民地の經營如何と云ふ國內關係的問題

(四) 南米否な寧ろラテン亞米利加列國との利害錯綜の紛糾の解決如何と云ふ實際關係的問題

(五) 其民族が系圖的でないからして、人智は常に開發せざれば直ちに退歩する危険がある、即ち其人智の開發如何と云ふ文明的問題

以上の五問題は米國の特有なる而して米國が健全なる國家社會として立つに至らんが爲めに、必ず突破せざるべからざる難關である。此の難關ありて、而も統一無く、秩序無く、文明的理想無くして、而して唯だ精力エネルギーのみの強いものとして何時までも止つて居るならば、外交に於て曾ては露西亞が實に世界の危險物であつたやうに、米國は恐くは世界の危險物として止まることであらう。故に米國が首尾よく是等の難關を切抜けるや否やは、獨り米國に取りての重大なる問題なるのみならず、實に世界の平和に取りての極めて重大なる問題と云はなければならぬのである。